

## 第5章 上野1号墳・埴輪棺群

上野1号墳は標高約67mの上野遺跡中央に位置する大型円墳である。調査の結果、長径約40mの椭円形を呈し、古墳時代前期末頃の古墳としては、出雲市の大守1号墳<sup>(註1)</sup>や松江市の火垣大塚1号墳<sup>(註2)</sup>と並ぶ出雲地方でも最大級の古墳であることが判明した。

上野1号墳は、眼下に国道54号線を見下ろす尾根上に立地しており、墳頂部からは宍道湖などを見渡すことができる。谷を挟んだ東側の丘陵には水溜古墳群<sup>(註3)</sup>が立地するなど、中期以降の古墳は幾つか見られるが、周辺に前期に遡る大規模な古墳は知られていない。水溜古墳群北側に位置する清水谷1号墓が弥生墳丘墓として知られているほか、上野遺跡北方に位置する佐々布下1号墳<sup>(註4)</sup>から、前期の土器が出土しており、小規模なものであれば、弥生～前期の墳墓も知られている。また、上野遺跡西方に位置する杓子觀音I～1号墳<sup>(註5)</sup>が、遺物を全く伴っていないが前期に遡る可能性がある。

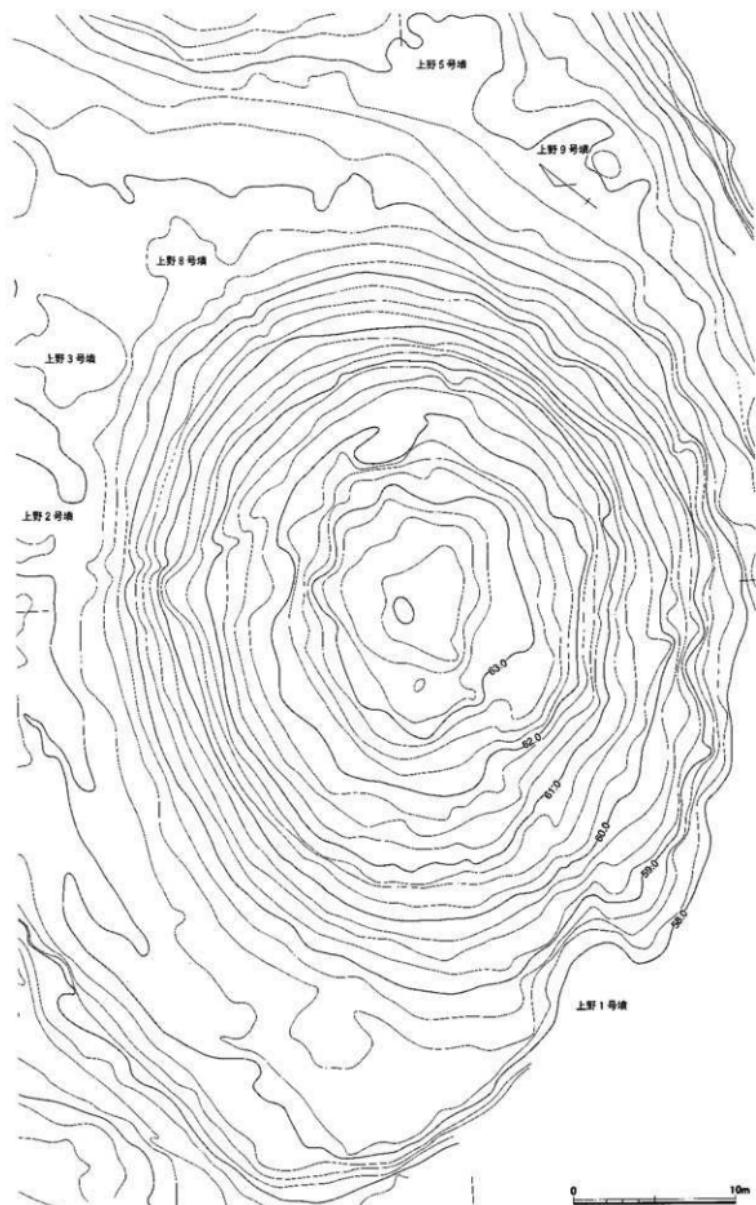
調査前の上野1号墳は、頂部の平らな小山になっており、頂部周辺には、米待石（凝灰質砂岩）と陶器の破片が散乱した状況であった。1号墳は周辺の他の古墳とは全く切り合ひが見られないが、中世には何度かの再利用があったらしく、墳丘面に多くの道が走り、削平による改変箇所が多く見られる。1号墳北側には、1号墳を取り巻くように2・3・8・5・9号墳が位置しており、調査前の地表面観察でもマウンド状に盛り上がって見えていた(第95図)。なお、調査前の時点では、埴輪棺の存在は全く認識できなかった。

### 第1節 上野1号墳の墳丘

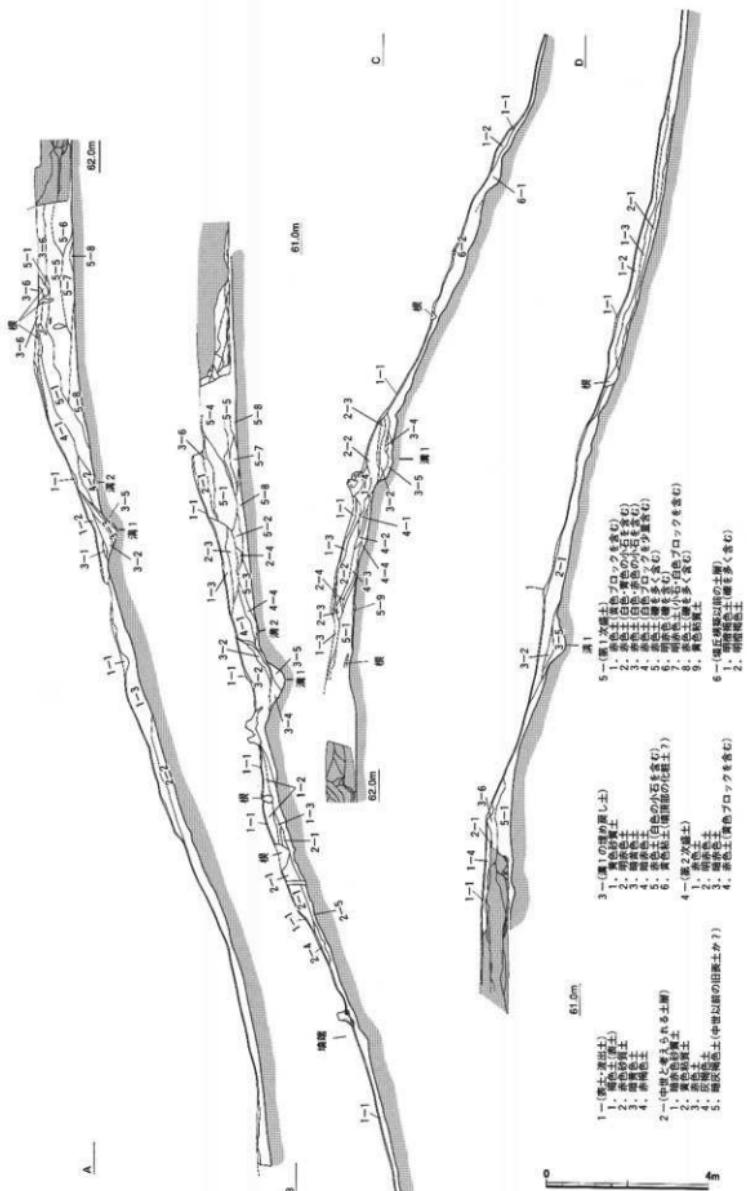
1号墳墳丘の表面観察では、長径約40mの小山のような地形で、標高62m付近に幅1m程のテラス面が一周している状況であった。テラス面があることから段築であることがうかがわれた一方、このテラスが墳端である疑いが浮上し、20m以下の古墳である可能性も考えられた。また、地表面観察では周溝等は見られず、明瞭な傾斜変換点も存在しないことから、墳端が全く判らない状況であった。そのため、調査では推定墳丘の長軸方向とそれに直交する方向にトレンチを設定し、土層断面(第96図)からの墳丘の確認作業を行った。

土層断面では、墳頂部を中心に標高62mより上は厚さ1mに亘る厚い盛り土で構築されていることが判る。また、墳丘中程にあたる標高62m付近では幅約60cm、深さ約20cmの断面V字形の溝が掘られている。この溝の位置は表面観察時のテラスに一致し、埋まつた溝の上面がテラスになっていることが判る。土層断面でも周溝は見られなかつたが、標高59m付近には地山面での明確な傾斜変換点があり、これを墳端と認識した。

土層断面から推定される墳丘の構築は次のとおりである。標高62m付近で元の丘陵頂部を削平し、その周囲に断面V字形の溝を掘削している。この溝を割付線として、溝より内側に盛り土を行い墳頂部付近の墳丘を構築する。この盛り土も概ね2回に分けて行われており、その1回目の割付線も後に検出している(第98図)。溝より内側の盛り土を終えた後には、溝の埋め戻しを行っている。溝底部には、腐食土等の堆積は見られず、溝より内側の盛り土を終えた後、時間を空けずに行われているものと思われ、この付近を段築状に平坦面にしている。東トレンチの溝付近掘削中には、溝底部の3～5赤色土から埴輪の小片が出土している。このことから、この溝を墳端とする可能性も検



第95図 上野 1号墳調査前地形測量図 ( $S = 1:300$ )



第96図 上野 1号填埋丘土層断面図 (S = 1:120)

討したが、他の大半の埴輪片が溝上面から出土していることから、墳丘完成後の埴輪片の流れ込みではなく墳丘が完成する以前に埴輪を搬入している可能性を考えたい。墳頂部付近は、表土直下に3-6黄色粘土が堆積しているが、この土は10cm前後の厚みを持って丁寧に盛られており墳丘上面の化粧土であったものと思われる。この堆積は墳頂部付近でしか検出していないが、溝の土層堆積状況から、溝を埋め戻した後に行われている可能性が高い。各主体部は、この3-6黄色粘土を掘り込んでおり、墳丘が完成した後に掘り込まれている。

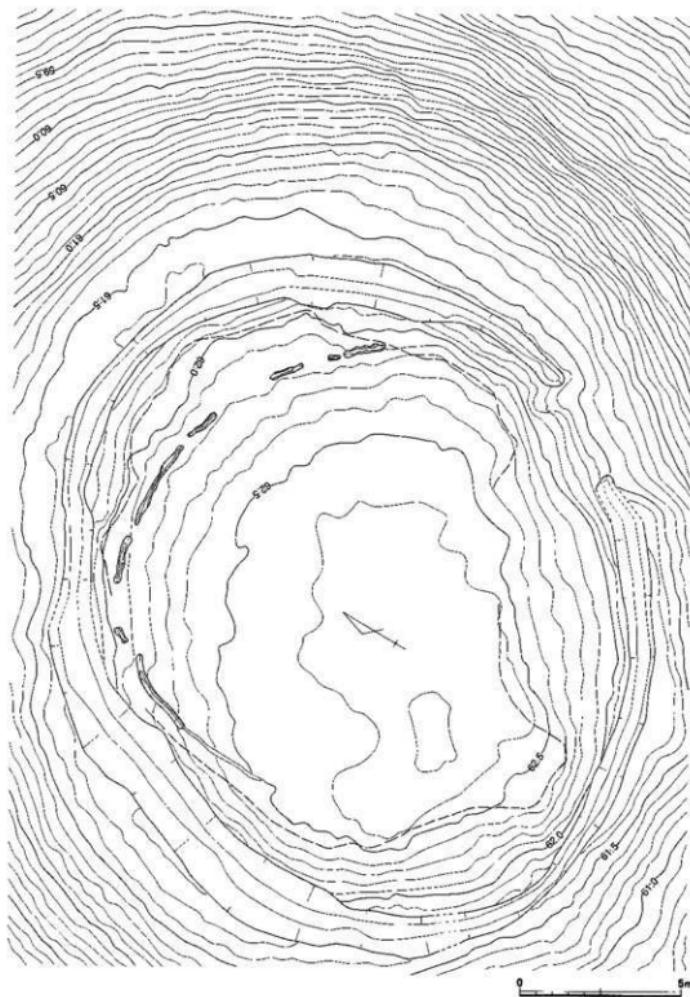
第97図は、表土除去後の状況を示したものである。墳頂平坦面は南西側の一部が崩落しているが、直径13m程の円形になるものと思われ、墳頂部の標高は約63mである。墳頂部には微妙に主軸をず



第97図 上野1号墳墳丘測量図 ( $S = 1:300$ )

らした3基の主体部が見られる。標高62m付近に幅3m近いテラスを巡らせている。テラスより下方は地山削り出しで、標高59m付近に墳頂と思われる傾斜変換点が巡る。この傾斜変換点を墳端とすると長径39.3m、短径34.8mの橢円形で、高さ4.5mの橢円形墳となる。1号墳墳端から北東に6m離れた位置からは埴輪棺4基を検出した。埴輪棺の位置はいずれも1号墳の墳端に掛かっておらず、墳丘から続く斜面が途切れた平坦面上に位置する。

第98図は、1号墳墳頂の盛り土を除去した状況である。元の地形を標高62.5m付近で水平に削平



第98図 上野1号墳盛土除去後地形測量図 ( $S = 1:150$ )

し、長径約13m、短径約10mの楕円形の平坦面を造りだしている。その下方の標高62m付近には、広いところで上面幅1.8mの溝（溝1）を巡らせる。溝1は長径約20m、短径約17mの楕円形を描いているが、この大きさは墳端の大きさの50%にほぼ一致し、楕円の描かれる方向も墳端の形状と同様である。

溝1の内側でも断続的に非常に小さい溝（溝2）の痕跡を確認した。溝2は、広いところで幅20cm、深さ5cm程しかないもので、ほとんどの部分が僅かな窪みとして検出できたに過ぎない。溝2は水平には巡らず、墳頂部の削平面や溝1の位置関係とも一致しない。墳頂平坦面に相当する削平面が標高62.5mのセンターにほぼ一致し、最終的な墳丘の中心より南側に寄った位置に弧心があるのに対し、溝2は墳丘中心よりも北の傾斜地に弧心を置いているようで、検出できた部分でも標高62.0～62.5mと50cmもの高低差があり、検出できなかった南側は更に上がる可能性がある。また、溝1が楕円形に掘られているのに対し、溝2はほぼ円形を描くものと思われる。溝1と溝2の位置関係は、北側では約2.7m離れるのに対し、東側と西側では接近し、最短で1.8mしか離れない。検出できた部分は北側の半周分であるが、当初は一周していたものと思われ、直径約14mの円を描くものと思われる。溝2の掘られた位置は、早い段階の盛り土（第96図5-1赤色土の始まり）に一致することから、この溝も盛り土を行う際の割付線であったと思われる。溝2が溝1の平面形や、墳頂部の削平面の弧心と一致しないことから、傾斜地に盛り土を行う際の弧心の移動に伴うものと考えられる。つまり、元の丘陵の形状が最終的な古墳の形状に一致しないため、最初の盛り土で地山の成形面の北側に平坦面を拡大する作業を行い、墳頂部付近の弧心を最終的な墳丘の弧心に合わせてから、墳丘全体への盛り土を行うという作業工程が考えられる。なお、上層断面には土壌積みなどの細かい単位を検出することはできず、土層毎の様相は斜めに落ち込む厚い単位が多く見える。小単位でこまめに土を運び積んだ様子はうかがえず、むしろ大胆に多量の土砂を流し込んだ、という印象が強い。

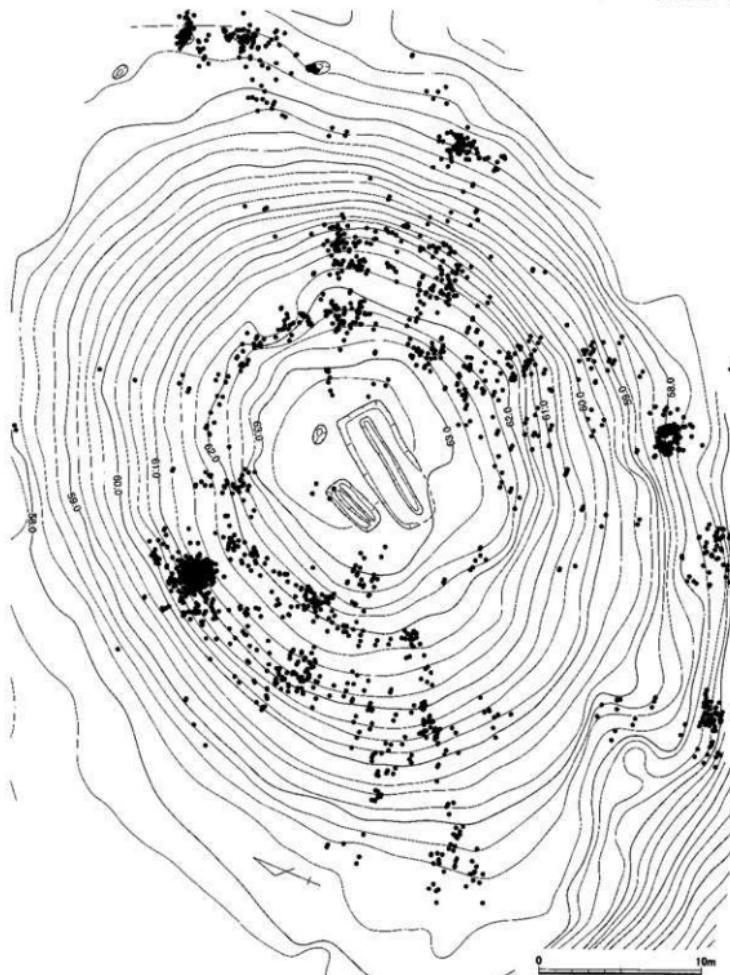
上野1号墳を始め上野遺跡の古墳には、葺き石の存在は認められない。表土掘削中にも、墳頂部の付近の中世に持ち込まれたと思われる米袋石片以外には目立った石は見られなかった。墳頂部で化粧土と考えられる3-6黄色粘土を検出しており、この土が葺き石に代用されていた疑いはあるが、周辺の状況から墳端まで覆われていたとは考えにくい。

表土除去後の墳丘面からは多量の埴輪片が出土しているが、埴輪の設置痕跡を確認することはできなかった。中世に墳丘の改変が行われていることもあり、表土中からも多量に出土しているほか墳丘外からも多く見られ、原位置を確認できた個体は皆無であった。第99図は、表土除去後の墳丘面での埴輪の出土状況を示したものである。発掘作業工程上の問題で斜面毎のばらつきがあるが、概ね出土傾向を示すものと思われる。それによると墳頂部からも少量ながら埴輪片が出土しており、中世の改変に於いても土を持ち上げた痕跡は認められることから、墳頂部にも埴輪を置いていた可能性が高い。概ね墳丘全面から出土しているが、最も目立つ場所は標高62m前後の位置で、溝1やその上面のテラスの位置に一致し、このテラス部分かそれより上方に埴輪が置かれていたことを示すものと思われる。テラス部分から出土する埴輪片はいずれも破片が大きいことから、テラス付近には埴輪が立っていたものと思われる。仮にテラス面上に埴輪が設置されていれば、テラス面はその下層に溝1が位置しており、複雑な盛り土で構成されていることから設置痕跡を残さなかつたという可能性が考えられる。また、トレンチ1の溝1底部から埴輪片が出土していることより、溝1

の埋め戻しと埴輪の設置は同時に行われている可能性がある。

標高62m付近のテラスより下方の斜面から出土した埴輪は、ほとんどが小片で出土傾向も地形的に窪んだ部分や上面が破損している1号埴輪棺周辺に集中している。斜面中程からの出土はまれで、大半が上方から転落してきたものと考えられる。墳端付近の墳丘は地山削り出しによると考えられることから、墳端付近に埴輪が設置されれば必ず痕跡を残すと思われ、墳端付近には埴輪の設置はなかったものと推定される。

なお、上野1号墳第3主体部や周辺の埴輪棺に使用されている埴輪は、いずれも底部付近の損傷



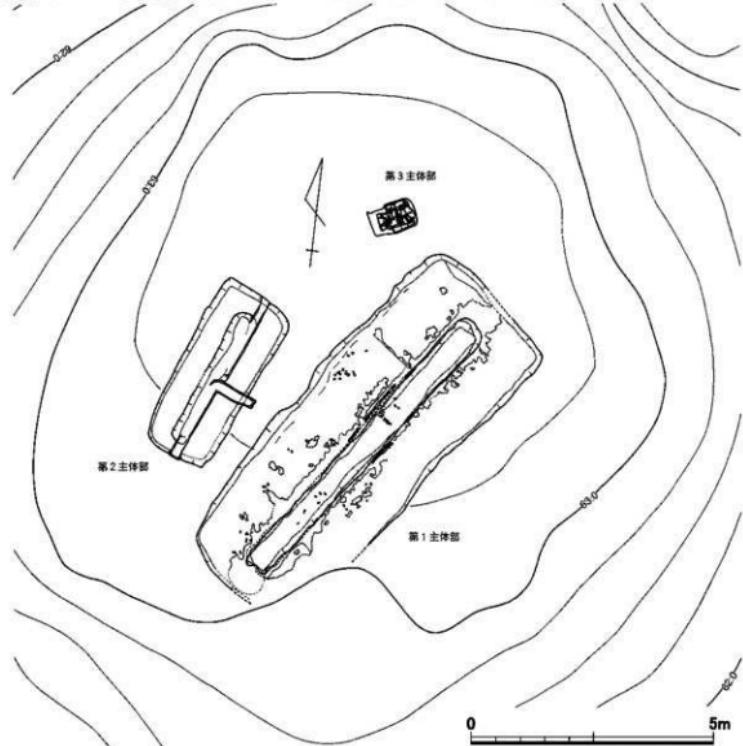
第99図 上野1号墳墳丘埴輪片出土状況 ( $S = 1:300$ )

が目立つものが多く、蓋に使用される埴輪はいずれも破片である。当初から棺に使用するつもりで取り置いていたものとは思えず、墳丘に設置されていたものを抜き取って転用したと考えられる。

## 第2節 上野1号墳の主体部

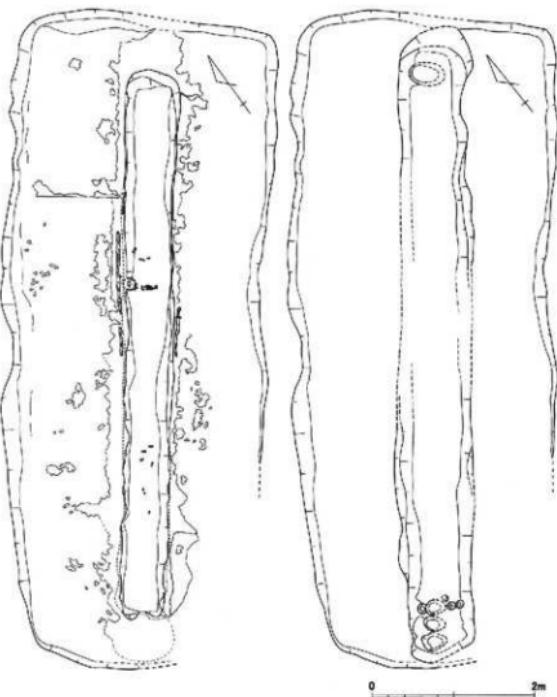
上野1号墳墳頂部からは3基の主体部を検出した(第100図)。第1主体部は粘土棺に豊富な副葬品を持つもので、この古墳の中心主体部と考えられるものである。第2主体部は木棺を納めた土壇で、規模は小さくはないが副葬品は見られない。第3主体部は円筒埴輪転用棺で、蓋には十器底部を使用するものである。3基の主体部はいずれも微妙に主軸をずらしており、第1主体部は北東—南西方向の主軸を、第2主体部は南北方向に近い主軸を、第3主体部は東西方向に近い主軸を取る。第3主体部では見られなかったが、第1・2主体部はいずれも3—6黄褐色粘土(第96図)を掘り込んで造られており、大きく時間を空けずに造られているものと思われる。

**第1主体部** 第1主体部(第101~106図)は、上野1号墳の中心主体部と考えられるもので、北東—南西方向に主軸を取る全長8.1m、全幅3.3mの墓壙である。ほぼ長方形を呈し、南側のコーナーは削平されている。墓壙の中央に長さ6.5mの削竹形木棺を納めた粘土棺(第101図左)がある。墓壙は



第100図 上野1号墳墳頂部主体部配置図(S=1:100)

2段に掘られており、墓壙上面は標高63.5mで、約70cm下って墓壙床面を構える。周囲の壁面はほぼ直立し、標高62.8mの位置に平坦面を持つ。第101図右は棺床粘土除去後の状況である。墓壙の中央に長さ7.9m、幅96cm、深さ24cmの溝を掘削し粘土を置いている。粘土層床面から墓壙検出面までの比高差は約90cmである。棺床粘土除去後の床面両端には小さな窪みが数か所で見られ、棺の小口部分の細工がうかがわれる。棺の小口部分には小口を押さえるための多量の粘土が充填されており、粘土層の内側での全長



第101図 第1主体部実測図(S=1:60)

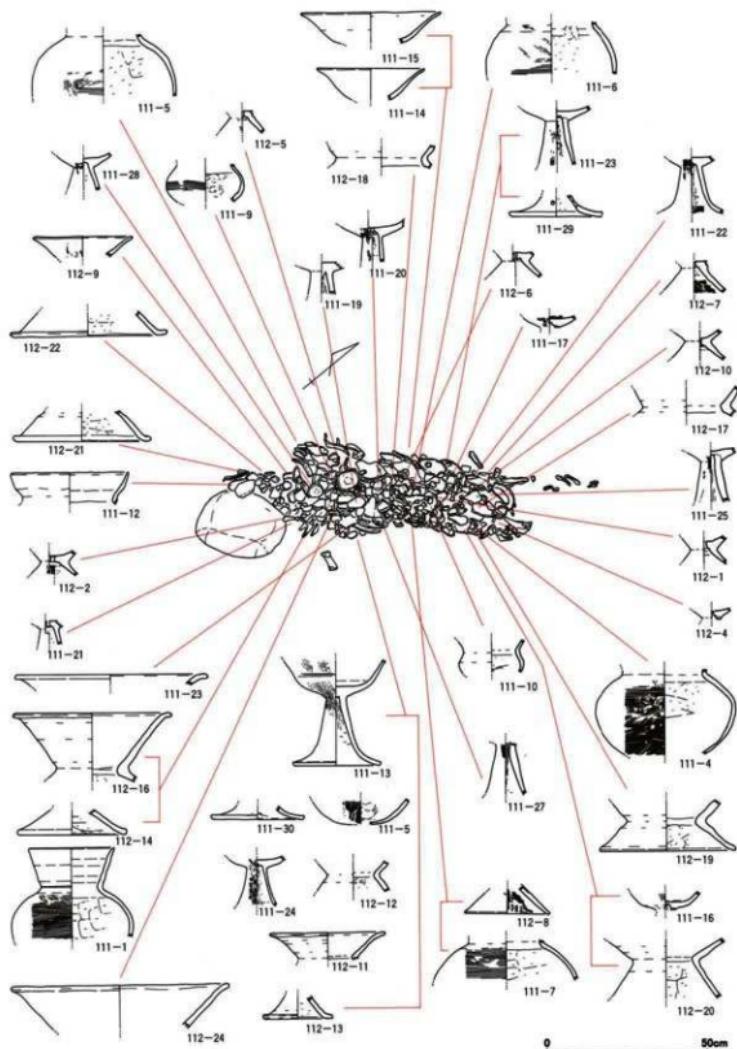
は6.5m、幅は約50cmになる。第102図は第1主体部の土層断面である。1-1~4は表土である。2-1~5が墳丘上面の土層で、特に2-1は主体部中央を中心として主軸と一致して溝状に入る土層で、2-1黒色土内からは標石・供獻土器が出土している。2-1~5は主体部内に落ち込むような形状で堆積しており、木棺部分が陥没した時点でも落ち込んだものと思われる。3-1~5は墓壙の埋め戻し土で、木棺の蓋を閉めた後に墓壙全体を埋め戻したものである。埋め戻しは土層堆積状況から見る限り、両側から土砂を流し込むようにして埋めている。棺内縦断面の中央には5-3・7赤色土が最初に落ち込んでおり、あたかも中程だけが真っ先に埋まつたかのような状況になっている。

第1主体部の墓壙の掘り込みは盛り土内で完結しており、地山面には及んでいない。墳丘盛り土を墓壙の形状に掘り下げる際にも、木棺据え付け部分は断面台形に掘り残されており、その両側に7明橙褐色土を埋め、木棺を設置する溝を造りだしている。溝の底面に6-4白色粘土(棺床粘土)を敷いてその上に木棺を設置するが、6-4白色粘土の上面はその上の棺の側面を埋める粘土とは連続しておらず、途中に土の層が混じる。棺床粘土と棺側粘土の間には檜・剣が埋め込まれており、その上面から棺側粘土(6-3白色粘土)が始まる。棺内の上層堆積状況では粘土塊がほとんど落ち込んでいないことから、棺側粘土は棺上面を完全に被覆していないと思われる。小口部分には粘土塊を2回以上に分けて置いているが、土層が大きく乱れ、その閉塞方法は不明である。

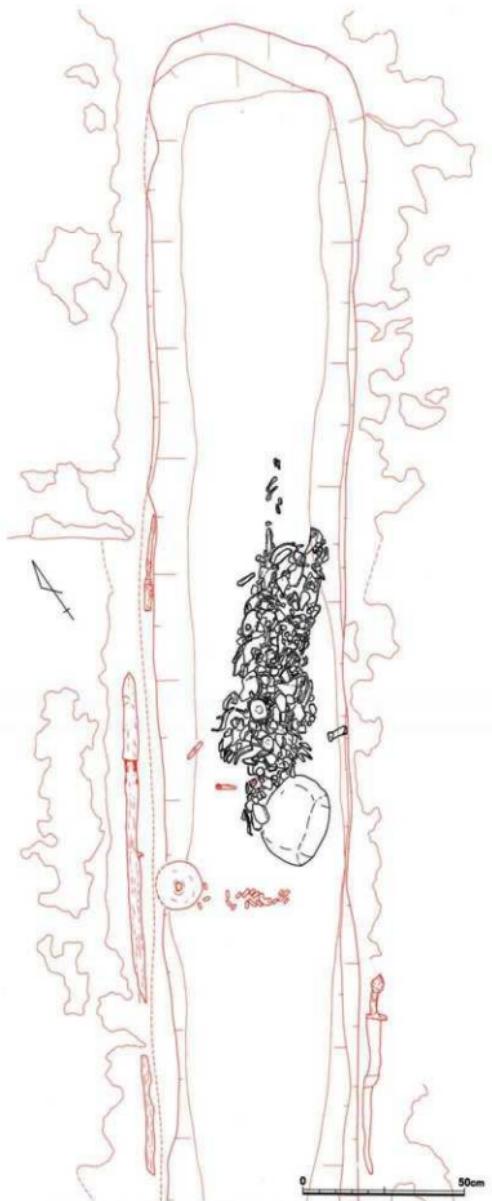


第102図 第1主体部土層断面図 (S = 1:40)

上野1号墳第1主体部直上からは、標石と多数の供獻土器が出土した（第103図）。第1主体部中央からは銅鏡・玉類が出土しているが、ほぼその直上に当たる部分から、全面を研磨された擦り石（110）が出土しており標石と考えられる。標石が出土した土層は2-1黒色土で、標石は主体部内に落ち込むように斜めになって検出できた。標石付近から北東にかけて長さ90cmの範囲で、供獻土



第103図 第1主体部直上土器出土状況(S=1:15)



第104図 第1主体部遺物出土状況(S=1:15)

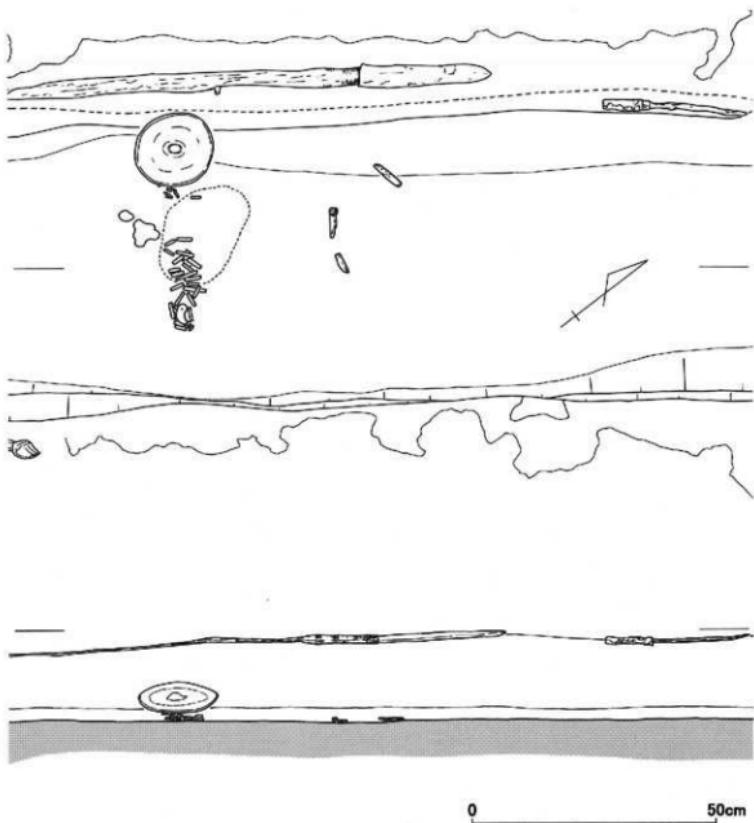
器を検出した。出土した供献土器は全て土師器で、残存状況が悪く個体数は不明である。検出した供献土器は全て標石よりも北東に位置しており、確実に標石より南西に置かれていたと思われる土器はない。

第1主体部の棺床粘土と棺側粘土の間からは、槍1点・剣2点が出土した(第104図)。

いずれも棺外に位置するもので、槍(115-8)、剣(115-6)を棺の北西脇に切先を北東に向けて置き、剣(115-7)を南東脇に切っ先を南西に向けて置かれている。いずれも木質はほとんど遺存しておらず、刀身と柄の漆塗膜を残すのみである。抜き身で置かれていたものと思われ、鞘と思われるような木質等は検出できなかった。

粘土櫛内側からは銅鏡1面・玉類43点・刀子5点が出土したほか、粘土櫛中央付近には水銀朱が見られた(第105図)。

銅鏡(第114図)は粘土櫛中央の北西壁面に接して、僅かに傾いた状態で出土した。検出状況では鏡面側を下に向かって上を向いた鏡背に白色の粘土塊が乗った状態で、銅鏡下面からも玉類数点が出土した。銅鏡下面と棺床粘土の間には腐植土と思われる黒色土が僅かに見られるのみで、崩落土等は見られない。こうした状況から、銅鏡は棺内北西側面の被葬者横に当たる位置に、鏡面を内側に向けて立て掛



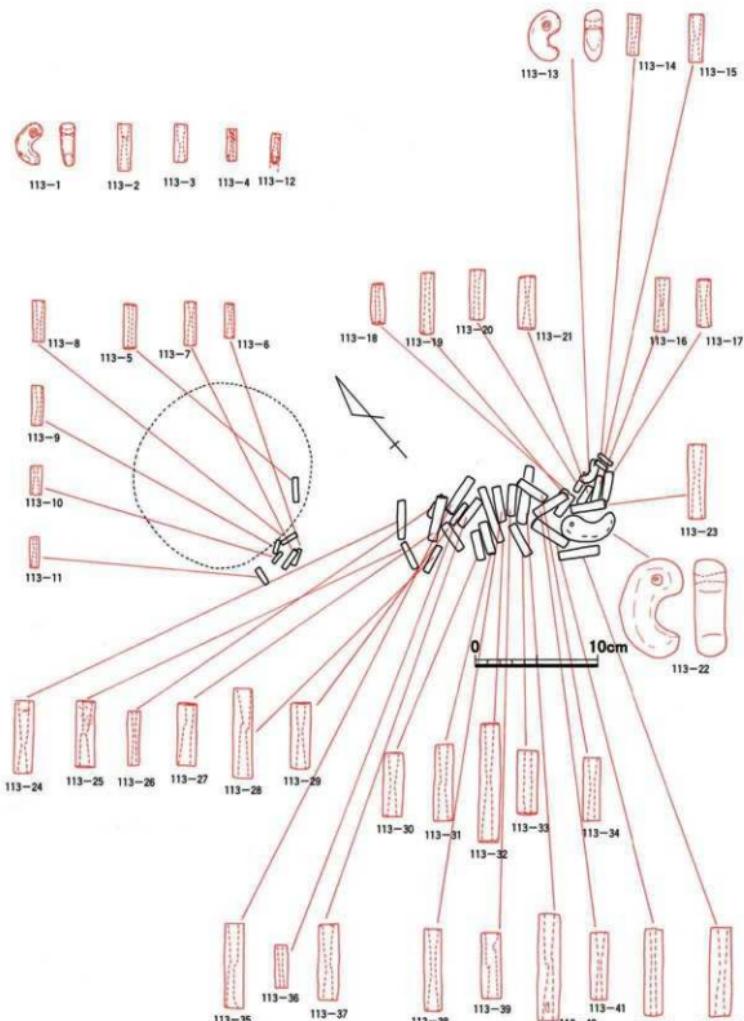
第105図 上野1号墳第1主体部遺物出土状況(S=1:10)

けて置かれていたものと思われ、棺の崩落時に棺側粘土の一部を乗せて棺内床面に転倒したものと思われる。

棺内床面からは、小型の刀子と思われる鉄製品5点(115-1~5)が出土している。出土位置は、115-1~3が玉類出土地点の北東約30cmに、115-4・5が玉類出土地点から南西に約2mである。この位置関係は、粘土襷内法をほぼ3等分する位置に当たる点で注意される。

水銀朱は、棺内中央から少量が検出できた。第105図実線で囲んだ範囲内で特に多く見られ、銅鏡の下面や銅鏡下面から出土した管玉にも少量が付着していた。また、第105図の点線で囲んだ範囲は、床面が黒変していた範囲を示すものである。黒変した理由は不明である。

玉類は棺内に置かれていたものと思われ、一部は銅鏡の下面から検出した。第106図は玉類の出土状況であるが、113-1~4・12は銅鏡の取り上げの際に銅鏡下面に張り付いて出土したために原位置が不明である。出土状況では、概ね2か所に分かれて出土しており、西側の銅鏡の下面に置



第106図 第1主体部玉類出土状況 (S = 1:20、玉類は1:2)

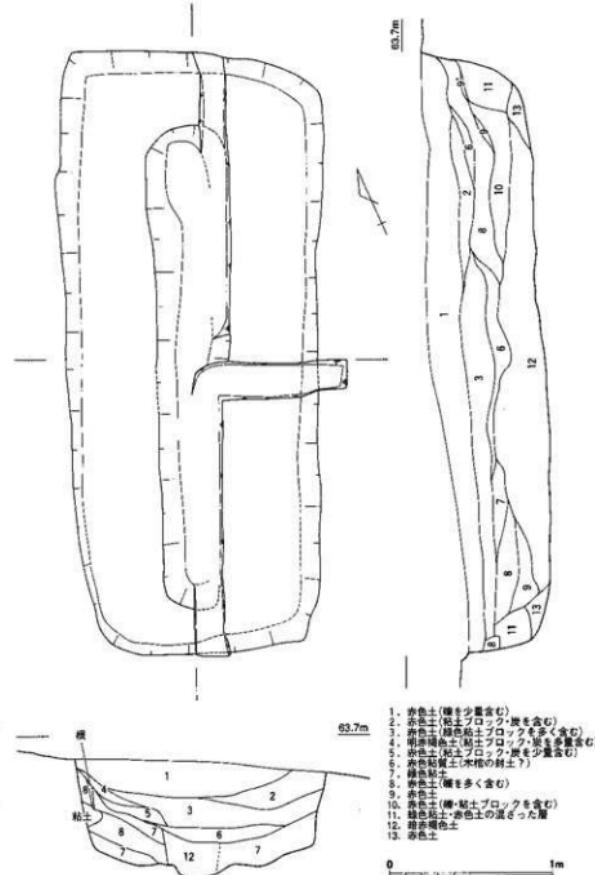
かれたグループと東側のグループに分けられる。西側のグループはヒスイ製の勾玉（113-1）を中心とした小型の管玉11点の集まりで、管玉は緑色縗灰岩質の脆いものが多い。東側のグループは、2点の勾玉（113-13・22）を中心としており大型の管玉が目立つ集まりであるが、特に大きなものは、113-22より西に集まっている、やや小さいものが東側に見られることから、さらに2グループに分けられるものと思われる。東端のグループはガラス製勾玉（113-13）を中心に中型の管

玉8点からなるものと思われ、中程のグループがメノウ製勾玉（113-22）を中心とした大型の管玉21点からなるものと思われる。これらの管玉は大半が碧玉製であるが、中型のものに限って、何点かの緑色凝灰岩製管玉が含まれており、これらは東端のグループに含まれる物かもしれない。出土状況から3グループを想定したが、これらが1連として繋がっていたとすると、3連が入れられていたものと思われ、出土状況から、そのうち1連（西側のグループ）は首等に掛けたものではなく、別に置かれたものと思われる。中程・東端のグループには水銀朱の付着しているものは見られず、西側の銅鏡周辺の管玉には水銀朱の付着が見られた。

玉類の出土地点を被葬者の首ないし胸付近と想定すると、この位置は粘土櫛中心より北東に寄った位置にあるため、頭位方向は北東と想定される。被葬者が仰向けに葬られていた場合、右肩付近に銅鏡が立て掛けられ、体の右に当たる位置の棺外に切先を頭方向に向けた槍が置かれ、脇から腰に当たる位置の左側に切先を足先に向けた剣が置かれていたことになる。

長大な棺内の仕切の痕跡は確認できなかつたが、棺内を3等分する位置での刀子の出土は、仕切の存在を思われるものである。仕切が在ったとすると、3等分に仕切られた中央の区画に被葬者が葬られ、その区画の両端に刀子が入れられていた様子が想像される。その場合、仕切の外側からは何も出土しておらず、空間そのものが存在しなかった可能性が想像される。

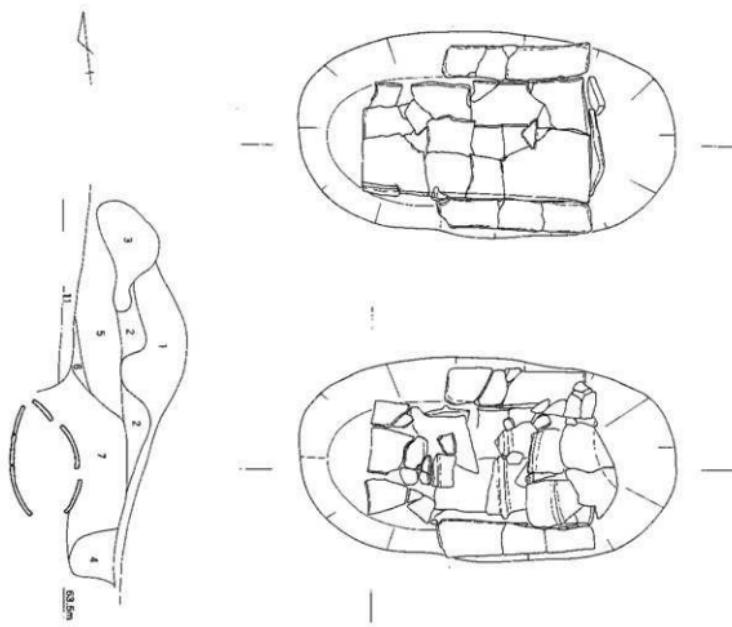
**第2主体部** 第2主体部（第107図）は、第1主体部北西側で検出した土塚で、長さ



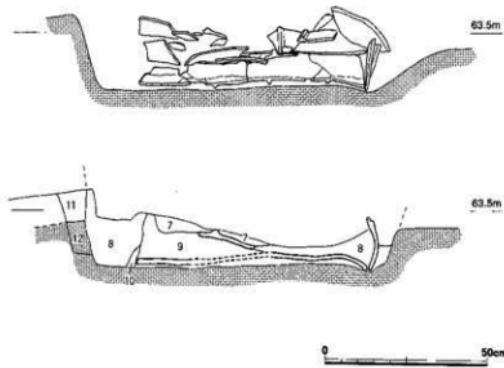
第107図 第2主体部実測図 (S = 1:30)

3.7m、幅1.6m、深さ70cmを測る。第2主体部は墳丘盛土内に掘られた墓壙で、埋め戻しも同様の土が使用されており、白色の粘土がほとんど含まれていなかったことから、墓壙下面の検出は困難を極めた。最終的にはサブトレーンチで墓壙下面を検出したが、そのために木棺の形状は判りにくく、木棺は長さ3m、幅45cm程度と考えられるが、小口側の土層は斜めに流れ込んでいるため、さらに長さがあった可能性がある。第1主体部と同様に2段に掘り込まれた墓壙は、検出面の標高が63.5m、墓壙床面の標高が63.0m、棺底部の標高が62.8mである。墓壙の掘削は、第1主体部と異なり棺底部分を高く掘り残すことはせず、墓壙中央に溝を掘り込んで木棺を据えている。木棺の形状は、墓壙底部の形状より断面円形を呈した木棺が想定されるが、北西側にはほぼ垂直に切り立つ土層（第107図12層の左側）も見え、木棺の崩落による落ち込みか、組合せ式木棺の側板かは区別できない。1～5の赤色の土層は、いずれも礫やブロックを多く含み墓壙の最終的な埋め戻しに関わる土と思われる。6赤色粘質土は墓壙内の広い範囲に面的に見られ、その下層には棺内への流入土と見られる12暗赤褐色土が見られることから木棺上面の被覆土と考えた。12暗赤褐色土の両側には7緑色粘土・8赤色土が交りに見られ、木棺の両側を埋めた土と考えられる。7緑色粘土は第1主体部に見られた白色粘土と異なり、礫やブロックを多く含んだ汚い粘土である。土層断面では8赤色土の北西端に粘土の塊が掛かったが、この粘土は他の部位でも見られるものではなく、8赤色土を埋め戻し中に意図せずに落ち込んだものと思われる。この粘土塊は白色から黄色を呈しており、墳丘上面の3～6黄色粘土であろう。長軸側の両端には11緑色粘土と赤色土の混ざった土層と13赤色土が見え、これらが木棺小口を閉塞する土層と考えられる。また、西側の小口付近は、比較的早い段階で崩落したと思われ、木棺の側面を押させていたと考えられる8赤色土が斜めに入り込んでいる。なお、第2主体部からは遺物は出土しなかった。

**第3主体部** 第3主体部（第108図）は、第1主体部北側で検出した埴輪棺を納めた土壙である。墓壙は長さ1.2m、幅60cmの楕円形で、深さは24cmである。土壙中央に高さ70cmの鋸付円筒埴輪を横倒しに置き、口縁部側の大半を大型土器底部で塞いでいる。土器底部によって塞ぎきれなかった隙間には、円筒埴輪の小片2点が被せられている他、2か所に開けられたスカシ部分の上にも埴輪片が置かれ塞がれている。鋸付き円筒埴輪基部側の開口部には土器・埴輪片は見られなかったが、土層断面によると基部付近で垂直に立ち上がる上層（第108図9層の左）が見られることから、木製の板のようないで塞いでいたものと考えられる。本体となつた鋸付き円筒埴輪は完形品であったが、隙間を埋めた埴輪片はいずれも小片で、破片同士は接合せず、複数の破片を持ち寄つたものである。また、口縁部側の開口部の大半を塞ぐ土器底部は、土器棺に使用されるような大型土器の底部を打ち欠いたもので、他の部位の破片は出土していない。検出時には埴輪棺の上面は陥没しており、棺内の流入土と思われる土層は9黄褐色粘質土のみである。埴輪棺上面の土層は埋め戻し土であろう7赤褐色土を僅かに検出したが、周辺での木の根による攪乱が多く8赤褐色粘質土との先後関係は不明である。墓壙南側には墓壙の埋め戻し土と考えられる8赤褐色土が垂直に立ち上がっており、9黄褐色粘質土との間に有機質と思われる10暗赤褐色粘質土の薄い立ち上がりが見られる。埴輪棺本体が墓壙の北に寄せて設置されており、口縁部側を塞ぐ土器底部は北側の壁面に接する部分も見られるが、南側には8赤褐色粘質土が多く見られ、大きな空間が残されている。鋸付き円筒埴輪は墓壙床面に直接接して置かれており、口縁部側を塞ぐ土器底部は、墓壙床面を壅ませて据えられて



- 1. 黒土(礫土・根が多く入る)
- 2. 黒褐色砂質土
- 3. 黑褐色粘土
- 4. 水色粘質土
- 5. 黑褐色粘土質土
- 6. 黑褐色土
- 7. 黑褐色土
- 8. 黑褐色粘質土
- 9. 黑褐色粘土質土
- 10. 黑褐色砂質土
- 11. 黑褐色粘土(堆疊盛り土)
- 12. 黑褐色粘土質土(堆疊盛り土)

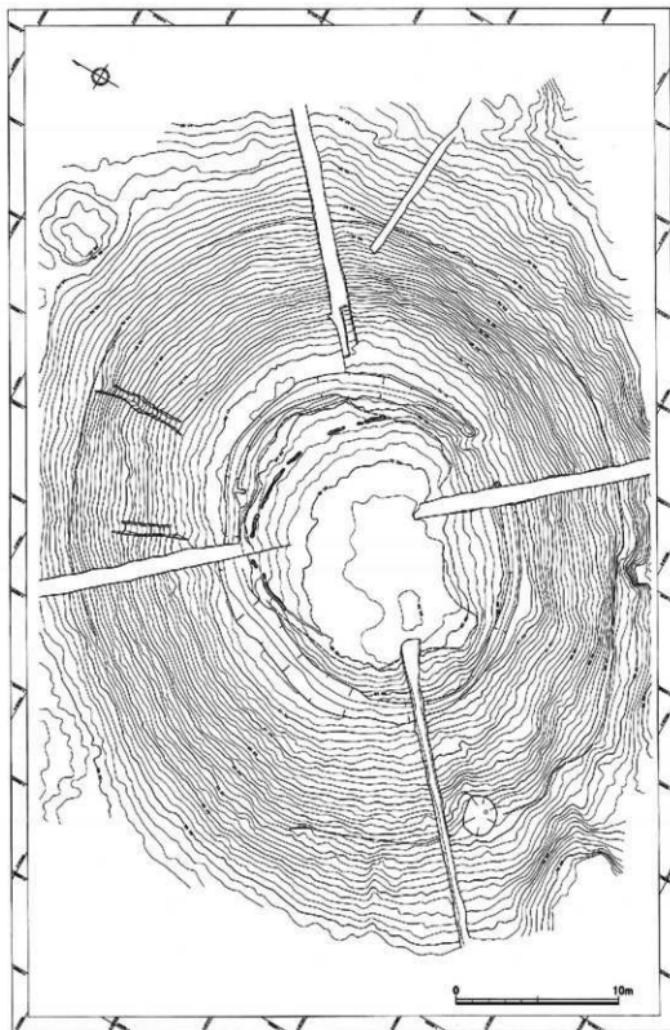


第108図 第3主体部実測図 ( $S = 1:15$ )

いる。

11~12の土層は、墓域外側の墳丘盛土である。11明黄色粘土は、墳丘盛土上面の3~6黄色粘土と同一のものと思われ、第3主体部の握り込み面が第1・2主体部と同じ面であることが判る。

上野1号墳の各主体部間では土層上の切り合い関係が全く存在しなかったため、各主体部の構築順は不明である。常識的に考えるならば、第1主体部、第2主体部の順に作られ、その後に墳丘の



第109図 上野1号墳盛土除去状況 ( $S = 1:300$ )

埴輪を抜き取り第3主体部を構築したと思われるが、いずれも掘り込み面が同一であることから、大きく時間を開けていないものと思われる。

第109図は、上野1号墳の盛土を除去した後の状況である。盛土の割付線と考えられる2条の溝を残すのみで、他に造構は見られない。墳丘の土層断面で確認できた傾斜変換点は、標高59m付近で断続的に検出でき、墳端と判断した。これによる上野1号墳の墳丘は、長径40m、短径36mの橢円形であった。

### 第3節 上野1号墳出土遺物

上野1号墳第1主体部は、標石を置き、供獻土器を供え、主体部内に多数の副葬品を納めていた。また、第3主体部では埴輪円筒埴輪と土器底部を使用し埴輪棺としていたほか、墳丘面からは多数の埴輪片が出土している。

**第1主体部標石** 第110図には第1主体部直上で、供獻土器と併に出土した標石と考えられる石を示した。長さ30cm程の自然石を使用したもので褐色から灰褐色を呈している。表面には角がなく、滑らかな川原石を使用したものと思われ、1面（第110図左）を窪ませている。全面的に滑らかになっており使用によるものと思われるが、目立った擦痕は見えない。

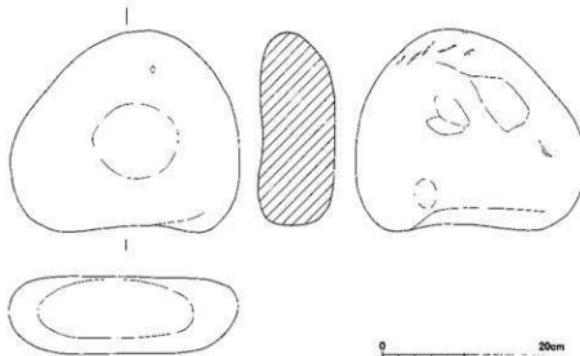
**第1主体部直上出土土器** 第1主体部直上からは、供獻土器と考えられる多量の土器が出土した。いずれも遺存状況が非常に悪く復元できなかったため、個体数は不明である。

111-1～8は、直口壺と考えられるものである。胴部は球形に近く、直線的に延びる口縁部が僅かに外反するものと思われる。底部内面には指押さえの痕跡を強く残している（111-8）。

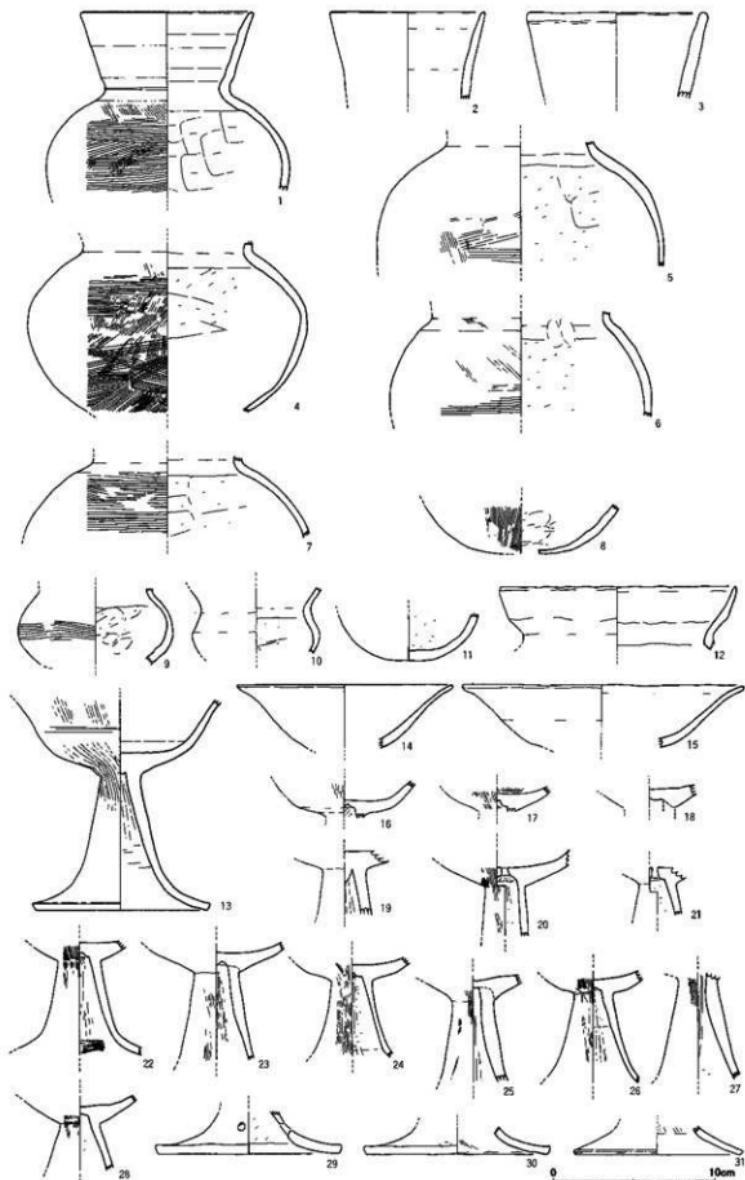
111-9～11は、小型丸底壺と考えられるものである。口縁部を残すものがなく全体の形状が不明であるが、胴部最大径が低い位置にあり球形に近い胴部を持つものと思われ、直口壺（111-1）と同様の器形であると思われる。底部は完全に丸底で口縁部は直線的に開くものと思われる。111-9は内面底部近くには指頭圧痕がありケズリを施しておらず、外面底部付近の調整が不明瞭になっている。111-11の底部内面にはケズリが及んでいるが、極めて浅く、指押さえによる凹凸が残されている。

111-12は壺である。第1主体部供獻土器の中で、壺と考えられる個体はこの1点のみである。短い口縁部が外傾し、外面に複合口縁の痕跡を僅かに留めるもので、頸部内面には撫で上げられた事による胎土の捩れが稜線となって残っている。

111-13～31は高壺である。脚部の破片が多く、全



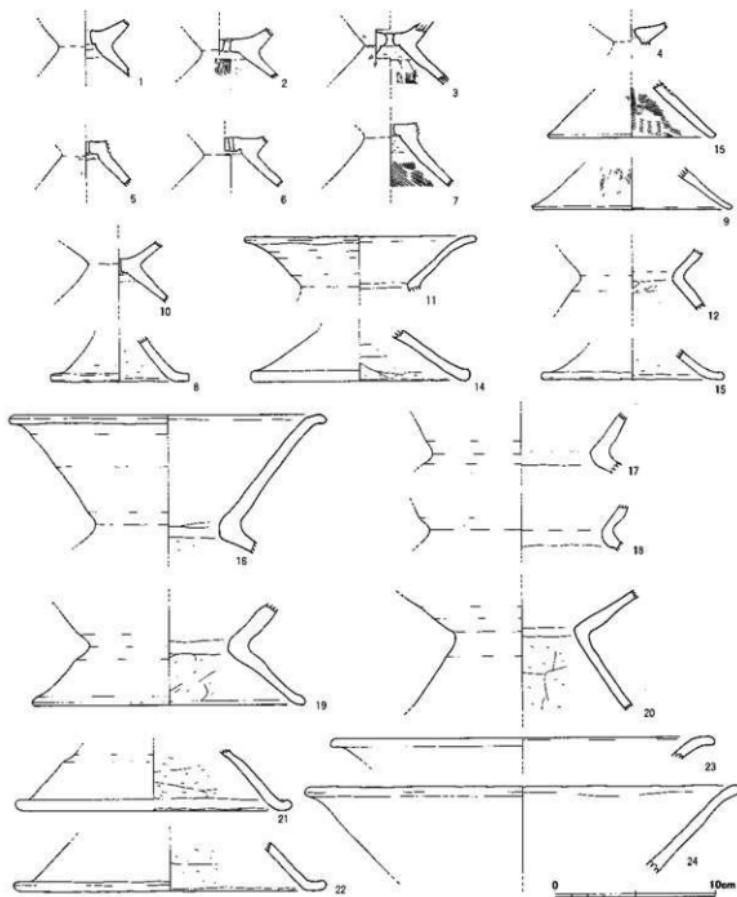
第110図 第1主体部直上出土標石実測図 (S = 1:6)



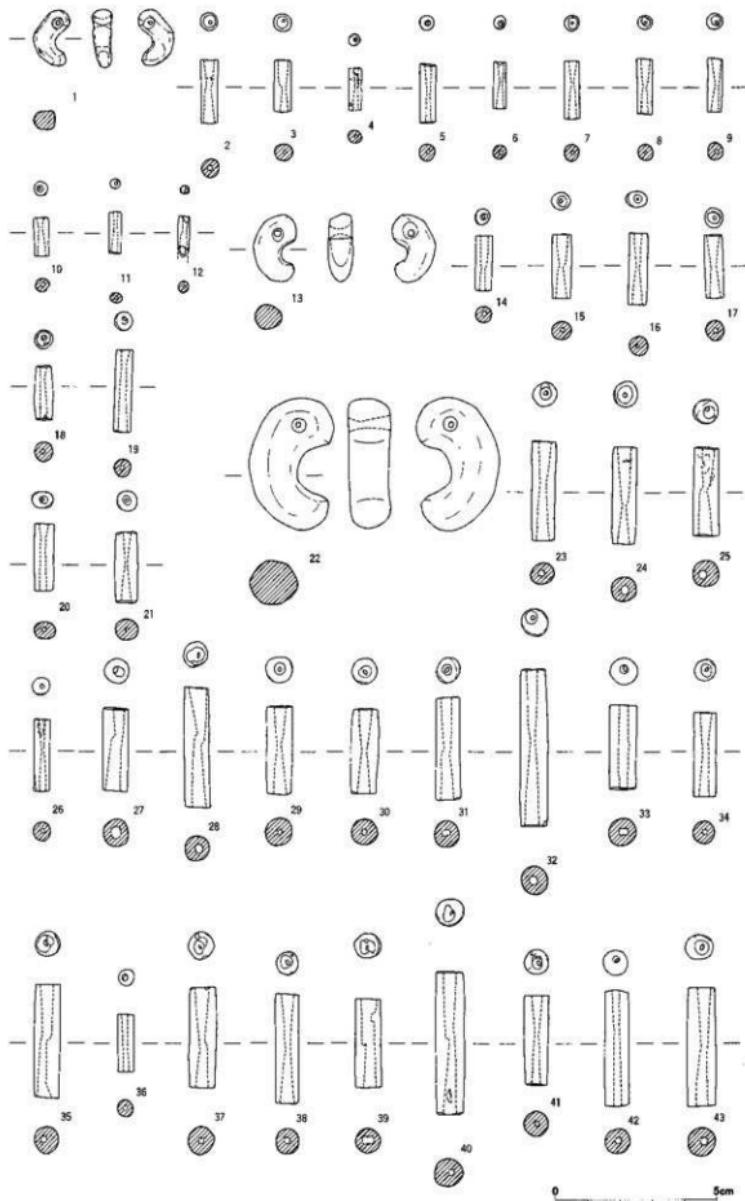
第111図 第1主体部直上出土土器実測図(1) (S = 1:3)

体の器形が判らないものが多い。111-13は外面に縱方向のハケメを施すもので、坏部外面から脚部まで連続したハケメが見られる。口縁部内面はヨコナデによるものと思われ、ミガキは見えない。ほとんどの個体で坏部内面の磨滅が著しく、調整を確認できるものが少ないが、僅かに111-17の内面に放射状のミガキが見える。坏部の形態は緩やかに内湾して口縁部を外反させるものだが、坏底部と体部の境に明瞭な稜は見られない。脚部と坏部の接合は明確に円盤充填を行っているものは見られないが、111-19の脚内部には接合部粘土塊が落ち込んでおり、絞り目も見られる。111-29は高坏脚部の小片であるが、円形のスカシが見られる。小片のため確定ではないが、3方向に開けられるものと思われる。スカシを確認した個体は111-29のみである。

112-1~10は、小型器台である。受け部が残存している物は見られず、口縁部付近の形態は不



第112図 第1主体部直上出土土器実測図(2) ( $S = 1:3$ )



第113図 第1主体部出土玉類実測図 ( $S = 2:3$ )

明であるが、内湾する受け部を持つものと思われる。脚台部は直線的に開き、端部には面を作り、内面側を接地させる。环状の受け部を成形した後に脚台部を接合し、脚台部側から穿孔している。磨滅していない個体は、いずれも脚台部外側に縱方向のハケメを入れ、脚台部内面は横から斜め方向のハケメで調整する。

112-11~24は、鼓形器台である。複合部の稜が全く存在しないもので、山本清氏が開地谷型器台と呼ぶものであろうか。小型のもの(112-11~15)、中型のもの(112-16~20)、大型のもの(112-23・24)が見られる。複合部の稜以外の特徴はいわゆる小谷期の器台と明確な違いは見られず、釜代1号墳出土器台のような装飾は見られない。<sup>(37)</sup>

上野1号墳第1主体部出土土器はいずれも明淡褐色を呈するもので、橙色を呈するものは含まれていない。また、胎土上には石英・長石の小砂粒を含むものが目立ち、総じて胎土は荒い。

#### 第1主体部出土玉類 第113図には第1主体部出土の玉類を図示した。

113-1はヒスイ製の勾玉である。銅鏡の鏡面に付着して出土したもので、僅かに水銀朱が付着している。く字形を呈し、両面穿孔される。

113-2~10は碧玉製の管玉である。全て両面穿孔され、水銀朱の付着するものも見られる。

113-11・12は緑色凝灰岩製の管玉である。113-12は劣化が著しく一部粉末化しており、端部が欠損している。

113-13はガラス製の勾玉である。透明感のある青色のガラスを使用しており、X線を通さない。表面はスリガラス状に細かい凹凸があり、光沢はない。

113-14・18~20は緑色凝灰岩製の管玉である。いずれも両面穿孔である。白色に近い色調を呈し、113-11・12に比べ各段に硬質に見える。113-18は穿孔された内面に水銀朱が残る。

113-15~17・21は碧玉製の管玉である。いずれも濃緑色を呈さず白色の縞が入るもので、113-21は軟質に見える。

113-22は瑪瑙製の勾玉である。非常に透明度の高い瑪瑙を使用しており、明橙色を呈している。長さ42mm、厚さ15mmと非常に大きい。両面穿孔で、全面を丁寧に研磨されている。

113-23~25・27~32・33~35・37~41・43は碧玉製の管玉である。白色の縞の有るものが多く、いずれも太く長い。113-34は穿孔された内面に水銀朱が残る。113-35はやや色の薄い碧玉を使用している。113-37は端部の一部が欠けているが、欠けた部分に水銀朱が残っている。

113-26・33・42は緑色凝灰岩であろうか。白色を呈し、硬質である。

113-36は軟質の緑色凝灰岩製管玉である。明淡緑色を呈し、目の粗い石材を使用している。荒れた器壁の目に水銀朱が入っている。

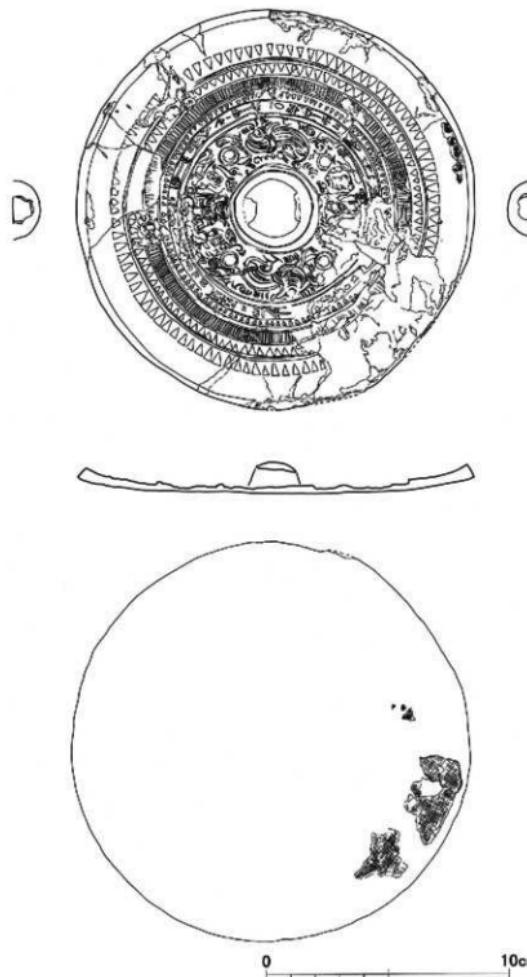
**仿製斜縁神獸鏡** 第114図には第1主体部から出土した銅鏡を図示している。遺存状態が悪くブローナンス病が進行しており、一部が粉末化して流出しているが、ほぼ完形を呈すものである。色調は暗黄緑色を呈する部分が多く、取り上げ時には軟らかな感触があった。直径17.4cmを測り外縁部の断面形状は斜縁である。主文様は二神二獸で、擬銘帯・銅書文帯を巡らせており、船載斜縁二神二獸鏡を祖形とするもので、仿製斜縁神獸鏡と呼ばれるものである。<sup>(48)</sup>

内区は4個の乳で区画し、神像と獸形を交互に配している。神像の左右には脇侍が見られる。脇侍の顔は確認できるものはいずれもほぼ正面を向いた形で表現されている。獸形は形の崩れたものであるが後ろ足の表現が見られ、後ろ足と尾の間に渦巻文を配す。乳座の周囲には渦巻文が見られ

る。外区の内縁には擬銘帯が配されており、吾の略字である「X」が確認できる。長いスパンの字体のものがあり特徴的になっており、山地古墳出土鏡に近いものと思われる。内区と外区を隔てる界隈には頂部に僅かに凹面が見られる。外区内縁の鋸歯文帯と柳歯文帯を隔てる突線頂部にはタガネ状の小さな点線が見える。

外区に2重に巡る鋸歯文の間には2条の突線が巡らされている。

森下分類の斜縁神獸鏡A系1式に当たるもので、4世紀後半代の古墳<sup>(註1)</sup>に多く見られるものである。

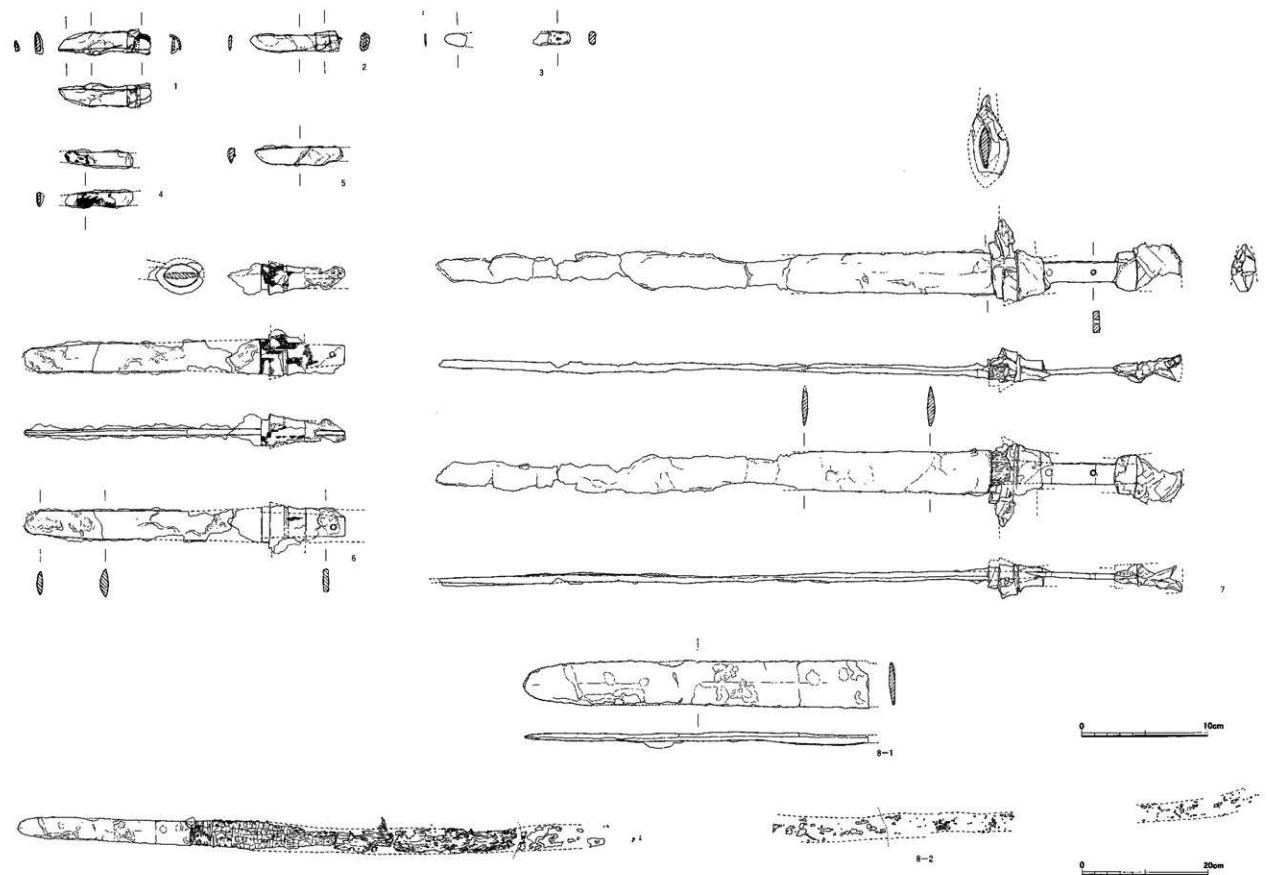


第114図 上野1号墳出土仿製斜縁神獸鏡実測図(S=1:2)

鏡背側外縁の一部と鏡面側に布の付着が見られる。布は麻系の繊維で、糸にヨリは見られず、平織りのものである。鏡面側の一部では織りの異なる方向の布が見られることから、銅鏡を布でくるんでいたものと思われる。鏡面側に付着していた土壤中からは木質が検出されているが、分析の結果ヤマグワであることが判った。この木質が銅鏡を入れた箱なのか、棺材そのものであるかは不明であるが、削竹形木棺の棺材にヤマグワを使用した例は、黒塚古墳<sup>(註2)</sup>（奈良県）が知られている。

**第1主体部出土金属器 第115図**には第1主体部から出土した金属器を図示している。この内刀子（115-1～5）は棺内から、剣・槍（115-6～8）は棺外の粘土被に塗り込めたような状態で出土している。

115-1～5は小型の刀子である。全長75mm前後で、刃部側のみの片闇である。目釘を確認できたものはない。115-3も同様の



第115図 第1主体部出土金属製品実測図 ( $S = 1:3$ 、 $8-2$ のみ  $S = 1:6$ )

ものと思われるが、遺存状態が極端に悪く全体の形状が不明である。図上右は柄頭の可能性がある。115-1・2には鉢と思われる金属輪が残っている。鉢には漆塗膜が見られた。また、115-1の刃部付近には少量の木質が鋸び付いて付着しており、広葉樹のものであることが判った。

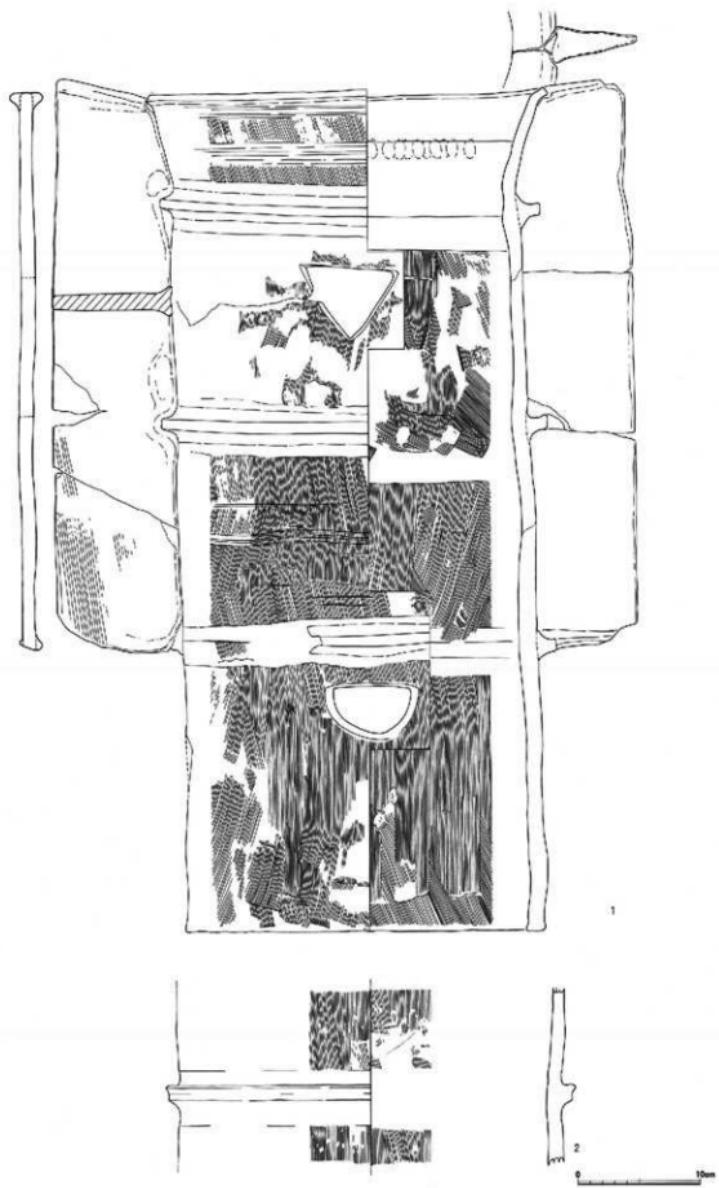
115-6は、粘土標北西側に切先を北に向けて置かれていた剣である。漆塗りの木製柄装具が使用されていたものと思われ、漆塗膜が残っている。先端を欠くが、全長約26cm、刃部長約19cm、厚さ8mm、幅2.8cmを測る短剣である。刃部の断面はレンズ状を呈し、鉢は見えない。抜き身で置かれていたものと思われ、鞘と思われる木質等は遺存していない。柄装具は柄縁付近のみが遺存しており、柱状突出部の一部が残る。深い溝で分けられた裁頭格円錐台形を組み合わせた形状で、黒色の漆塗膜が見られる。柄間装具は別の部材を組み合わせるものと思われ遺存していない。置田分類のA I類<sup>(12)</sup>に含まれるものと思われる。

115-7は、粘土標南東側で切先を南に向けて出土した剣である。土圧で中程から折れていたため切先付近の遺存状態は極めて悪い。木製柄装具の漆膜が残っており、柄縁装具の他、柄頭装具も遺存する。残存長62cm、柄部分の長さ15cmで、刃部の厚さ約6mmの長剣である。刃部は断面レンズ状を呈し、僅かに鉢が見える。切先付近の遺存状況が悪いため、切先の形状は不明である。柄装具は柱状突出部が見え、置田分類のA I類に含まれるものと思われるが、柄頭部分は木質が消失し、漆塗膜が剥れてしまっているために判然としない。一見すると頭端部が平らになり、断面楔形を呈するように見える。柄縁の柄頭側と柄頭の頭端部側に漆塗膜の皺状の線が見え、線刻直弧文が施された可能性がある。柄縁装具、柄間装具、柄頭装具はそれぞれ別造りになっているものと思われ、柄間装具は残存していない。

115-8は粘土標北西側で切先を北に向けて出土した槍である。柄の漆塗膜が1.9mに亘って遺存していたが、石突きは確認できなかった。柄本体の木質は茎付近しか残存しておらず、僅かな漆塗膜だけが残る部分が多い。115-8は柄の大部分が漆塗膜しか残っていないため、取り上げ時に周辺の土と共に切り取りを行った。それによりX線撮影装置に入らなかったため、茎の形状は不明である。鞘と思われる部位は見られず、抜き身で置かれていたものと思われる。柄縁から切先まで28cmあり、刃部幅3.6cm、刃部の厚さ5mmを測る。僅かに鉢が見え、刃部の断面は菱形に近い。茎が不明であるため明確でないが、柄は合口式と思われ、柄縁から直角の浅い闊が露出する。柄は1.6mに亘って、断続的に漆塗膜が遺存しているもので、茎付近以外に木質の残存は認められない。柄縁付近の木質が遺存する部分では、柄断面はレンズ状を呈しており、ヨリのある糸が密に巻かれ、黒色の漆が塗られている。柄縁から約15cmの位置には柄本体から真横に飛び出すように漆塗膜が出ており、純掛け突起の様なものの存在がうかがわれる。柄の漆塗膜は柄縁近くは黒色で艶が見られるが、中程より石突き方向では灰色を呈し、ザラザラしたものとなっている。柄縁より26cm付近（第115図8-2に示した左側の点線）で分かれるもので、灰色の部分は漆で砂鉄を塗り込めたものと考えられる。砂鉄を塗り込めた部分は石突き近くでは無くなってしまい（第115図8-2に示した右側の点線）砂鉄を塗り込めた部分を槍柄の中程だけに使用しているものと思われる。この位置は槍を使用する際に握る部分に当たることから、装飾よりは滑り止めの意味合いが強いものと思われる。

### 第3主体部出土埴輪 第116図には第3主体部の埴輪棺に使用された埴輪を示した。

116-1は、高さ69cmの円筒埴輪に鏽を付けたもので、鏽上端までの総高は71.5cmとなる。外



第116図 第3主体部出土埴輪実測図( $S = 1:4$ )

面調整はタテハケのみで、ヨコハケは見られない。内面調整は縦方向を中心としたハケで、ケズリは見られない。タ

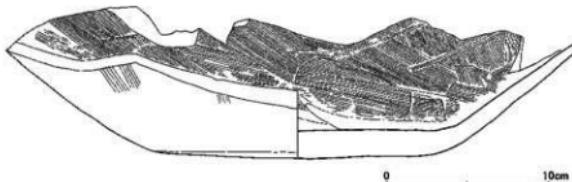
ガの取り付けによ

る指押さえがタガ取り付け部の内面に残る。最上段のタガより上方の内面はナデと指押さえの痕跡が強く残り、目の粗い布で斜めに撫で上げた後、口縁部近くを横方向に撫である。斜め方向のナデは、最上段のタガ取り付け時の横方向のナデによって切られており、口縁部までの内面調整を終えた後にタガを取り付けていることが判る。タガが剥離した部分には1次調整のタテハケが見える他、タガの位置決めの印目と思われる浅い沈線が一周する。タガは断面台形に近い形状で、高さ20mm程度である。最下段のタガのみやや低い。口縁部は最上段のタガから直線的に延び、口縁端部近くで外反させ、端部に面を持つ。口縁部外面には、基本的にタテハケを残すが、口縁端部近くをヨコナデしているほか、口縁端部から5cm程下の位置にヨコナデを一周させ、タテハケを消す部分が見られる。透孔は2方向で、第3段に逆三角形のものが、第1段に半円形のものが見られる。底部調整は見られない。埴輪柱上面を向いていた側は、磨滅しており明瞭でないが、透孔の位置する方向で最下段と最上段のタガ付近を中心に黒斑が見られる。鱗は幅8~9cm、厚さ1~1.6cmの平行四辺形に近い形状を呈し、上下両端部が肥厚する。取り付け位置は口縁端部から第1タガまでの間で、相当位置のタガ頂部を押し潰して張り付けられている。接合部側から鱗断面を見ると、3枚の粘土が見えることから板状に作った鱗の両側に補強粘土を加えることで張り付けているものと思われる。鱗の表面には縦方向の荒いハケメが見える。内面調整のハケメは、基部から第1タガ内面まで直線的に連続するが、第1タガ取り付けのナデより上は斜め方向に始まっており、第1段のハケメと連続しないように見える。第2タガ付近も同様になっており、タガ張り付け作業毎にハケメが途切れ状況になっているものと思われ、製作工程を反映する可能性がある。粘土帯の積み上げ痕跡はあまり観察できなかったが、第2段で観察された部分では内傾接合になっている。

116-2は、第3主体部の鱗付き円筒埴輪上部の隙間を塞ぐ埴輪片である。調整はナデの他、縦方向のハケメのみで、現存する破片からは2次調整の痕跡は認められない。タガ頂部がヨコナデにより疊んだ形状になっている。透孔破片の両端に逆三角形の透孔の1辺が残っているが、円周から推定される正対する位置ではない。3方向に透孔が開く可能性もあるが、上野遺跡出土埴輪で3方向の透孔を持つものは確認できない。

**第3主体部出土土器** 第117図は、第3主体部埴輪柱の鱗付き円筒埴輪の口縁部を塞いでいたものである。器壁の厚い大型土器の底部付近である。直径約17cmの平底を持ち、内外面ともにハケメ調整するものである。この土器の他の部位の破片は出土しておらず、第3主体部構築時に別の場所で割られたものと思われる。

**埴丘出土ガラス小玉** 第118図は、上野1号墳埴丘北東斜面から出土したガラス小玉である。埴丘面の検出作業中に出土したもので上野1号墳埴丘

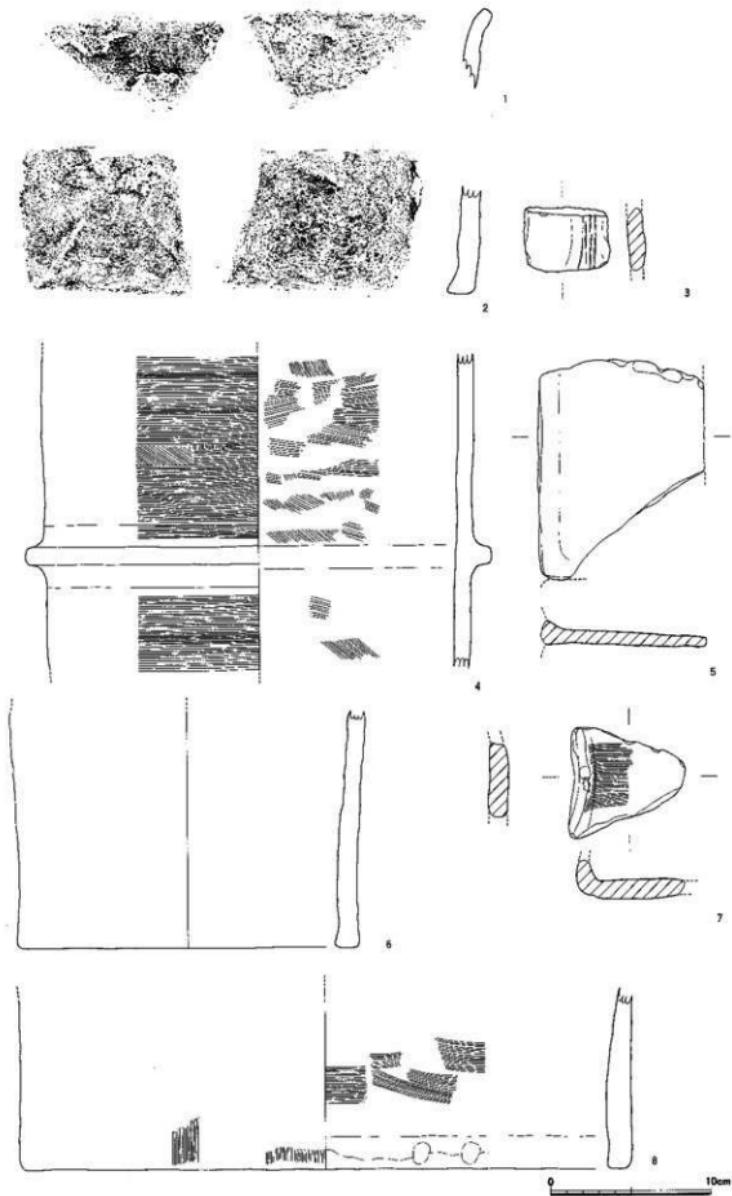


第117図 上野1号墳第3主体部出土土器実測図 (S = 1:3)



0 2cm

第118図  
上野1号墳埴丘出土  
ガラス小玉実測図  
(S = 1:1)



第119図 上野1号墳墳丘出土埴輪実測図 ( $S = 1:3$ )

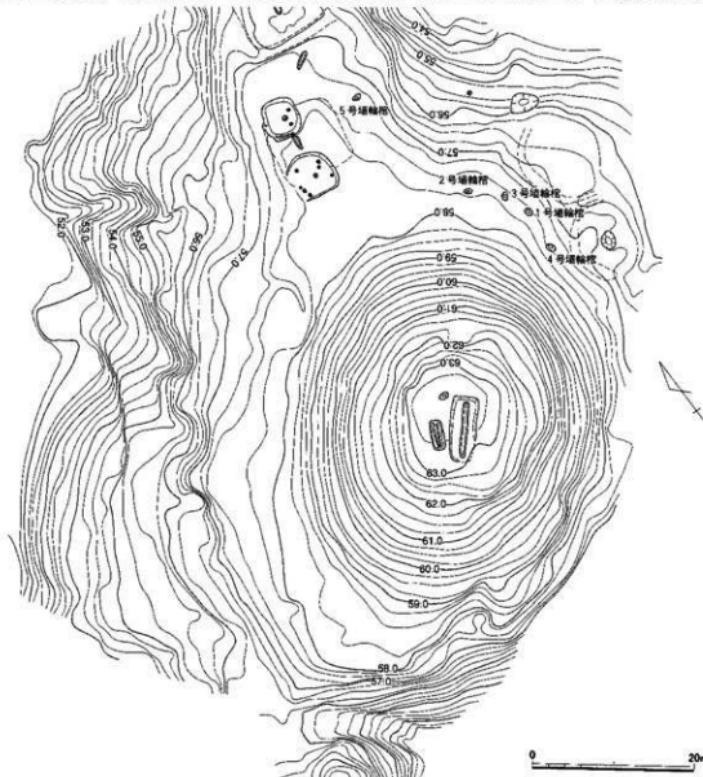
近くにあったものと思われるが、原位置は推定できない。高さ5.5mm、直径6mmの円筒形に近い形状で、淡青色を呈している。

**墳丘出土埴輪** 第119図に示したものは上野1号墳墳丘から出土した埴輪片である。1号墳墳丘からは、テラス付近を中心にも量の埴輪片が出土しているがいずれも小片であった。

119-1は、円筒埴輪口縁部である。119-3は鰐付円筒埴輪の鰐接合部である。ヘラ状工具により傷が付けられ、鰐を接合しやすいようにしている。119-2・6・8は、円筒埴輪底部である。この内119-8は、内面側に指押さえの痕跡が強く残るものである。119-4は円筒埴輪胴部の破片である。第3主体部出土埴輪の外面にはタテハケしか認められなかったが、2次調整のヨコハケが強く施されるものである。ヨコハケの連続する単位が長い。119-5は鰐である。119-7は朝顔形埴輪の頭部付近の小片と考えられるものである。

#### 第4節 墓輪棺群

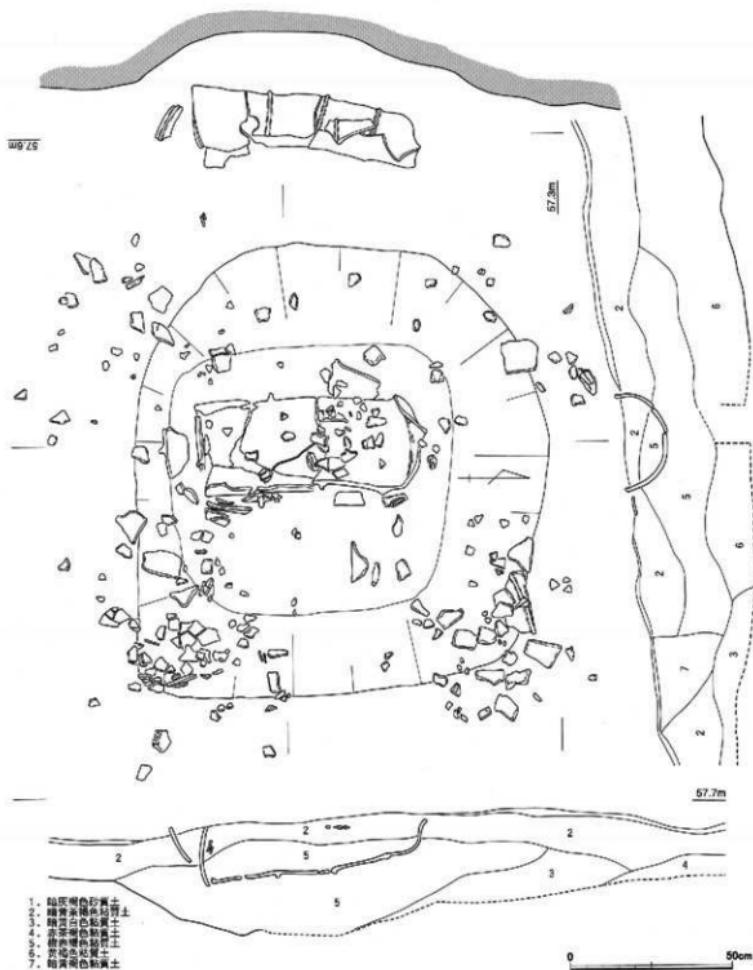
上野1号墳墳裾の北東側には、埴輪棺4基が見られた。また、僅かに離れて、4号墳東側にも同



第120図 上野遺跡1区埴輪棺の位置図(S=1:600)

様の埴輪棺が見られた。発見順に1号埴輪棺～5号埴輪棺と呼んでいる。

**1号埴輪棺** 1号埴輪棺（第121～125図）は、上野1号墳北東側の標高57m付近で検出した埴輪棺である。1号埴輪棺は埋没しておらず、表土面の草取りを行った時点で検出された。鰐付朝顔形埴輪を使用したものであるが、埋没していないため棺上面側は完全に破壊され、周辺に破片が散乱した状態であった。墓壙は南北1.4m、東西1.3mの隅丸方形と考えられるが、斜めの掘り込みがあり東側壁面は明瞭でない。1暗灰褐色砂質土は調査時での表土であり、その下層に2暗黄茶褐



第121図 1号埴輪棺実測図 (S = 1:15)

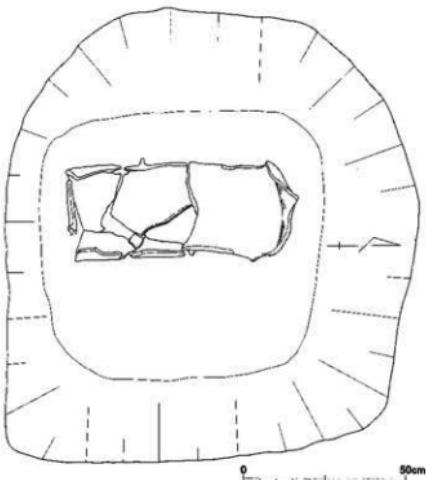
色粘質土までが後世の流入土と考えられる。埴輪棺本体の半分までが、この2暗黄褐色粘質土中に見られる。墓壙内の埋土と考えられる土層は5枚赤褐色粘質土のみであるが、この土層も棺内と棺外の差が見られない。検出できた墓壙の深さは25cm程度で、底面より18cm上に埴輪下面が位置する。墓壙底面は丸みを帯びており、平坦ではない。

第122図は、原位置から離れたと考えられる埴輪片を取り除いた状況である。隅丸方形を呈する墓壙のやや西よりに朝顔形埴輪を据えていることが判る。本体となる鰐付朝顔形埴輪は、鱗を割り取られたもので、壺部口縁付近の破片も見られないことから、壺部口縁付近も打ち欠かれていたものを使用していたと思われる。鰐付朝顔形埴輪は、鱗取り付け位置を真下にし、南北方向に主軸を取って、口縁部方向を北に向けて水平に据えられている。底部側には、別個体の円筒埴輪胴部破片を使用して閉塞しているが、口縁部側の閉塞は不明である。

第123図は1号埴輪棺本体に使用される鰐付朝顔形埴輪である。壺部頸部付近から上を欠くもので、残存高73cmである。外面調整はタテハケのみで、タガ取り付け時の粘土上にも僅かにハケメが乗っており、2次調整も行われたようである。タガは断面台形に近い形状であるが、他の埴輪棺出土の埴輪に比べ、細く高い印象を持つ。第1・2タガの下面の指ナデは、タガ成型時のナデと取り付け時のナデが別に行われており小さな段を持つ。第3タガは、第1・2タガに比べ細く低い。第1段目と第3段目の2方向に楕円形の透孔を持つ。内面調整は縦方向のハケメで、タガ付近の内面はタガ取り付け時に横方向に撫でられる。第3主体部出上の鰐付円筒埴輪と同様に、タガ付近内面のナデを挟んで上下のハケメは連続せず、作業工程の段階がうかがわれる。基部の内面は上から撫で下ろされたと思われるハケ原体に付いた粘土の付着が見られる。第1段目の内面は縦方向の指ナデが強く施されており、指ナデの内側にはハケメが及んでいない。

口縁部の形状は不明である。壺部は肩が強く張り、肩部より下方は直立する。頸部にタガが見られない。肩部より下位は縦方向のハケメが、肩部付近から上位には横方向のハケメが見える。内面には強く撫で上げた痕跡が多く残り、ハケメは見えない。第3タガ上側で接合したものと思われ、その付近の内面と肩部内面に指押さえの痕跡が強く残る。

第124図123は鰐付朝顔形埴輪(123)を側面から見たものである。鱗は第1タガから第3タガの間で付けられたようで、全てのタガに切り取った痕跡が見えるが、そのタガの切り取り方は一様ではない。第3タガは工具で割り取るようにされており、破面は滑らかでない。第2タガは、へら状工具でV字に切り込みを入れられている。第1タガは第3タガと同様に半円形に割り取られているが、その位置が、鱗の中軸線から僅かにずれている。鱗中軸線に当たる部分の、タガ残



第122図 1号埴輪棺下面実測図 (S = 1:15)

存部上面には小さな傷が付けられており、鱗取り付け位置を示すものと思われる。鱗取り付け部にはヘラ条工具によると思われる多くの傷が付けられている。

第1タガの剥離面には、タガ取り付け位置を示すと思われる2条の沈線が見られる。沈線の間隔は約7mmあり、下側の沈線の位置がタガ端面の上端に一致する。

第2段目の鱗取り付け部付近には、僅かに黒斑が見える。また、第1断面の割れの一部は、表面だけを薄く削り取っており、黒斑の有る部分を意図的に削り取ったように思われる。他の埴輪棺に使用されるものと胎土が異なるように見え、明灰白色を呈している。

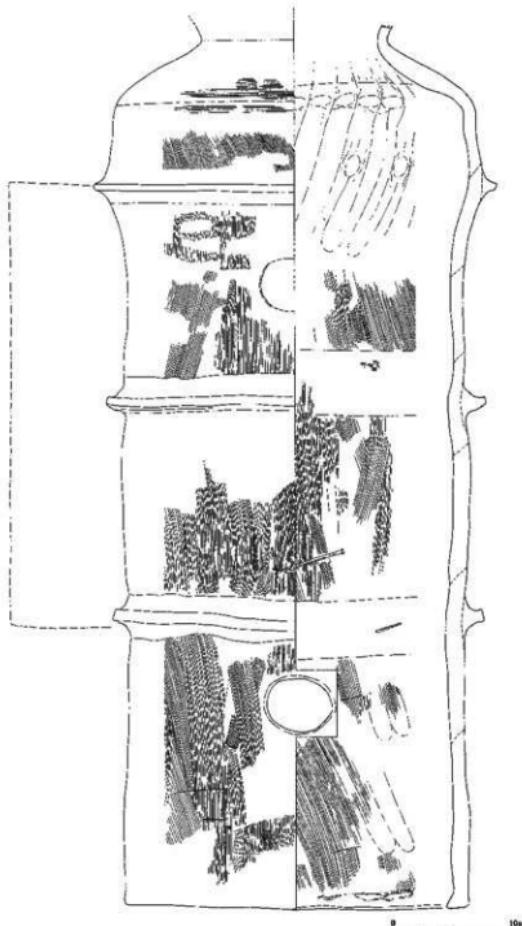
124-1～125-7は1号埴輪棺周辺で出土した埴輪片である。125-7は1号埴輪棺基部を閉塞

したものであるが、他の埴輪は、墳丘から転落したものと区別が付かず、1号埴輪棺に伴わない可能性もある。磨滅しているものが多いが、調整の判るものはいずれもタテハケが行われており、外面ヨコハケの個体は見られない。

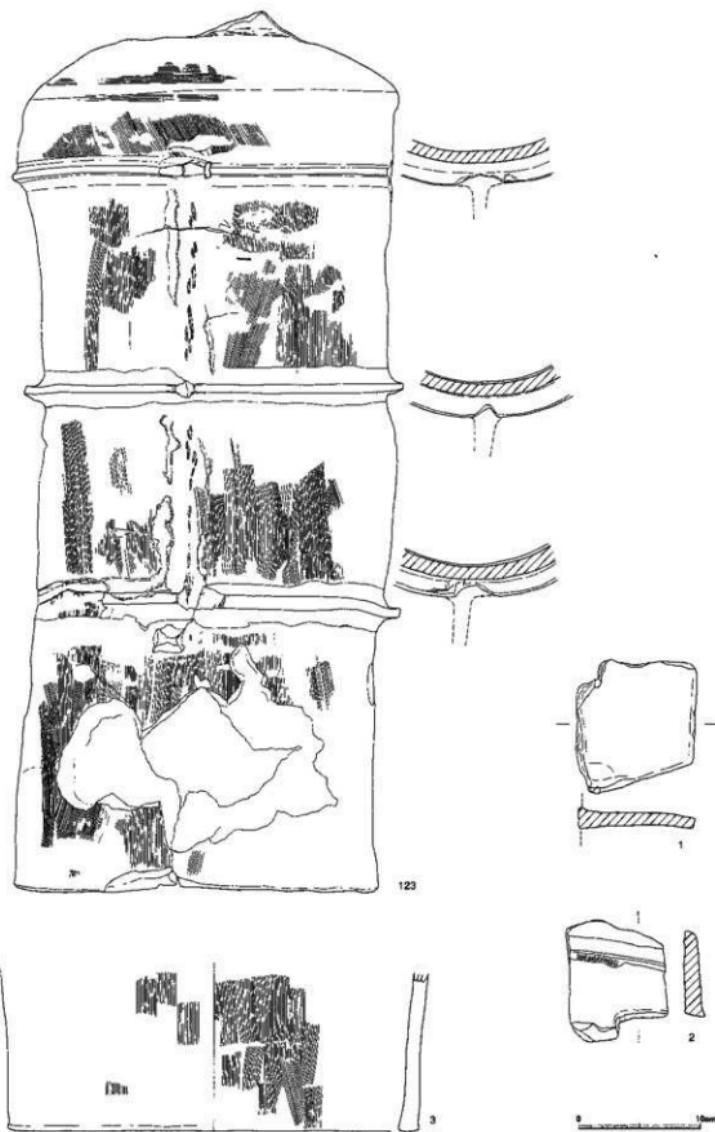
124-1は、鱗の一部である。全面ナデ調整されハケメは見えない。黄灰色を呈し、123とは別個体と思われる。

125-1は、円筒埴輪口縁部と思われるが、特異な形状を呈すものである。復元口径約22cmと小さく、内傾気味に立ち上がる口縁部を持ち、タガ下面で太くなる形状である。張り付けられたタガの付近の断面では、器壁に段が見える。磨滅しており調整は不明である。

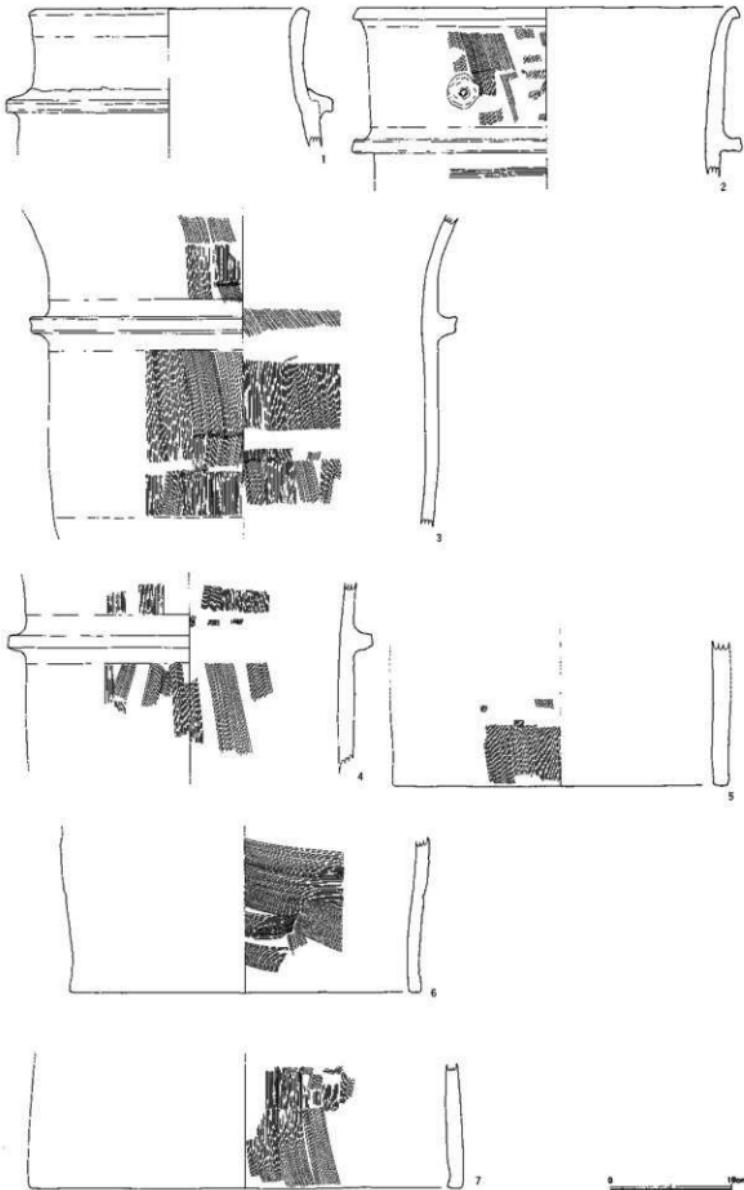
2号埴輪棺 2号埴輪棺(第126～128図)は、上野1号墳丘北側の標高58m付近で検出した埴輪棺



第123図 1号埴輪棺出土埴輪実測図(1) (S=1:4)



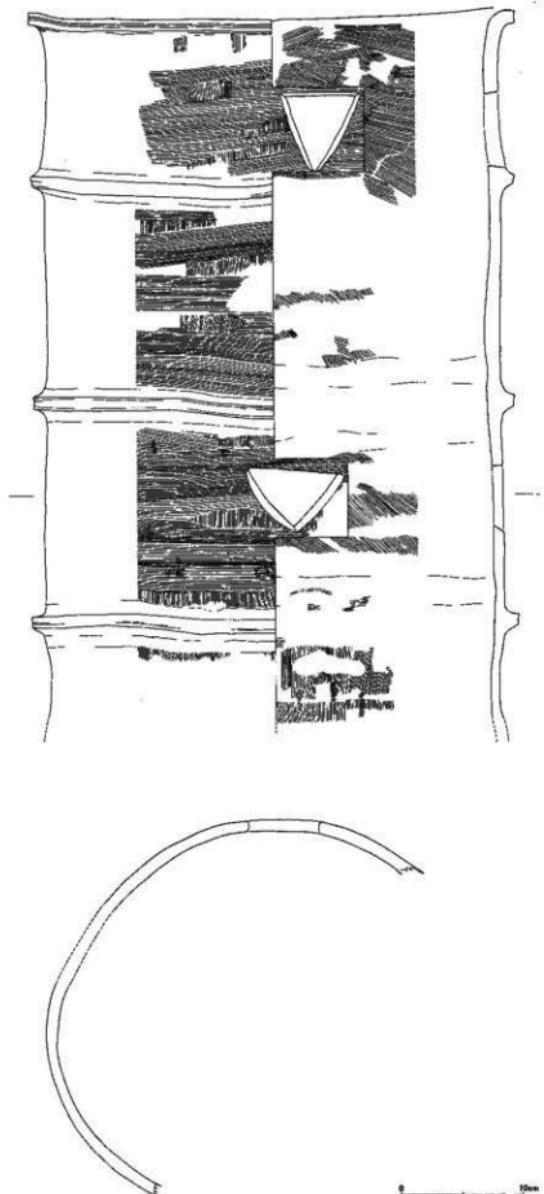
第124図 1号埴輪館出土埴輪実測図(2) (S=1:4)



第125図 1号埴輪棺出土埴輪実測図(3) ( $S = 1:4$ )



第126図 2号埴輪棺実測図 ( $S = 1:15$ )



第127図 2号埴輪棺出土埴輪実測図(1) (S = 1:4)

である。2号埴輪棺は、他の埴輪棺と異なり、本体となる1個体の埴輪棺が存在しない。棺底部にあたる部分に埴輪片が全く見られず、埴輪片を集め、あたかも箱式棺を組んだ様な形状になっている。墓壙は1辻1m程の三角形に近い形状で、その南西側に寄せて埴輪棺が組まれている。墓壙の深さは約30cmである。

第127・128図は2号埴輪棺に使用された円筒埴輪である。いずれも外面に2次調整のヨコハケが見られる。127は、断面構円形を呈する可能性があるもので、基部を欠く。図上最下段には外面にタテハケしか見られないことから第1段目と判断でき、総高は他の埴輪と同様に70cm前後になるものと思われる。欠損部分を第1段目とした場合の第2・4段目に逆三角形の透孔を2方向に開けるが、それぞれの位置関係は一致せず僅かにずれる。各タガはヨコナデされるようで、タガ端面に横方向の条線が見られ、特に口縁端部のものは目立っている。内面調整のハケメは斜め方向が目立つが、第1段目の内面は

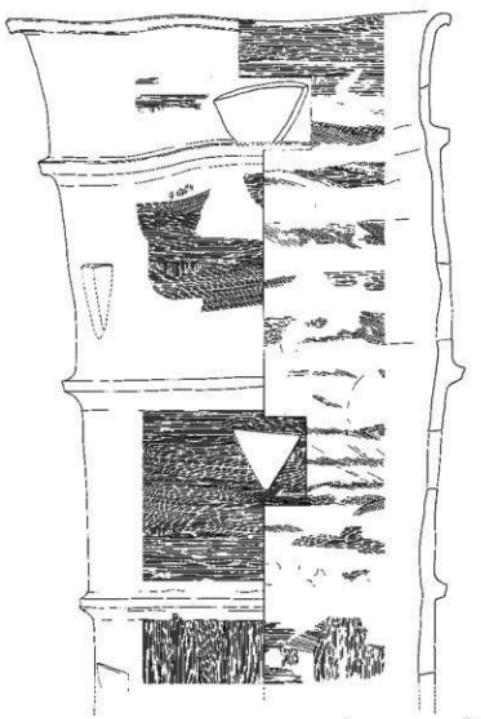
縦方向のみとなる。断面梢円形を呈する可能性が高く、透孔の位置が意識されており、短軸方向に透孔が開く。透孔と同じ方向で黒斑が見られる。

128は4方向に透孔の開くものである。127と同様に欠損する図上最下段のみタテハケとなつておらず、第1段目と思われる。第2~4段目まで2次調整のヨコハケが見られる他、最下段のタテハケが、タガの張り付け粘土に架かっている部分があり、タテハケも2次調整のものがあると思われる。透孔は各段毎に2方向に開けられ、奇数段と偶数段で方向を異にするが、その角度差は必ずしも90度ではない。欠損部分が多いため断定できないが、第4段目の透孔は、その位置関係からタガに掛かる位置に開けられているおり、透孔はタガ取り付け以前に開けられるものと思われる。第1段目はほとんど残存していないが、破片には透孔の上端が残っている。第1段目の透孔の形状は不明である。透孔の間の位置に黒斑が見られる。

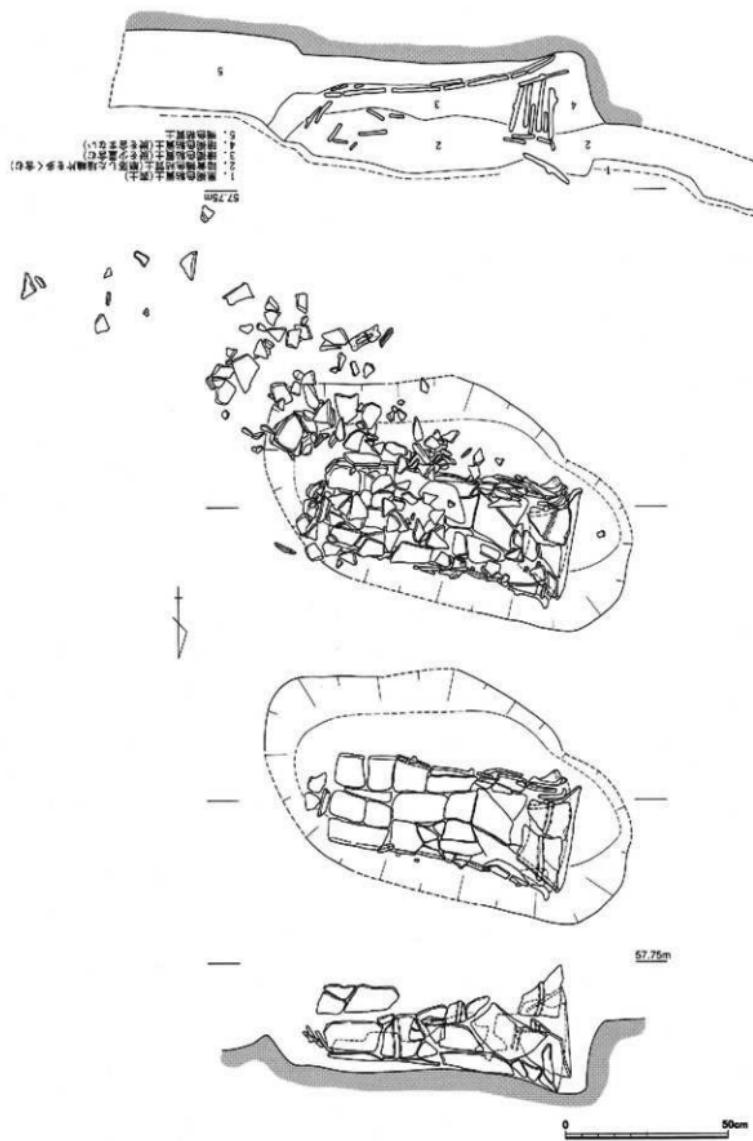
127・128とともに、内面調整には斜めから横方向のナデが目立っている。第1段目の内面はタテハケが中心となるが、第2・3断面の内面には短い間隔で横方向のナデが入り、その間には斜めから横方向のハケメが見られる。こうした内面調整は、第3主体部出土埴輪や1号埴輪棺出土埴輪には見られない特徴となっており、第4段目に透孔が設けられる点や、タガがやや低く、より台形に近づく形状を呈する点などと併せ、時期差若しくは工人差を考えさせるものになっている。

2号埴輪棺には多くの埴輪が使用されていたが、他の個体は小片が多く図示できなかった。

3号埴輪棺 3号埴輪棺（第129~132図）は1・2号埴輪棺の間の標高57.5m付近で検出したものである。墓壇は東西約1.2m、南北約70cmの歪な梢円形で、深さは約25cmである。東西方向に主軸を取り、本体の口縁部側を西に向ける。他の埴輪棺と同様に墓壇中心より北側に寄せて埴輪棺を組んでおり、墓壇南側には若干の隙間を開ける。付近は北東に向かって傾かに傾斜する地形になっており、地山面は明瞭でない。橙色粘質上の地山東側には、谷地形に起因すると思われる5褐色粘質土が堆積しており、この土が3号埴輪棺の地山面となる。3号埴輪棺内には上野1号墳側からの流入



第128図 2号埴輪棺出土埴輪実測図(2) (S=1:4)



第129図 3号埴輪棺実測図 ( $S = 1:15$ )

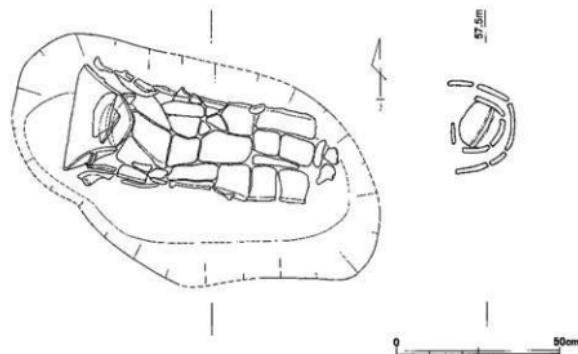
上である2暗黄褐色粘質土が流れ込んでいるため、掘り込み面は不明である。棺内堆積土は炭を含む3暗褐色粘質土で、墓壙内の埋め戻し土は同様の炭を含まない土。（第129図4層）である。墓壙床面は水平になっておらず、本体の口縁部付近の曲線に併せ、口縁部側が掘り窪められており、埴輪棺本体が墓壙床面に接している。

この埴輪棺の最も特徴的な点は、本体口縁部側の閉塞に朝顔形埴輪の口縁部を使用する点である。埴輪棺の閉塞に朝顔形埴輪口縁部を使用する場合は、口縁端部同士が接するように閉塞するのが一般的と思われるが、3号埴輪棺では本体口縁部内に朝顔形埴輪口縁部を頸部側から入れ込んでいる。閉塞に使用される朝顔形埴輪頸部部分の開口部には円筒埴輪脚部を丸く打ち欠いて、タガを内向きにしてはめ込んでいる。基部側の閉塞は明瞭でないが、円筒埴輪片が散乱しており、円筒埴輪片で閉塞したものと思われる。3号埴輪棺は、他の埴輪棺と同様に埴輪の一部が地表に露出した状態であったため、埴輪棺上面の状況は明瞭ではないが、検出時に透孔の位置が全く確認できなかったことから、透孔付近には埴輪片が被せられ閉塞されていたものと思われる。

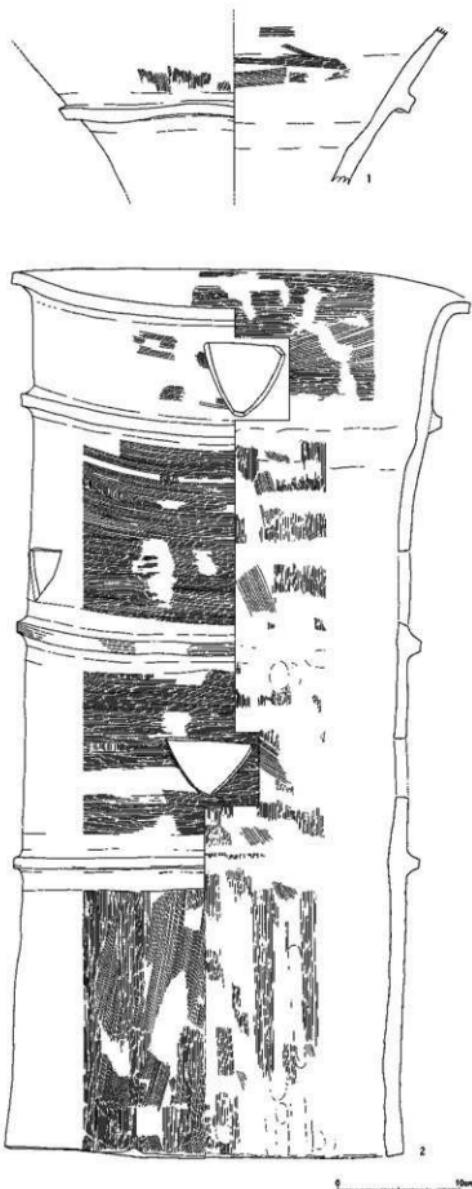
131-1は、3号埴輪棺本体の口縁部側の閉塞に使用される朝顔形埴輪の口縁部である。口縁端部は磨滅が著しく接合できなかったが、破断部は口縁端部に近い位置と思われる。また、頸部は故意に打ち欠かれているものと思われ、頸部付近にはタガが廻らないものと思われる。口縁部は斜め方向に直線的に開くもので、中程にタガが廻り二重口縁を表現している。タガは強いヨコナデの入る断面台形を呈するものである。磨滅が著しいが、外面には縱方向のハケメが内面には横方向のハケメが見える。

131-2は3号埴輪棺本体に使用される円筒埴輪である。口縁部付近に歪みがあるが、高さ73cmを測る。第1段目の外面には1次調整のタテハケのみが施され、第2~4段目には2次調整のヨコハケが明瞭に残る。2次調整のヨコハケは1回の単位が比較的長いものである。第2~4段目に透孔が開けられるが、第1段目には透孔は無い。透孔はいずれも逆三角形で各段に2方向ずつ開けられ、第2・4段目と第3段目の透孔の位置はほぼ90度異なる。第2段目の透孔はタガ間のほぼ中央に開けられるが、第3段目の透孔は下端が第2タガに接する位置に開けられる。128の第4段目と同様に透孔開ける作業がタガの張り付けと別工程で行われたことを示すものと思われる。各タガは断面台形を呈する低いものでいずれも丁寧にヨコナデされ、第2タガではタガ頂部にヨコナデによる条線を残している。

内面調整は第1段目がナデとタテハケのみで、第2段目以降は斜め方向のハケメが目立ち始める。タガ取り付け時の横方向のナデのため確實ではないが、第2段目以降のタテハケがそれより下段のタ



第130図 3号埴輪棺下面実測図 (S = 1:15)



第131図 3号埴輪棺出土埴輪実測図(1) (S = 1:4)

テハケと連続する可能性があり、116-1等とは作業工程が異なる可能性がある。第4段目の内面はヨコハケを中心となり、特に口縁端部近くは丁寧に行われている。内面に見られる横方向のナデは、タガ取り付け時以外にも細かい間隔で行われており、128等と共通する。第2・4段目に、透孔が位置する方向で黒斑が見られる。3号埴輪棺に使用される131-1は、他の埴輪棺に使用されるものに比べ、底部付近の損傷が少ない。

132-1は3号埴輪棺口縁部側の朝顔形埴輪頭部の開口部を閉塞していたものである。出土状況ではタガを内側に向か、内面を外に向いていた。円筒埴輪頭部を朝顔形埴輪の内径に合わせて丸く打ち欠いたもので、破片上端が強く外傾することから最上段のタガ周辺であったと思われる。タガはやや高く、外面調整はヨコハケ以外は見えない。内面調整はタガの内側に幅の広いナデが施され、タガより下方は斜め方向のハケメが見える。タガより上位は磨滅しているが、横方向のハケメのみが見え、他の埴輪の口縁部近くの調整に共通する。

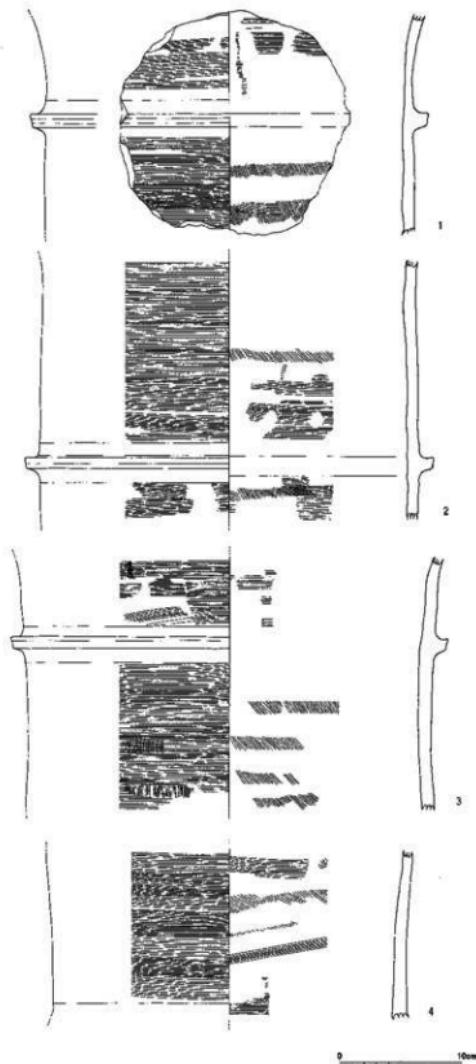
132-2は3号埴輪棺の上面付近の閉塞に使用された円筒埴輪頭部の破片である。上端をつまみ上げた形状のタガを巡らせ、透孔の無い部分のため本来の部位は不明であるが、タガよ

り上段の長さは約16.5cmあり、破片上端までヨコハケが見られることから、破断面は次のタガの位置に当たるものと思われ、第2・3段目と推定できる。外面調整はヨコハケのみで、2次調整によるものと思われる。内面調整はタガ取り付け時のナデ以外は横から斜め方向のハケメが目立つ。外面のはば全面に黒斑が見られる。

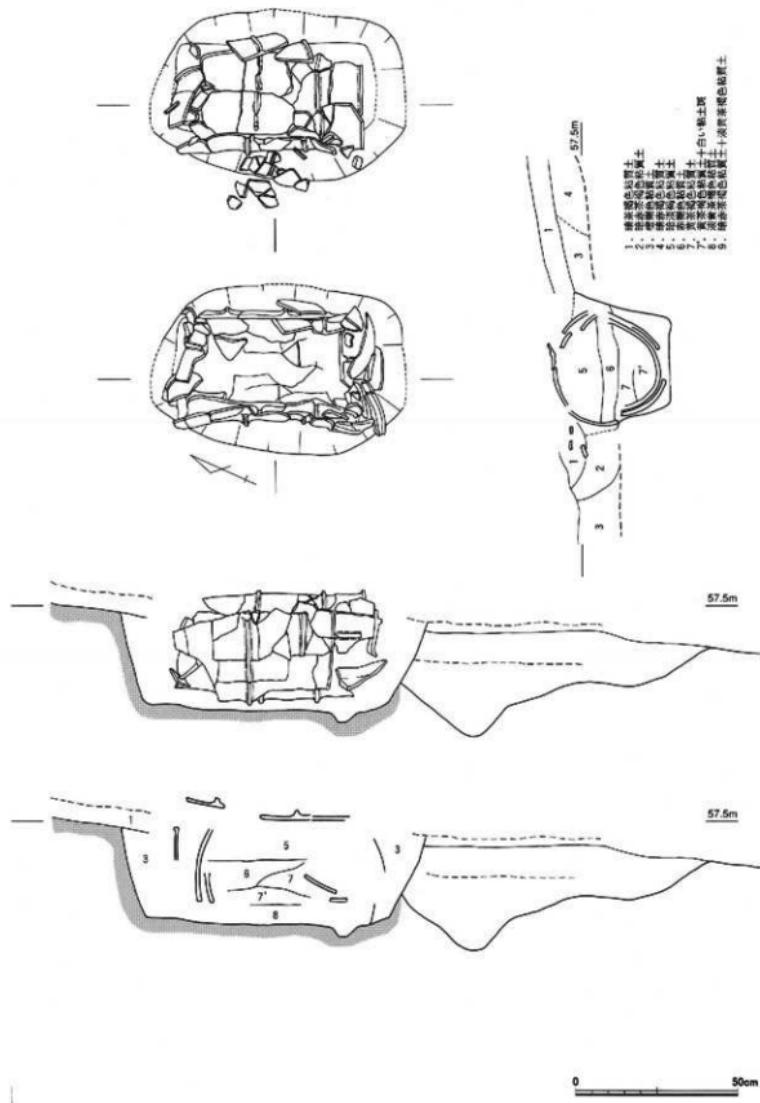
132-3も同様のものであるが、タガより上位の内面調整がヨコハケのみになることから最上段タガ付近のものと思われる。タガはやや高く、外面調整は単位の長いヨコハケで、タテハケの痕跡を僅かに留める。タガより下位の内面調整は、斜め方向のハケメをほぼ2cm間隔の横方向のナデで消している。タガより上位は横方向のハケメしか見えず、器壁も僅かに外傾する。

132-4はタガの無い部位の破片である。外面にはば全面にヨコハケが見られ、図上下端部分にナデが強く施されており、タガ取り付け部に近いことが判る。内面調整は横方向を中心とするハケメで、細かい間隔で横方向のナデが見られる。面のハケの隙間は橙色を呈しており、赤色顔料が塗布されていた可能性がある。

**4号埴輪棺** 4号埴輪棺（第133～135図）は、1号埴輪棺の南東側、標高57.5m付近で検出した埴輪棺である。南北に近い方向に主軸を取り、本体の口縁部を南東に向いている。3号埴輪棺と同様に南東側の地山面が不明瞭で南側に別の土壇が切り合うように見えるが、地山中の土色の違いと



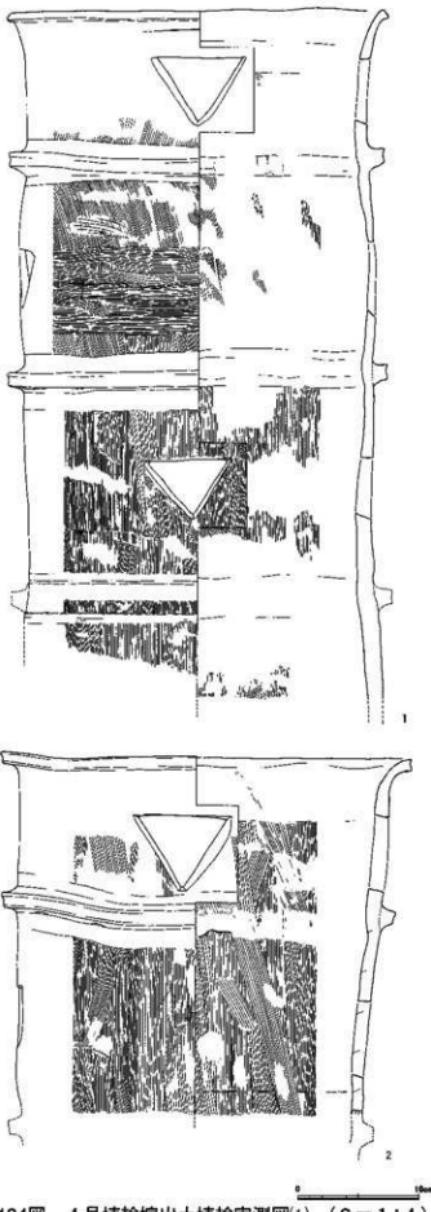
第132図 3号埴輪棺出土埴輪実測図(2) (S=1:4)



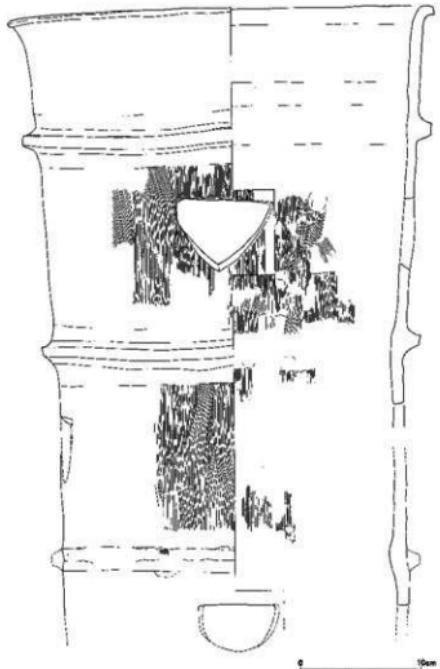
第133図 4号埴輪棺実測図 ( $S = 1:15$ )

判断している。横断面では、2暗赤茶褐色粘質土と3橙褐色粘質土の立ち上がりが見えるが、いずれも周辺側が不明瞭で、掘り込みによるものとは思えない。よって、墓壙は8淡黄褐色粘質土による埴輪棺本体の大きさと差のない規模のものと思われる。周辺部が明瞭でないために墓壙規模は推定による部分が多いが、およそ南北75cm、東西50cm程の長方形を呈すものと思われる。検出できた墓壙の深さは約30cmで、墓壙底面から埴輪棺本体との間には僅かな隙間が見られる。

134-1は、4号埴輪棺本体に使用される円筒埴輪であるが、基部と思われる部分を完全に失っている。図上最下段を第1段目とすると、第1タガは完全に剥離している。タガ剥離面には、1次調整のタテハケが残存しており、下位のハケメと連続することが判る。タガ取り付け部上端に当たる位置にヘラ状工具による沈線が見られ、タガ取り付けの目印と思われる。第2・3タガは、強いナデにより端部の稜が強く見られるものである。口縁端部の形状は、端部下端を断面三角形気味に垂下させるもので、面を持って折り曲げる他の個体とは異なる印象がある。2次調整のヨコハケは、第3段目の中程にしか見られない。第1段目は不明であるが、第2~4段目には、逆三角形の透孔が2方向に見られる。内面調整は磨滅のため見えにくいが、タテハケを中心と



第134図 4号埴輪棺出土埴輪実測図(1) ( $S = 1:4$ )



第135図 4号埴輪棺出土埴輪実測図(2)  
(S=1:4)

デによる稜線と1次調整のタテハケを僅かに残している。第2・3段日の外面には、縱方向のハケメしか見えず、2次調整は行っていない可能性がある。第2・3タガは断面台形を呈し、やや低い。第2・3段日には2方向に透孔が開けられるが、第2段目の透孔の形状は不明である。第4段目には、タテハケが見られず、ヨコナデによって消されているようである。口縁部は強く外反し、外面と頂部の2面に面を持つ。第4段目には透孔は開けられない。磨滅のため明瞭でないが、内面調整にはタテハケが多用されている。内面の第3タガより上位は外面と同様にヨコナデされ、ハケメを残していない。

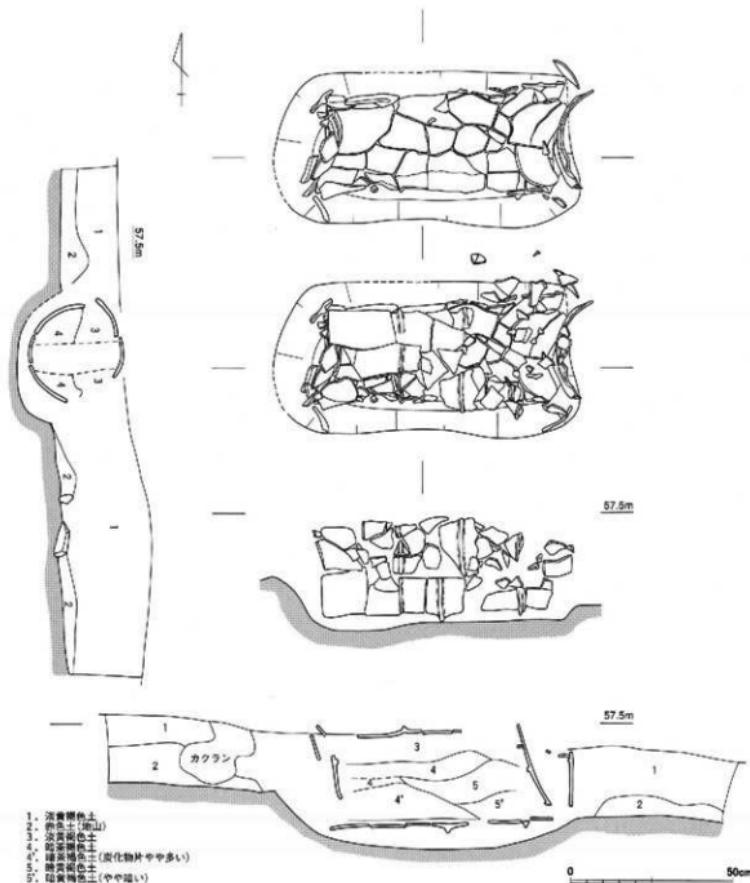
**5号埴輪棺** 5号埴輪棺(第136~138図)は他の埴輪棺から離れて、4号墳東側の標高57.5m付近で検出したものである。5号埴輪棺北東側に接して木が生えていたため、棺内にも多くの根が進入しており、埴輪の破損も多い。2赤色土が地山の一部と見られ、その上面が掘り込み面である可能性があるが、肩が明瞭でなかったため墓壙の検出面はその下面となった。5号埴輪棺は東西方向に主軸を取り、本体の口縁部は東に向かっている。墓壙は東西約90cm、南北約50cmの長方形で、検出できた深さは20cmに満たない。後世の流入度である1淡黄褐色土が埴輪棺の大部分を埋めている他、根による擾乱が多く見られる。2赤色土の上面を当初の掘り込み面と仮定しても、埴輪棺の約半分が地上に露出することになり、マウンドが在ったものと推定される。

なる。

134-2は、4号埴輪棺本体の基部側を閉塞する埴輪片である。他の埴輪と同じ形状とすると、第3・4段目に相当するもので、それぞれに逆三角形の透孔を2方向に開ける。外面調整はタテハケのみで、ヨコハケは見られない。タガは断面台形を呈し、口縁部は強く外反するものである。内面調整はタテハケを強く残しており、タガ取り付け位置以外に強い横方向のナデは見られない。内面には、粘土帶積み上げの粘土の隙間が見える。内面のタガ付近で、橙色を呈する部分があり、ベンガラなどの赤色顔料を塗布された可能性がある。

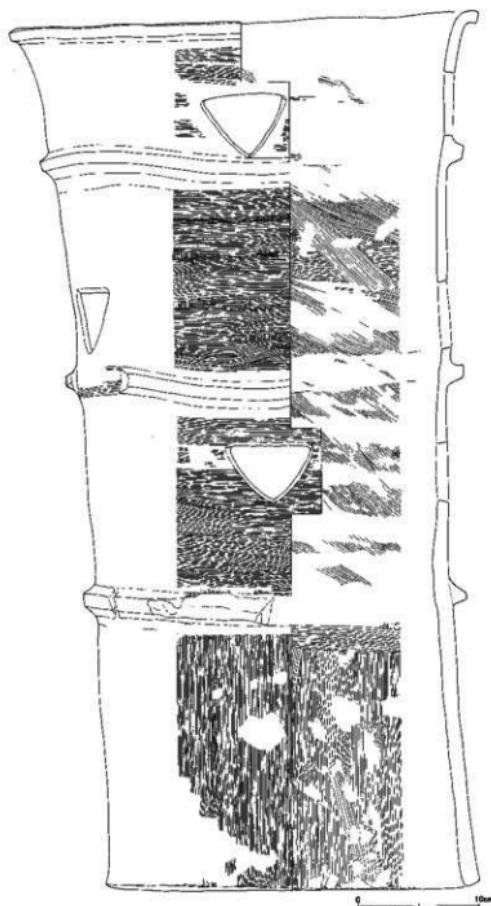
135は、4号埴輪棺の口縁部側を閉塞する埴輪片である。他の埴輪と同様の形態とすると第1段日の大半を欠損するものである。残存している最下端には、透孔の上面が残っており、図上では半円形を想定しているが、逆三角形の可能性もある。磨滅のため外面調整は不明である。第1タガは完全に剥落しており、ナ

137は、5号埴輪棺本体に使用されていた円筒埴輪である。総高72cmを測り、第2～4段目に透孔を持つものである。底部調整はなく、端部が僅かに傾斜し内面側を接地させる。第1段目の外面調整は1次調整のタテハケのみで2次調整は見えない。断面台形を呈しやや低い第1・2タガは、一部が剥落しており、1次調整のタテハケが見える。タガ取り付け部の上面に一致する位置にヘラ状工具による強い沈線が見え、タガ取り付け位置を示すものと思われるが、タガは必ずしも水平には廻らない。タガは、取り付け時にヨコナデされているが、第2・3タガのヨコナデとその直上のヨコハケはほぼ同様の歪み方をしており、タガ取り付けとその上面のヨコハケには関連があるものと思われる。第2タガ剥離面には横方向の条線が見えるが、ヨコハケによるものではなく、タガ取り付け前に繊維等を使用してヨコナデを行ったものと思われる。第2～4段目には2次調整による横



第136図 5号埴輪棺実測図( $S = 1:15$ )

方向のハケメが多く見られ、第2・3段目にはその隙間にタテハケが残る。第2・3段目に主軸を描えた逆三角形の透孔が2方向に開けられ、第3段目に方向を変えて同様の透孔が開けられるが、その差は必ずしも90度ではない。第1段目には透孔は存在しない。全体に緩やかに開く直線的な形状を呈しているが、口縁部はその直下で強く屈曲し、外に向けて面を持つ。口縁部周辺はヨコナデされハケメを残していない。内面調整は第1段目が縱方向のハケメ、2・3段目が斜め方向のハケメで、横方向のナデが多く見られる。第1タガ取り付け部の内面を境にその上下のハケメが連続せず、最初の工程では第1タガまでを積み上げたものと思われるが、第2タガ付近の内面は上下のハケメが連続するように見え、工程が分かれる場所はその5cm程上の透孔上端附近である可能性がある。第4段目の内面はナデが多く入り、ハケメはほとんど残していない。外面に比べ、内面側のハ



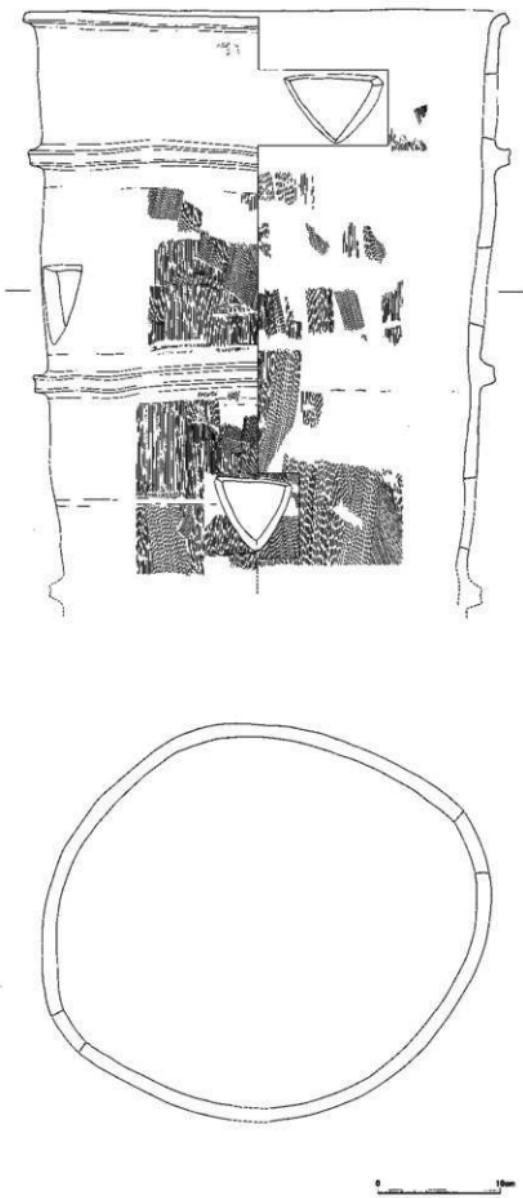
第137図 5号埴輪棺出土埴輪実測図(1) (S=1:4)

ケメの間隔がやや広く見える。内面には橙色に見える部分が多く見られ、ベンガラ等の赤色顔料が使用されていた可能性がある。5号埴輪棺の蓋側の内面に強く見られるもので、棺底側には多くは見られない。第2・4段目に透孔が開く位置で黒斑が見られる。

138は、5号埴輪棺の閉塞に使用されていたものである。127と同様に断面椭円形を呈している。全体の形状は直立気味で、口縁部に向けて開くことがない。基部側を欠いているが、他の埴輪と同様の高さのものとすると、第1タガ付近より下方を欠くことになる。第2・3段目と推定される位置の外面には単位の短く見える縱方向のハケメが施されており、ヨコハケは見えない。第4段目は口縁端部まで丁寧にヨコナデされ、ハケメを残していない。第2・3タガは強くヨコナデされるもので、各面が窪んでいる。第1段目は不明であるが、第2～4段目は逆三角形の透かしをそれぞれ2方向に開けている。第3段目と第4段日の透孔

の開く位置関係はほぼ90度の角度差を持つが、第2段目の透孔の位置は第4段目の位置から僅かにずれている。椭円形になる断面形の主軸は、第3・4段目の透孔の位置関係に一致している。内面調整はタテハケを中心とするものであるが、タガ取り付けに伴う横方向のナデは明瞭ではなく、強くは行われていない。第4段目の内面調整は中程まではタテハケを僅かに残すが、上半はヨコナデされる。

外面第2段目の中程には幅5mm程の強い指ナデによる線が見える。この線は上下で連続するハケメを切っており、タテハケ以後に行われたものである。第2タガと第3タガの間隔は約18cmであるが、この指ナデの線の引かれる位置は第2タガの中心より9cm下方に当たっており、タガ間の半分であることから何かの目印であると思われるが、その用途は不明である。第3段目では透孔の位置がタガ間の中心より僅かに下方にあり、上位のタガから透孔までの間隔が第2段目等しいことから透孔の位置決め



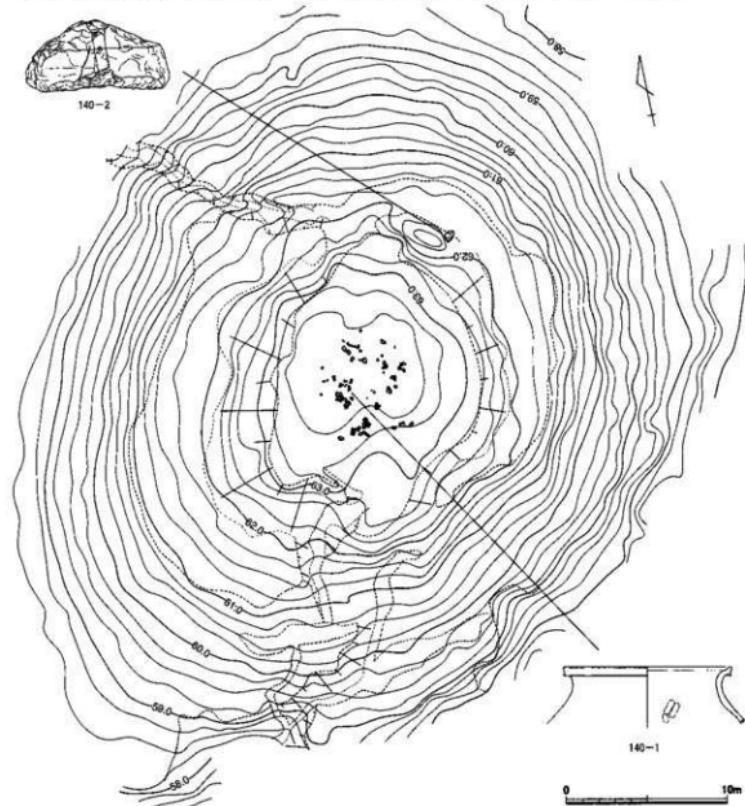
第138図 5号埴輪棺出土埴輪実測図(2) (S = 1:4)

を行ったものである可能性がある。ただし、タガの取り付けは歪みが大きく、指ナデの線と必ずしも一致するものではない。

上野遺跡Ⅰ区から検出した6基の埴輪棺は、いずれも総高70cm程の埴輪を棺に使用しており、棺の内法も総高に近い大きさしかなく、複数の円筒埴輪を連結した埴輪棺は見られなかった。70cm程しかない棺内に人を埋葬することができるか、という疑問があったため、全ての埴輪棺について棺内の土を採取し、燐が含まれているかどうかを分析したところ、燐濃度については全ての埴輪棺で周囲の土壤と差が見られなかった。本来燐は流出しにくいものと聞いていたため、この結果は棺内に有機質が入っていなかった可能性を示すものと注目していたが、137の埴輪の赤色顔料の残存状況からは棺内がかなり洗い流されている可能性を示唆しており、その結論は先送りせざるを得ない。

## 第5節 中世と考えられる遺物

上野1号墳墳丘は多くの道が走り、一部に削平面も見られることから、後世の改変が及んでいる



第139図 上野1号墳表土除去状況(S=1:300)

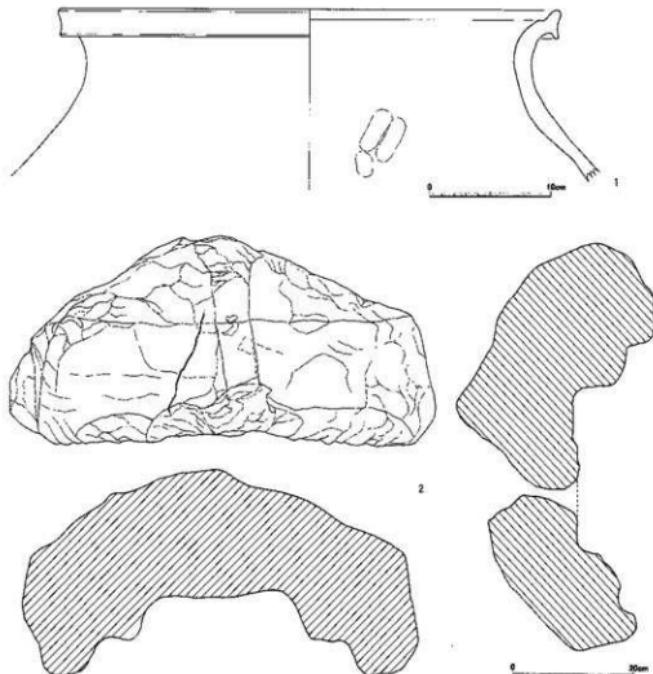
範囲が広いことは当初から予想されていた。表土掘削時には墳頂付近からは、常滑系と考えられる壺の破片がまとまって出土し、改変が行われた時期の一つの可能性として鎌倉時代が浮かび上がった。

第139図は、表土除去後の上野1号墳である。北側と南側から墳頂部に向けて斜めに上る道が見られ、北側の道は標高62m付近のテラスへ、南側の道は墳頂部へ直接繋がっている。

墳頂部南側は、第1主体部上面を削った削平地（第97図の第1主体部南東側）があり、その削平地が南側の道に繋がることが判る。墳頂部には、来待石と考えられる隼人の石と常滑系の壺片が散乱していた。墳頂部に明確な遺構等は見られないが、米待石製の石塔と壺が置かれていたものと思われ、南側から登る道と繋がっていたものと考えられる。

北側の道は、標高62m付近のテラスに連続しているが、このテラス付近には梢円形の落ち込みが見られた。東西約2.7m、南北約1.4mで、深さは30cm程度である。内部には腐植土が堆積していた以外人為的な痕跡は見られないが、そのまま脇に来待石の石塊（140-2）が置かれていた。140-2は石塔の部材と思われるが、墳頂部に見られた石片以外他の部材は見あたらなかった。この石塊は、埋没しておらず地表に露出した状態で発見された。

140-1は、上野1号墳墳頂部で出土した陶器壺の口縁部である。表面は暗赤褐色を呈し艶があるが、胎土は灰色を呈し僅かな隙間が多く見られる。口縁部を拡張させ、肩が強く張るプロボーシ



第140図 上野1号墳出土遺物実測図(中世) (1はS=1:4、2はS=1:8)

ヨンとなっており、常滑の福年に照らし合わせれば第3段階のものに似た形態で、13世紀後半から14世紀前半の年代が考えられる。<sup>(13)</sup>

140-2は、上野1号墳テラスト上で採取した石製品である。日の粗い灰色を呈す石材で、米待石（凝灰質砂岩）と思われる。平面形は6角形を呈するものと思われ、下面に平面凹形を呈す2段の彫り込みが見られる。磨滅が著しく細部の形状は明瞭ではないが、灯籠の笠部であろうか。

註1 「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」鳥根県教育委員会1980年

註2 岡崎雄二郎「古墳を訪ねて」『郷土誌ふるさと秋鹿』1985年

註3 「水溜古墳群」宍道町教育委員会1988年

註4 「清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査報告書」宍道町教育委員会1985年

註5 西尾克己『宍道町の古墳時代』宍道町教育委員会1992年

註6 「杓子觀音I-1号墳」『鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報IX』鳥根県教育委員会2001年

註7 山本清「山陰の鼓形器台と当代の墓制」「出雲の古代文化」1987年

註8 仿製斜線神獸鏡については、京都大学森下章司氏の指導を得たが、銅鏡の保存状態が悪かったことにより、写真による指導となった。そのために実物と異なる何らかの誤解が生じた可能性があるが、その責任は全て林にある。

註9 「山地古墳発掘調査報告書」出雲市教育委員会1986年

註10 森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林71-6』1991年

註11 黒塚古墳

註12 置田

註13 赤羽一郎「常滑一知多半島古窯址群ー」『世界陶磁全集3 日本中世』1977年

第2表 上野遺跡土器観察表

序号	番号	法数(cm)	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・焼成・胎土		備考
					山口	海岸	
3	7	無	[6.3] [6.4] [2.3]	野原跡Ⅲ(西) 605 鹿屋土内 17.6	野原褐色	良好	
11-1	11	無	外底:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	1号逆物跡 970617	野原褐色	良好 1mm以下の付色の砂粒を含む	*
2	裏	(36.6)	外底:ヨコナデ 内面:ヨコメツ	1号逆物跡 970611	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
3	裏	(14.2)	外底:ヨコナデ 内面:ヨコメツ	1号逆物跡 9609	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
4	裏	(14.9)	外底:ヨコナデ 内面:ヨコメツ	1号逆物跡 970723	野原色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
5	高 平	(21.0)	マツフ	1号逆物跡 970805	野原色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
6	高 台	(受付部)	外底:周縁断、ヨコナデ 内面:マツフ	1号逆物跡 970805	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
7	氏新跡	(4.4)	マツフ	1号逆物跡 970821	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
8	氏新跡	(4.6)	マツフ	1号逆物跡 970822	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
9	高 (2)	3.2	外底:ナデ 内面:ヘラケズリ	1号逆物跡 9609	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
12	度	14.6 41.6 77.3		1号逆物跡 970821	野原色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
16-1	度	(11.0)	マツフ	2号逆物跡 970721	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
2	度		マツフ	2号逆物跡 970723	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
3	度		マツフ	2号逆物跡 9616	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
4	度	(61.0)	マツフ	2号逆物跡 970814	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
5	度	(32.0)	マツフ	2号逆物跡 970814	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	*
6	度		マツフ	2号逆物跡 970815	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
7	度台	(20.0)	マツフ	2号逆物跡 970822	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
8	度台	(受付部)	マツフ	2号逆物跡 970722	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
9	度台	(受付部)	マツフ	2号逆物跡 970723	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
10	度台	(20.0)	マツフ	2号逆物跡 970723	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
11	度台	(受付部)	マツフ	2号逆物跡 970723	白褐色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
12	度 (3)	(20.0)	マツフ	2号逆物跡 970821	中央上丸	良好 1mm~2mmの砂粒を多く含む	*
13	度 (3)	(22.4)	マツフ	2号逆物跡 970821	中央上丸	良好 1mm~2mmの砂粒を多く含む	*
14	度		外底:ハタヌヘラヨキ 内面:ナデ, ヘラクズリ	2号逆物跡 9621	淡黃褐色	良好 1mm~2mmの砂粒を多く含む	*
15	度		マツフ	2号逆物跡 970818	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
16	度		マツフ	2号逆物跡 970722	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
17	度		マツフ	2号逆物跡 970818	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
18-1	度	(5.6)	マツフ	3号逆物跡 971708	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
2	度台	(受付部)	マツフ	3号逆物跡 971708	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
20-1	度	(25.0)	外底:ヨコナデ, ナデ 内面:ヨコナデ, ナデ	4号逆物跡付及 9605	淡黃褐色	良好 1mm~2mmの砂粒を多く含む	*
2	度	(6.5)	外底:ナデ 内面:強~強印立痕	4号逆物跡付及 970818	暗褐色	良好 1mm~2mmの砂粒を多く含む	*
21-1	底跡付	(8.2)	外底:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	4号逆物跡 970801	赤褐色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
25-1	度	2.4	外底:平素織文灰系, 但破文7条 内面:ヨコナデ	十数面まり 960817	暗褐色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
2	度	(23.6)	外底:田字文6条 内面:ヨコオサエ	土表面まり 96144	淡黃色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
3	度	(29.6)	外底:マツフ 内面:周縁粗厚	土表面まり 970818	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
4	度	(3.6)	外底:ナデ, 麦穗状波文 内面:ナデ	土表面まり 970824	淡黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
5	度	(16.5)	マツフ	十数面まり 970901	黃褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
6	度		外底:正方形3条 内面:マツフ	土表面まり 970901	暗褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
26-1	度		マツフ	土表面まり 970912	暗褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*
2	度	(4.9)	外底:ナデ 内面:ヨコマツフ	土表面まり 970818	赤褐色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
3	度	(3.6)	マツフ	十数面まり 970818	赤褐色	良好 1mm以下の砂粒を含む	*
4	度	(4.6)	外底:ナデ 内面:ヨコマツフ	土表面まり 970818	小褐色	良好 1mm以下の砂粒を多く含む	*

番号	品種	法算(m)	形態・手法の特徴	出 土 場 所・年月日	色調・焼成・施土・		備考
					口耕	透透	
5 〔良〕	マツツ			土器底より No.1	[外周]褐色(内面)荷物色 2mm以下の砂粒を多く含む	不良	先生上森
27-1 〔良〕	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ			土器底より No.1	[外周]淡黄色(内面)荷物色 1mm以下の砂粒を多く含む	良	"
2 〔良〕	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ			土器底より No.6	[外周]淡黄色(内面)荷物色 黄褐色 良好	"	"
3 〔口耕型〕	(17.2)	マツツ		土器底より No.45	1mm以下の砂粒を含み、きめ細かい	良好	"
4 〔口耕型〕	(18.2)	マツツ		土器底より No.19	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	"
5 〔口耕型〕	(18.6)	外面:マツツ 内面:ヨコナナ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
6 〔口耕型〕	(19.4)	マツツ		土器底より No.32	2mm以下の砂粒を少々含む	良好	"
7 〔良〕	マツツ			土器底より No.11	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
8 〔良〕	(13.6)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
9 〔良〕	(16.4)	マツツ		土器底より No.25	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
10 〔口耕型〕	(14.0)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
11 〔良〕	外面:ヘテナ 内面:ヘテナ、ヘラケズリ			土器底より No.33	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
12 〔良〕 〔受け型〕	(19.2)	マツツ		土器底より No.42	[外周]淡黄色 1mm-2mmの砂粒を多く含む	良好	"
13 〔良〕 〔受け型〕	(18.8)	マツツ		土器底より No.69	[外周]淡黄色 1mm-2mmの砂粒を含む	良好	"
14 〔良〕 〔受け型〕	(18.0)	マツツ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
28-1 〔長脚型〕	7.3	外面:コメツ 内面:ヨコオサエ		土器底より No.13	[外周]淡黄色 3mm以下の砂粒をなり多く含む	良好	"
2 〔長脚型〕	マツツ			土器底より No.17	[外周]淡黄色 1.5mm以下の砂粒を含む	良好	"
3 〔良〕	(6.0)	マツツ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
4 〔良〕	(5.4)	マツツ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
5 〔良〕 〔送部〕	(0.0)	マツツ		土器底より	[外周]淡黄色 2mm以下の砂粒を含む	良好	"
6 〔良〕 〔送部〕	(11.2)	マツツ		土器底より No.7	[外周]淡黄色 2mm以下の砂粒を含む	良好	"
7 〔良〕 〔送部〕	(16.6)	マツツ		土器底より	[外周]淡黄色 1mm-2mmの砂粒を多く含む	良好	"
35-1 〔L脚型〕	(18.0)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ		I-3区 背面 磨市下	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
2 〔L脚型〕	(13.9)	マツツ		I-1区	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
3 〔口耕型〕	(13.4)	マツツ		I-4区 テンノ右側	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
4 〔口耕型〕		外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ		I-1区	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
5 〔口耕型〕	(19.4)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ		I-4区 テンノ背面	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
6 〔口耕型〕	(14.6)	マツツ		I-4区 テンノ背面	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
7 〔良〕	(20.9)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ		I-3区 背面	[外周]淡黄色 1mm-2mmの砂粒を少々含む	良好	"
8 〔良〕	(23.7)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ		I-3区 背面	[外周]淡黄色 1mm以下の白色の砂粒をやや多く含む	良好	"
9 〔良〕 〔口耕型〕	(24.4)	マツツ		I-3区 背面	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
10 〔高环〕	(22.4)	マツツ		I-3区 ピノ脚付 直市下	[外周]淡黄色 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	"
11 〔良〕 〔高台〕	外面:マツツ 内面:ヘラケズリ			I-1区	[外周]淡黄色 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
12 〔良〕 〔受け型〕		マツツ		I-2区 オノ井 南	[外周]淡黄色 2mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
13 〔良〕 〔受け型〕	(17.6)	マツツ		I-1区	[外周]淡黄色 3mm以下の砂粒を多く含む	良好	"
36-1 〔环〕	(12.0)	4.5 外面:口耕ヘラケズリ、口耕ナデ 内面:口耕ナデ		I-3区 新屋	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	須藤
2 〔外〕	11.9	42 外面:口耕ヘラケズリ、口耕ナデ 内面:ヨコナナ		I-3区 背面	[外周]淡黄色 1.5mm以下の砂粒を含む	良好	"
3 〔外〕	(11.9)	外面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ		I-3区 オノ脚付 迢士ト	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
4 〔口耕型〕	(26.2)	外面:ヨコナナ、波瀬文波瀬 内面:ヨコナナ 内面:ヨコナナ		I-1区 西面脚付	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
5 〔良〕	(11.4)	外面:ヨコナナ、波瀬文 内面:ヨコナナ		I-3区 背面 表上下	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	"
6 〔高台〕 〔高台〕		マツツ		I-3区 背面	[外周]淡黄色 1mm以下の砂粒を含む	良好	十輪
45-1 〔L脚型〕	(12.6)	外面:直浦文、黒ナデ 内面:ヨコナナ、ヘラケズリ		5号建物跡	2mm以下の砂粒を含む	良好	先生土森
2 〔良〕	(19.4)	マツツ		5号建物跡	2mm以下の砂粒を含む	良好	"
3 〔良〕	(14.8)	マツツ		5号建物跡	2mm以下の砂粒を含む	良好	"



測定番号	法形(m)	形態・寸法の特徴	尚士場所・年月日	色調・焼成・船上	備考
	山頂	西端	最高		
5 売 (C型)	(23.2)	マメツ	4号壇 Pd1245 97/10/4	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	外生土器
6 売台 (C型)	(36.0)	外面:平行縦文4条 内面:ヘラミガキ	4号壇 Pd1242 97/11/04	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
7 売台 (C型)		マメツ	4号壇 Pd12012008 (外型) 暗赤色 (内面) 暗赤色 良好	「一」の砂粒を少く含む	*
8 売台 (C型)		マメツ	4号壇 Pd1238 97/10/4	淡黄褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
9 売台 (C型)	(30.6)	外面:ヨコナデ 内面:マメツ	4号壇 Pd1243 97/10/25	黃色土巾 暗赤褐色 「一」以下の砂粒を少く含む	*
10 高坪		外面:マメツ 内面:ヘラミガキ	4号壇 Pd1218 97/11/04	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を多く含む	*
11 古坪 (C型)		外面:ナデ 内面:ヘラミガキ, ヘラケズリ	4号壇 Pd1244 97/11/4	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
12 斧 (D型)	(18.0)	マメツ	4号壇 Pd1238 97/10/4	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
13 釜 (D型)	(6.6)	外面:ナデ 内面:ヘラミガキ	4号壇 表土巾 97/10/27	灰褐色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
57-1 釜 (D型)		マメツ	2号壇 97/10/19 日向赤色土巾 (外) 明褐色 (内面) 暗褐色	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を多く含む	*
2 小型(1)		外面:平行縦文3条 内面:ナデ	3号壇 岩浦内 Pd110 97/09/2	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
3 売 (11.2) (7.0) (25.0)		外面:直縦文9条, ナラミガキ, 破片灰, ハウス 内面:ヘラミガキ, ヘラケズリ	2号壇 盛上下 Pd1278 97/12/5	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
58-1 売		外面:ヨコナデ, 暗赤 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 周囲斜面 暗赤褐色上 97/09/11	暗赤褐色 良好 「一」の白色の砂粒をやや多く含む	*
2 売 (19.0) (L型)		外面:直縦文10条, ナラミガキ 内面:ヘラミガキ, ヘラケズリ	2号壇 盛セド Pd73 97/12/8	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
3 売 (18.4) (L型)		外面:直縦文9条, ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 Pd73 97/09/12	暗赤褐色 白色の砂粒を多く含む 「一」の砂粒を少く含む	*
4 斧 (15.8) (L型)		外面:直縦文10条, ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ラミガキ, ヘラケズリ	3号壇 岩浦内 Pd109 97/09/12	淡黄色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
3 売 (20.2) (L型)		外面:直縦文8条, ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 埋土 97/09/04	暗赤褐色 (外) 暗赤褐色 (内) 暗褐色 「一」以下の白色の砂粒を含む	*
6 売 (16.3) (L型)		外面:直縦文12条, ヨコナデ 内面:ヨコナデ	2号壇 流上中 Pd9095 97/09/05	暗赤褐色 良好 「一」以下の白色の砂粒を含む	*
7 売 (25.6) (C型)		外面:直縦文12条 内面:ヨコナデ	2号壇 Cトレチ 黄色土巾 97/06/13	暗赤褐色 (外) 暗褐色 (内) 暗赤褐色 「一」以下の白色の砂粒をやや多く含む	*
8 売 (投合型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 Pd912 97/09/12	暗赤褐色 良好 「一」の白色の砂粒を含む	*
9 売 (17.6) (C型)		外面:ナラミガキ, 破片灰 内面:ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 Pd106 97/09/12	暗赤褐色 (外) 明褐色 (内面) 暗褐色 「一」以下の白色の砂粒を多く含む	*
10 売 (24.4) (C型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦赤色土巾 97/09/12	暗赤褐色 良好 「一」以下の白い砂粒をやや多く含む	*
11 古坪 (C型)	(15.9)	外面:直縦文10条, ヨコナデ 内面:ヨコナデ	2号壇 岩浦内 Pd1036 97/10/27	暗赤褐色 良好 「一」以下の白色の砂粒をやや多く含む	*
12 古坪 (C型)		外面:直縦文10条, コヨナデ 内面:ヨコナデ	2号壇 繼縫仕立て 黄褐色土巾 97/09/11	暗赤褐色 良好 「一」以下の白色の砂粒を含む	*
13 売 (C型)	(18.7)	外面:ヨコナデ, ナラハメタ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 Pd86 97/09/12	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を含む	*
14 売 (20.9) (C型)		外面:ヨコナデ, ハメタ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 Pd82 97/09/12	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
15 売 (19.6) (C型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 Pd89 97/09/12	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒をやや多く含む	*
16 売 (19.6) (C型)		外面:ヨコナデ, ハメタ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	2号壇 岩浦内 Pd93 97/09/12	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
59-1 売 (18.4) (C型)		外面:直縦文5条, ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	S-D-0-9 Pd317 98/05/28	淡黄色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
2 売 (16.2) (C型)		外面:平行縦文4~5条, ナラ 内面:ナラミガキ	I-3 区 黄褐色土巾 97/09/29	淡黄色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
3 売 (16.0) (L型)		外面:直縦文5条, ヨコナデ 内面:ナラミガキ	I-3 区 表土 97/09/30	淡黄色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
4 売 (11.6) (L型)		外面:平行縦文12条, ヨコナデ 内面:ヘラミガキ, ヨコナデ	I-5 区 黄褐色土巾 97/10/29	淡黄色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
5 売 (17.4) (C型)		外面:平行縦文5条~1条 内面:ヨコナデ	I-2 区 黄色土巾 97/11/04	淡黄色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
6 売 (17.0) (C型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	S-D-0-9 N-d19 98/05/29	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
10 売 (15.2) (C型)		マメツ	II-1 区 表土巾 97/08/29	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
11 売 (15.4) (C型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	S-D-0-9 N-d20 97/08/29	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
12 売 (14.4) (C型)		マメツ	II-2 区 表土巾 97/08/29	暗赤褐色 良好 「一」の砂粒を少く含む	*
13 売 (16.0) (C型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	Ⅲ区 墓上中 97/12/29	暗赤褐色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
14 売 (13.6) (C型)		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ, ヘラケズリ	4号壇付近 97/08/29	淡黄色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
15 売 (C型)		マメツ	Ⅲ-3 区 黄褐色土巾 97/09/11	淡黄色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*
16 売 (C型)		外面:波状紋, 平行縦文4条 内面:マメツ	Ⅲ-5 区 土表面より 97/22/29	淡黄色 良好 「一」以下の砂粒を少く含む	*

番号	品種	法量 (g)		形態・手法の特徴	出上場所・年月日	色調・焼成・船上	備考
		口径	延長				
17 茶(開口)	外輪:平行管足2条、3コナデ 内輪:コナデヘラ・オキ、ヘラケズリ				I-1区 黄褐色土中 970826	暗赤褐色 良好	先生上着
18 茶(丸口)	(15.2) 外輪:平行管足10条、ナデ 内輪:ムラキオキ				I-1区 黄色土中 970826	1cm以下のみを含む 黄色 良好	・
19 白(開口)	外輪:平行管足10~11条 内輪:ナメツ				I-1区 黄褐色土中 970826	1cm以下のみを含む 黄褐色 良好	・
20 白(開口)	マツツ				I-3区 黄褐色土中 970826	1cm以下のみを含む 黄褐色 良好	・
21 白(開口)	外輪:ヒラミオキナデ、ナデ 内輪:ヒラミオキ				I-2区 黄褐色土中 970826	1cm以下のみを含む 黄褐色 良好	・
22 (北部)	マツツ	2.6			SD-0.7付近 PNo1701.1702	2cm以上の中段を多く含む 浅褐色	・
23 (北部)	外輪:ヒハゲヌ 内輪:ナメツ	6.8			SD-0.7付近 PNo1701.1702	1cm~2mmの砂粒を多く含む (外輪)薄褐色(内輪)淡褐色 良好	・
24 (北海)	マツツ				I号罐 表土中 970810	2cm以上の中段を多く含む 浅褐色	・
65-1 (南)	(10.7) 5.5 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ 内輪:凹輪ナデ				2号罐 深土中、ベルト内 高千石 970704~971226	1cm以下の中段をわざかに含む 褐色	表面着
2 (南)	10.2 (5.6) 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ 内輪:凹輪ナデ				2号罐 塩田表土中 970827	1cm以下の中段をわざかに含む 青灰、紫灰 良好	・
3 (南)	外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ 内輪:凹輪ナデ、ナデ				2号罐 深溝内 No.98~102 970822	1cm以下の中段を多く含む 褐色	・
4 土上	[門口] 3.0 [門口] 2.7				2号罐 黄褐色土中 970812	1cm~2mmの砂粒を多く含む 浅褐色	土製品
65-2 (南)	13.8 (5.7) 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ 内輪:凹輪ナデ				3号罐 No.1~15 971205	1cm以下の中段をわざかに含む 浅褐色	表面着
2 (南)	16.0 (4.0) 20.3 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヒタキ 内輪:凹輪ナデ、青海波皮				3号罐 No.1~15 970822	1cm以下の中段をわざかに含む 浅褐色	・
72-1 (南)	(13.4) (4.5) 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ 内輪:凹輪ナデ、ナデ				4号罐 PNo1225~1226 971104	1cm以上の中段をわざかに含む 浅褐色	・
2 青(北)	(12.4) 外輪:コナデ 内輪:コナデ、ヒラケズリ				4号罐 PNo1761 971225	1cm以上の中段を多く含む 青色	土製品
77 青	(24.4) 外輪:ヨコテラ、タガ内葉、ヒコハゲ 内輪:ヒコハゲ、ヒラケズリ				6号罐 北端溝内 No.1~15 971222	1cm以下の中段を多く含む 白色	・
85-1 青(南)	(11.4) 外輪:凹輪ナデ 内輪:凹輪ナデ				8号罐 アビ内 PNo873.875 970822	地の表面を多く含む (外輪)淡褐色(内輪)深褐色 良好	深褐色
2 (北)	10.8 [門口] 4.8 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ 内輪:凹輪ナデ、ナデ				8号罐 アビ内 971108	1cm以下の中段を多く含む 淡褐色	・
3 (南)	8.3 [門口] 8.1 外輪:凹輪ナデ、カキメ、平野タキ 内輪:凹輪ナデ				8号罐 PNo.848~856 971208	1cm以下の中段を多く含む 淡褐色、青灰、米灰色 1cm以上的砂粒を含む	・
88-1 青(高台)	(12.4) 外輪:凹輪ナデ、内輪:ナメツ 内輪:凹輪ナデ				9号罐 南西 971226	1cm以上的砂粒を多く含む 青褐色	・
2 (南)	(16.4) 2.7 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヒラケズリ、ナデ 内輪:凹輪ナデ				9号罐 南端溝内 PNo1547~1592 971226	1cm以下の中段をやや多く含む 青褐色	・
3 (南)	(9.4) 5.1 外輪:凹輪ナデ、内輪:ナメツ 内輪:凹輪ナデ				9号罐 PNo.1555~1600 971226	1cm以下の中段をやや多く含む 淡灰褐色	・
50-1 (南)	14.4 (5.8) 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヒラケズリ 内輪:凹輪ナデ				土端高 No.3 971207	青色 1cm以下の中段をわざかに含む 青褐色	・
2 (南)	14.4 5.2 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ				上端高 No.5 971210	1cm以上的砂粒を含む 青色	・
3 (南)	13.3 4.6 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヘラケズリ				7号罐 No.4 971210	1cm以下の中段を含む 淡褐色	・
4 (南)	12.4 (1.8) 5.1 外輪:凹輪ナデ、内輪:ヒラケズリ 内輪:凹輪ナデ				7号罐 No.5 971210	1cm以下の中段をもくろむ 淡褐色	・
5 (北)	(12.6) 5.9 外輪:ヨコテラ、ヒアメ 内輪:ナデ				土端高 No.7 971210	1cm以下の中段をもくろむ 1cm~2mmの砂粒を多く含む 青褐色	土端高 井筒式 表面着
85-1 (門口)	(22.6) 5.7 マツツ				I-2区 黄色土中 971218	1cm~3mmの砂粒を多く含む (外輪)淡褐色(内輪)深褐色 良好	・
2 (南)	(9.6) マツツ				I-1区 黄褐色土中 970826	1cm~2mmの砂粒を多く含む 淡褐色	・
4 (北部)	10.6 [門口] 9.6 外輪:ナデ 内輪:ナデ				II区 深土中 No.1643 970822	1cm以下の砂粒を多く含む 青褐色	・
5 灰	マツツ				4号罐 井戸外 黄色土 970823	1cm~2mmの砂粒を多く含む 青褐色	先生上着
6 (門口)	(18.0) 外輪:ヒタキナデ、ナメツ				I区 表土中 971229	1cm以上的砂粒を含む 青褐色	・
7 (L端部)	(8.3) (1.8) 外輪:ナメツ 内輪:ヒコナデ、ナデ、ヘラケズリ、ヨコヒロヒメ				II-2区 黄色土中 971218	1cm~2mmの砂粒を多く含む 淡褐色	・
8 (南)	(14.6) 外輪:ヨコナデ 内輪:ヒコナデ				SD-0.9 No.336 980528	1cm以下の砂粒をわざかに含む 淡褐色	・
9 (門口)	(21.2) 外輪:凹輪ナデ 内輪:凹輪ナデ				I号罐 表土中 PNo1 970821	1cm以下の砂粒をわざかに含む 淡褐色	表面着
10 青	6.0 外輪:凹輪ナデ 内輪:凹輪ナデ				I号罐 表土中 PNo1 971009	1cm以下~1mmの砂粒を多く含む 淡褐色	・
11 (南)	(21.0) 外輪:凹輪ナデ 内輪:凹輪ナデ				I-5区 表土中 971209	1cm以下の砂粒を多く含む 淡褐色	・
12 (高台)	(10.8) 外輪:凹輪ナデ、内輪:ナメツ 内輪:ナデ				3号罐 表土中 970703	1cm以下の砂粒を含む 淡褐色	・
13 青	(16.6) 5.1 外輪:凹輪ナデ 内輪:凹輪ナデ				3号罐 表土中 970820	砂粒を含まない 淡褐色	・
14 青	(15.2) 外輪:凹輪ナデ 内輪:凹輪ナデ				4号罐 附近 970820	砂粒を含まない 淡褐色	・
15 青	(15.0) 外輪:マツツ 内輪:ナデ				4号罐 表土中 971209	1cm以下の田代の砂粒を少々含む 淡褐色	・
16 (高台)	(14.4) 外輪:マツツ 内輪:ナデ				4号罐 表土中 971111	1cm~3mmの砂粒を多く含む 淡褐色	土端高





番号 品種	法尺(cm)			形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・焼成・胎土	備考	
	口径	高さ	壁高					
2 内面埴輪	37.8	32.8	7.1	外側:「1段目」は2方角のハケメ 3段目~4段目はヨコ方向のハケメ 内側:「1段目」~3段目はヨコ方向のハケメ 4段目はヨコ方向のハケメ タガ:3段、凹形でない スカラ:2段、凹形の正面 2段の側面 底二角形 底三角形	3号埴輪箱 97107~97119	淡黄褐色 1mm~2mmの砂粒をかなり多く含む	良好	↑斜面
132 内面埴輪				外側:ヨコ方向のハケメ 内側:ヨコ方向のハケメ ナマセ方向のハケメ タガ:1段、高く高い	3号埴輪箱 97120	淡黄褐色 1mm以下の中粒を少數含む	良好	
2 内面埴輪				外側:ヨコ方向のハケメ 内側:ヨコ方向のハケメ ナマセ方向のハケメ タガ:1段、低い	3号埴輪箱 97123, 97201	淡黄褐色 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	
3 内面埴輪				外側:ヨコ方向のハケメ ナマセ方向のハケメ 内側:ナマセ方向のハケメ タガ:3段(うち1段は欠損) 高く高い スカラ:3段目、4段目の正面 底二角形 底三角形 底二角形 底三角形	3号埴輪箱 97120, 97121, 97122, 97123, 97124	淡黄褐色 1mm以下の砂粒をこくわずかに含む	良好	
4 内面埴輪				外側:ヨコ方向のハケメ 内側:ヨコ方向のハケメ ナマセ方向のハケメ タガ:1段、高い	3号埴輪箱 97120	淡黄褐色 1mm以下の砂粒を少數含む	良好	
141 内面埴輪	31.4			外側:1段目~2段目はヨコ方向ハケメ 3段目はヨコ方向底二角 4段目はヨコ方向のハケメ タガ:3段(うち1段は欠損) 高く高い スカラ:3段目、4段目の正面 底二角形 底三角形 底二角形	4号埴輪箱 97122~97128	淡黄褐色 1mm程度の砂粒を多く含む	良好	
2 内面埴輪	34.0			外側:ヨコ方向のハケメ 内側:ヨコ方向のハケメ タガ:1段、凹形でない スカラ:2段の正面 底二角形 底三角形	1号埴輪箱 97106~97114	淡黄褐色 1mm~2mmの砂粒を多く含む	良好	*
135 内面埴輪	35.2			外側:ヨコ方向のハケメ 内側:ヨコ方向のハケメ タガ:3段(うち1段は欠損) 台形で高い スカラ:1段目、2段目と3段目と4段目 底二角形 底三角形	1号埴輪箱 97107~97120	淡黄褐色 1mm~2mmの砂粒を多く含む	良好	*
137 内面埴輪	36.8	36.8	7.2	外側:ヨコ方向ヨコカーブのハケメ 2段目~4段目はヨコ方向内カーブ 内側:ヨコ方向内カーブ 2~3段目はナマセ、ヨコ張じるハケメ ナマセの2段目と3段目はヨコ張じるハケメ スカラ:1段目、2段目と3段目と4段目 底二角形 底三角形	5号埴輪箱 971201~971224	淡黄色 1mm~2mmの砂粒を少數含む	良	*
138 内面埴輪	40.0			外側:ヨコ方向のハケメ 内側:ヨコ方向のハケメ タガ:1段、低い スカラ:1段目、2段目と3段目と4段目 底二角形 底三角形	5号埴輪箱 971201~971222	淡黄褐色 1mm程度の砂粒を少數含む	良好	*
161 磁	(66.0)			外側:回転ナマセ 内側:回転ナマセ	1号壙 D区南壁、1ンシC東部 970609~971127	淡褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	良好 (常滑地)	

第3表 石製品観察表

序番	品種	法尺(cm)			形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・焼成・胎土	備考
		[φ3]	[φ4]	[壁厚]				
212 塩石	30.5	24.0	3.6		1号埴輪箱 970901	淡黃褐色		
29 塩石	5.1	6.3	3.0	使用面は4面 内1面に打痕	土壌埋まり 970725	淡白色		
37-1 甲子石	7.9	6.5	5.8	6面に別々に使用	1~3区 表土中 970919	褐灰褐色		
2 小男	8.3	12.7	4.0		1~4区 表土中 970725	淡灰褐色		
441 塩石	6.5	4.8	4.5	3号埴輪箱 971227	灰白色 きぬががとても細かい			
2 塩石	17.5	8.0	8.5	4面側面を使用 1面あたりの使用はあまり多くない	3号埴輪箱 971227	淡青褐色		
3 塩石	4.5	2.0	2.1	2面しか生していない	3号埴輪箱 971227	白色		
4 四川石	26.5	27.3	15.2	Z面に叩き痕が多く残る	5号埴輪箱 971227	灰色、青灰色		
9 塩石	6.2	3.1	1.3	6号埴輪箱 PN.17.6.5 971225	淡青白色			
489 塩石	4.9	2.1	1.3	4号壙 玄土中 971021	淡黃褐色			
921 石版	3.9	6.2	1.0	片面から刀削を作っている	甚士中 980507			
21 石版	3.7	1.8	0.7	4号壙 971240				
857 四川石	9.5	9.2	6.0		不 用 971226			
110 塩石	24.5	28.5	9.5		1号壙 D区南壁 971226	淡黃褐色		
162 石電	69.7		34.5		1号壙 970609~971127	暗褐色		



第5表 古錢観察表

単位:cm

鉢岡番号	器種	銭径	孔徑	銭厚	出土場所・年月日	
94-1	古 錢	2.5	0.8	0.2	1号埴	971205
2	古 錢	2.2	0.65	0.11	I-4区 棕色上	970724
3	古 錢	2.4	0.6	0.15	I-2区 テント横	970826
4	古 錢	2.25	0.6	0.1	I-4区 棕色土	970724
5	古 錢	2.1	0.7	0.16	6号埴 C-D区 西側	971028
6	古 錢	2.25	0.6	0.15	I-4区 表土中	970724

第6表 金属製品観察表

単位:cm

鉢岡番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頭部長	刃部厚	頭厚	出土場所・年月日	
38-1	鉄斧	7.5	1.8	4.0		1.8		I-4区 テント西側	970827
2	刀子	3.6		1.4		0.4		U-22	970506
3	不明	2.7		1.2		0.6		I-4区 テント北側斜	970703
4	不明	5.1		1.6		0.5		I-1区 表上下	970605
5	不明	3.6				0.7		1号埴物跡	971618
65-5	不明	3.0		2.1		0.3		2号埴 墓頂部	970829
66-3	不明	6.5		1.9		0.4		3号埴 A区 表土中	970722
4	不明	3.5		2.6		0.4		3号埴 D区 周溝内埴土	970827
73-1	刀	12.9		1.9		0.4		4号埴 第2主体部	980519
2	不明	5.5		1.4		0.5		4号培 C区 棕色上	971105
91-1	鉄鎌	9.0						土壤草	971125
2	鉄鎌	5.4						土壤草	971125
3	鉄鎌	5.2		0.9		0.7		土壤草	971125
4	鉄鎌	2.2		1.9		0.15		土壤草	971125
114	銅鏡 直径16.3		(厚さ)1.3					1号埴 第1主体部	
115-1	刀子	7.3				0.3		1号埴	
2	刀子	7.1	5.2	1.2	1.8	0.2	0.2	1号埴	
3	刀子							1号埴	
4	刀子	5.4		1.2				1号埴	
5	刀子	7.0		1.4		0.4		1号埴	
6	劍	25.3	18.6	2.3	6.7	0.6	0.4	1号埴 第1主体部	
7	劍	59.1	44.0	3.0	15.1	0.5	0.5	1号埴 第1主体部	
8	槍	198.0	27.3	3.7		0.6		1号埴 第1主体部	



## 第6章 竹ノ崎遺跡の調査

### 第1節 調査経過と概要

#### 立地

竹ノ崎遺跡は、宍道町佐々布に所在する。遺跡は、佐々布川の東側の丘陵谷部に立地し、宍道湖の南側約1.5km程入った場所にあたる。遺跡の立地する谷は東側に開けた小さなもので、奥行き100m程のものである。また、谷部の奥の尾根上には上野古墳群が近接して存在する。佐々布川流域では、このような丘陵縁の谷部等に集落が営まれていた可能性が考えられる。

#### 調査経過

遺跡は、分布調査によって開口した横穴墓が2基発見されていることから、調査を行うこととなった。しかし、横穴墓の群としての広がりや、谷底部分の状況がつかめていなかったことからトレンチ調査によってその範囲を把握することとした。

トレンチ調査は、平成9年4月9日に場所の設定をおこない、14日から開始した。トレンチは、谷部分、両側斜面を中心にして設定した。また、谷南側の尾根さらに尾根を挟んだ南側の谷も調査を行った。トレンチは、最終的に全部で22か所設定して調査した。トレンチの結果、谷底部分と両斜面の調査が必要であることが判明した。一方、トレンチ調査のみで終了した南側尾根は、上野古墳群と同一の尾根であることから、低墳丘の古墳群の存在が想定されたが、遺構・遺物等の検出はなかった。同じように南側に存在する谷でも斜面での横穴墓の存在が想定されたが遺構・遺物等は検出しなかった。トレンチ調査終了後、調査前の地形測量を4月23日から実施し、調査区の1区の表土については、4月30日から重機によって除去した。

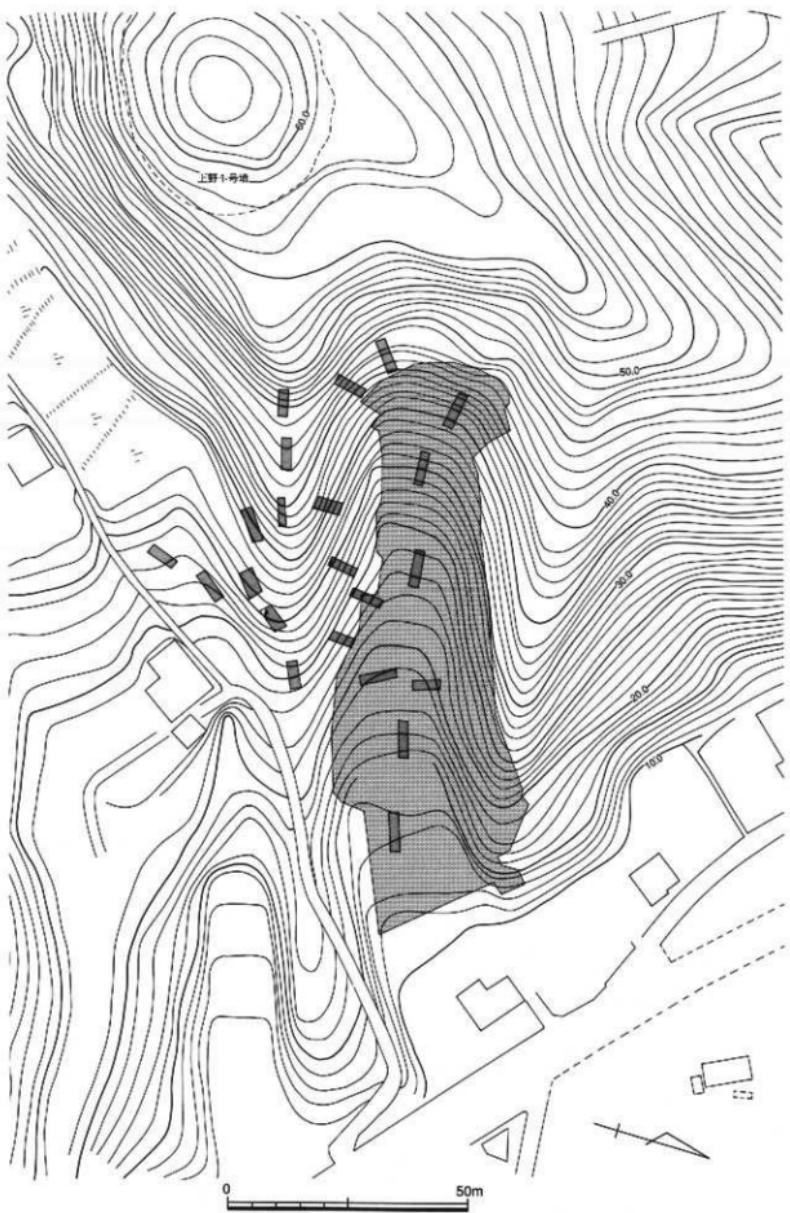
1区の調査は5月7日から開始した。また、併行して3区谷奥部の重機による表土掘削も行った。1区の調査は6月11日には終了し、表土を除去した3区の谷奥部の精査を開始し、7月4日に終了した。7月14日からは横穴墓の存在する4区の斜面を全面精査したが、調査前から確認していた2基以外は存在していない。

7月22日からは、4区の斜面の精査と併行して3区の谷底部分の精査を開始した。そして、7月25日には4区が終了し、8月1日には3区が終了した。ここで2区の調査を行うためにこれまでの排土の人手移動が必要となり、一旦調査を停止し、野沖原Ⅱ遺跡（平成11年度報告）<sup>(4)</sup>のトレンチ調査をおこなった。トレンチ調査終了後、2区の調査は8月26日から開始したが、3区側に盛り上げていた排土が折からの雨によって9月8日に崩れたことから、18日からその処理のため一時中断した。そして、10月1日から2区の調査を再開し、8日に実測を若干残して作業は終了した。

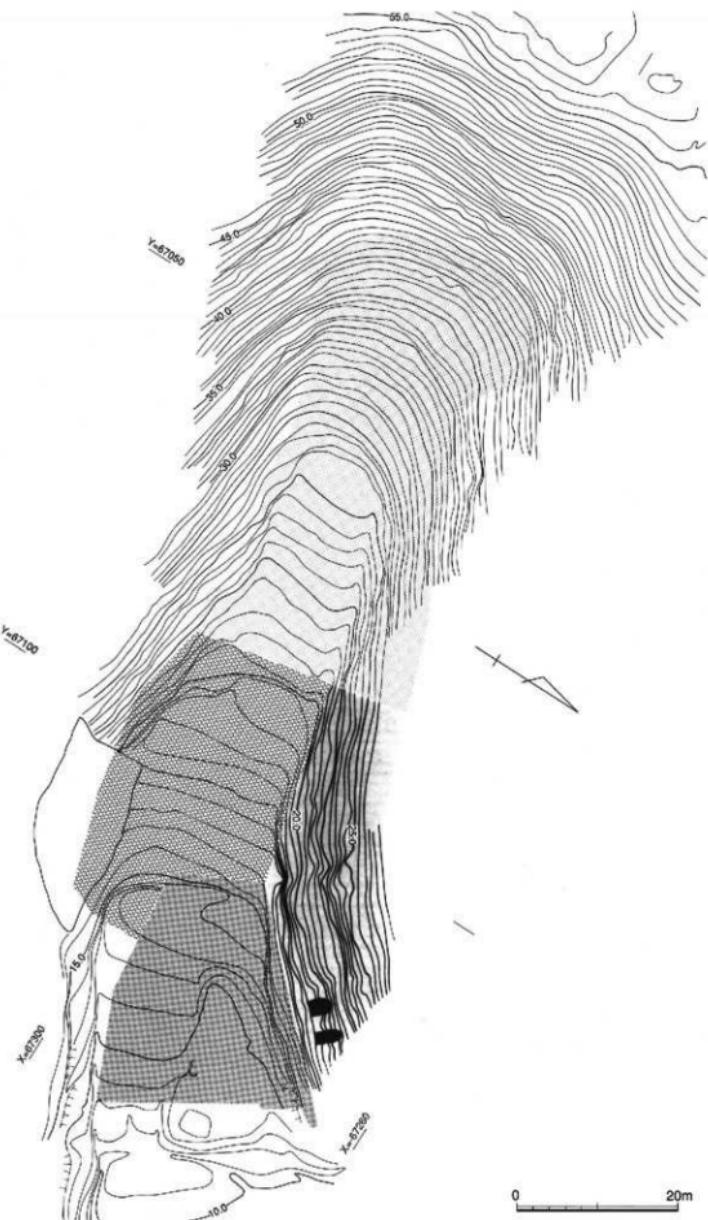
#### 検出遺構

遺跡から検出した遺構は、出土遺物に比べて少ないものであった。本来斜面際に存在していた加工段や建物跡が後世の改変によって失われている可能性が考えられた。ここでは各調査区の検出遺構について概略を述べる。

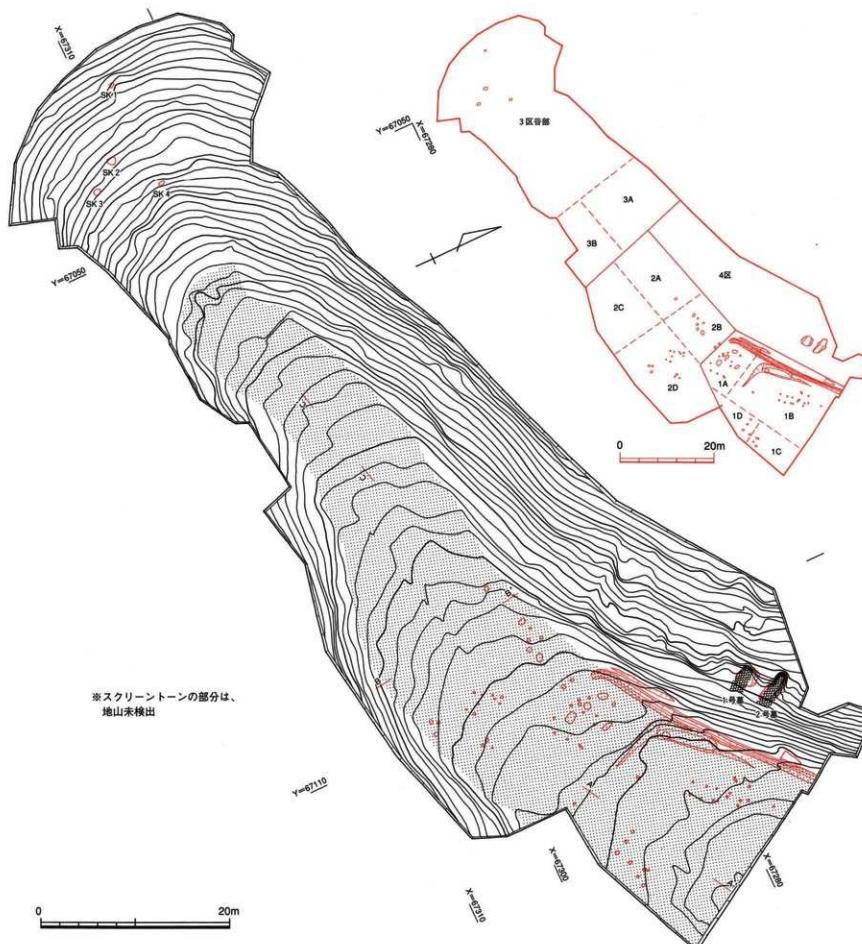
1区では、土坑5基とピット群を検出した。すべて遺物包含層を除去した基盤層より上方の堆積層で確認している。遺構は時期が判明するものは少なく、SK01が古墳時代中期頃と推測されるだけである。また、ピット群は確実に建物跡として考えられるものは少數であった。



第141図 周辺地形測量図(S = 1:1,000)



第142図 調査前測量図(S=1:600)



第143図 調査後測量図(調査区配置図) (S=1:400、1:800)

2区では、土坑1基とピット群が検出された。検出面は、1区と同様に遺物包含層除去後の堆積層であった。時期が分かることは、出土土器から古墳時代中期～後期と考えられる。

3区では、4基の土坑を検出した。いずれの土坑も壁面が焼けた焼土坑であった。検出面は基盤層であったが、時期が分かることはなかった。

4区では、岩盤に穿たれた横穴墓を2基検出した。2つとも時期の判明する遺物の出土はなかつたが、だいたい7世紀代と推測されるものであった。また、2号横穴墓は奥壁に線刻壁画が描かれたものであった。

### 検出遺物

出土遺物のほとんどは1～3区の谷底部分から出土したものである。出土層位はやや褐色系の土層であり、その下層からは遺物は出土しなかった。

遺物の内容は、縄文時代から平安時代頃までの土器がほとんどであり、その他に鉄器と石器が若干認められる程度である。

縄文土器は圓化した1点のみであり、粗製の深鉢片と考えられるものである。

弥生土器は、前期～中期までに属するものはほんの数点に限られ、極めて少数である。一方、後期に属するものは多いが、終末に属するものはほとんど見られない。

土師器は、古墳時代中期・後期を中心として認められる。前期のものも認められるが、いわゆる小谷式の古相を呈すものは少数であり、新相を呈すものから出土量が一定量認められる。古墳時代後期以降では、8・9世紀頃の壺、糸切り底の壺などがある程度出土している。

須恵器は、出雲1期から認められ、型式的に検討した場合に9世紀頃まで連続して一定量出土している。なお、須恵器の器種は集落で一般的に出土するもの以外に高杯形器台が出土しており、これは尾根上に存在する上野古墳群からの転落・流山品である可能性が考えられる。

鉄器は釘、直刀等が出土している。中でも直刀は破片であるが、2振り出土している。これらが本来どういった遺構に伴っていたものは定かにはできないが、一つの可能性として横穴墓に本来伴っていたものが外に掻き山された可能性が十分考えられる。

石器は擦石、石鎌、砥石があり、また石製品として小玉、五輪塔が出土している。

### 調査方法

以上のように遺構・遺物を検出しているが、ここでは調査の方法について述べておきたい。調査は、トレンチ調査後にセンター25cm、1/200の地形測量図を作成し開始した。そして、遺物包含層までは重機で掘削し、その後に人力によって精査した。なお、斜面については遺物包含層が存在しないことから地山まで重機を使用した。出土した遺物については、当初その位置についてポイントとして記録し取り上げたが、その出土量の多いことや異なる時期のものが混在している出土状況から、調査区を大きく2～4小区に分けて一括して取り上げた。遺構を検出時には最低1本の断面の土塙観察を行い記録した。検出した遺構の実測については、遺跡調査システム「SITE」を使用し、機械で図化したものを現地で修正図化した。

出土遺物は、遺構に関わるもので図化可能なものは、図化して本書に掲載した。また、遺物包含層出土のものは、取り上げ地区ごとに分類して地区ごとに何点かを図化し掲載している。しかし、掲載時に分類を変更した器種も存在し、やや細かな時期の数量的な動向を把握する点で問題が生じている。この点が反省材料である。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1. 基本層序 (図145)

1区 土層は、大きく表土・耕作土（1層）、遺物包含層（2～5層、8～13層）、無遺物層（6、7、14、15層）、落ち込み覆土（16～18層）に分けられるものである。遺物包含層は、やや暗色を呈し、特に5層から多量の遺物が出土している。また、この遺物包含層は人為的に形成された層と考えられた。なお、無遺物層の下層を確認するために断ち割りを入れ、厚い砂層が検出され、その下に暗色の古い旧表土層を検出した。

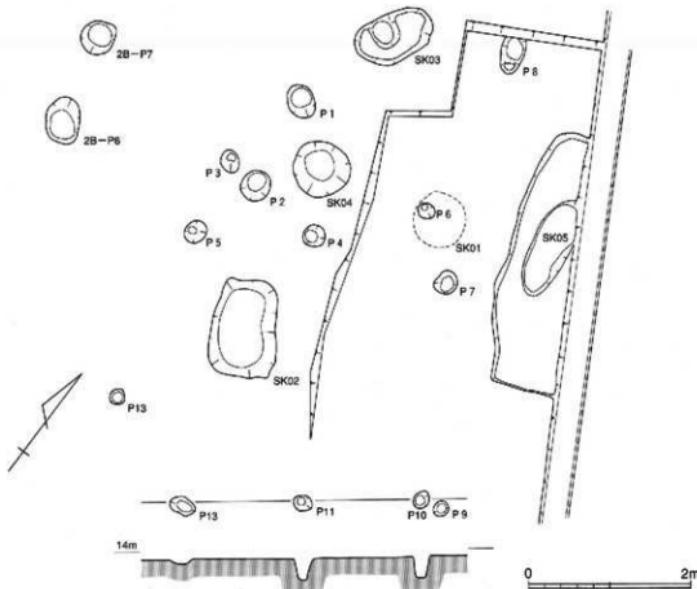
2区 土層は、遺物包含層（1～12層）と無遺物層（13層）そして地山に分けられる。地山は深く谷地形に沿って深く潜り込んでおり、一部しか検出できなかった。遺物包含層は1区と同じように地山疊を含む層であるが、4、6、8層は炭化物を多く含む層であり、遺構面であった可能性も考えられたが、疊が多い層であったこともあり上手く検出できなかった。

3区 土層は、遺物包含層（2層）と無遺物層（3～6層）に分けられるものである。

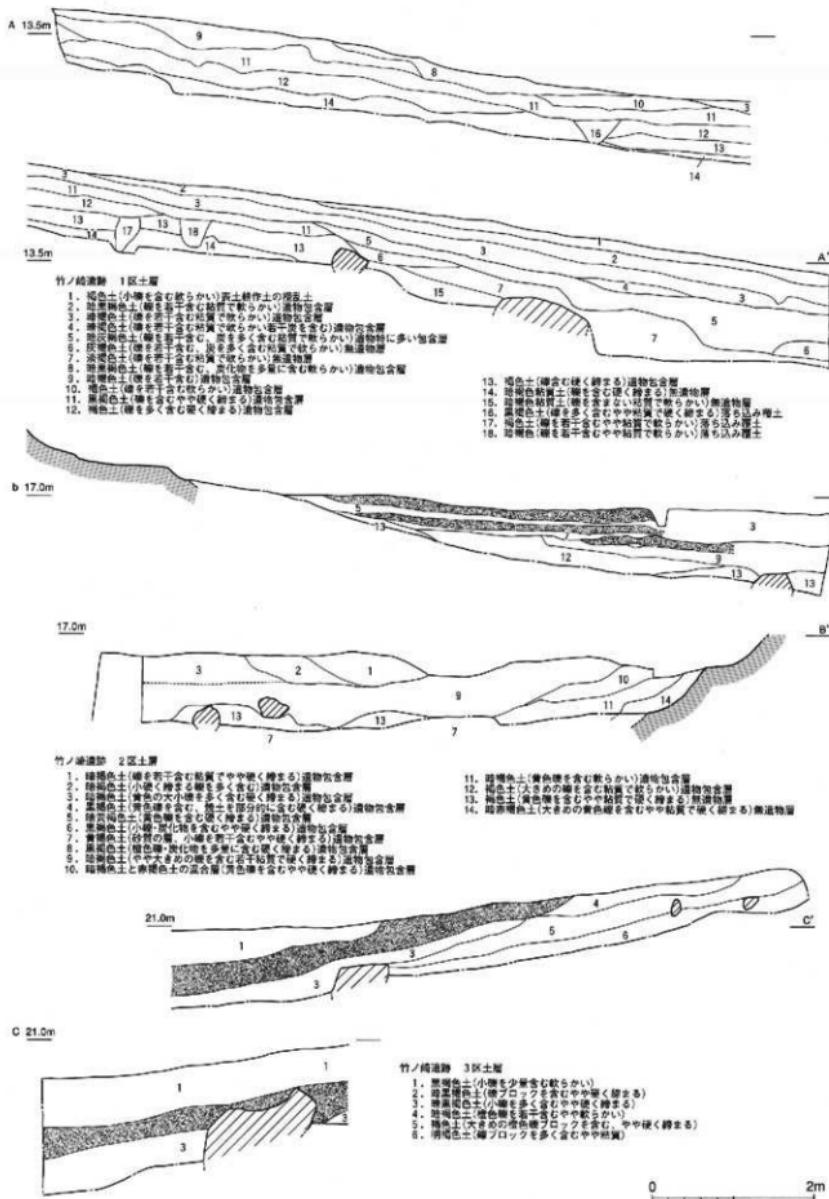
### 2. 1区の検出遺構

1区は4つの小区に分割して調査し、包含層中の遺物については区ごとに一括して取り上げた。ここでは、1A～1D区で検出した遺構について小区ごとに述べる。

1A区土坑(図144) 1A区では、土坑5基といいくつかのピットを検出した。ただし、ピットは規格的に並ぶものはなかった。



第144図 1A区遺構配置図 (S=1:60)



第145図 1~3区土層断面図(S=1:60)

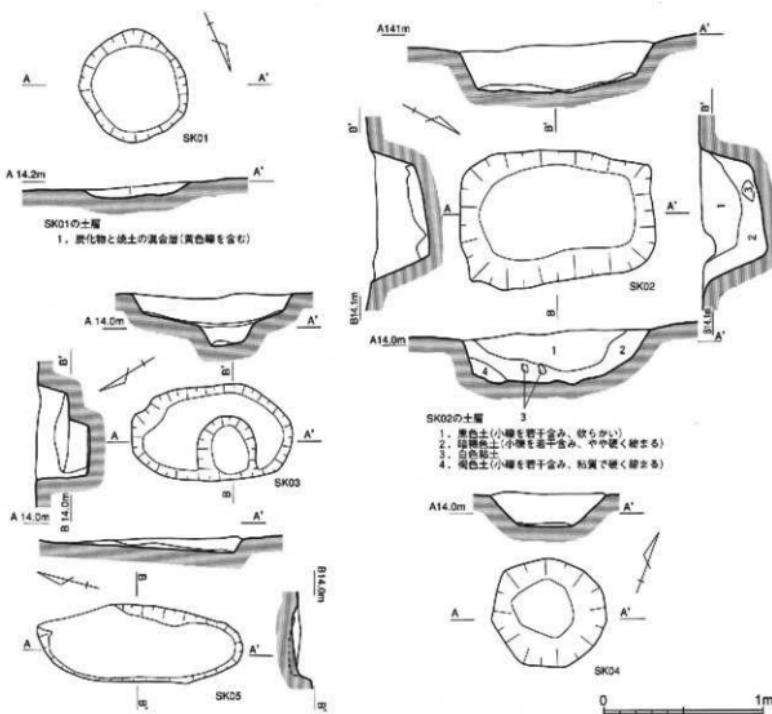
**SK 0 1 (図146)** 遺構は標高14mで検出した円形土坑である。規模は径0.7m、深さ0.1mであり、覆土は炭化物の多い層である。遺物は出土していない。

**SK 0 2 (図146)** 遺構は標高14m、遺物包含層上面で検出した長方形の土坑である。規模は長径1.2m、短径0.8m、深さ0.3mである。覆土には遺物や白色粘土を含んでいた。遺物は須恵器蓋(図147-1)、土師器瓶底片・壺・小形壺・ミニチュア土器(図148-2~4、6)が出土している。時期は出土須恵器より古墳時代後期、出雲4期<sup>(註2)</sup>と推測される。

**SK 0 3 (図146)** 遺構は標高14m、包含層除去後に検出した稍円形の土坑である。規模は長径1m、短径0.6mである。底面は深さ15cmで、平坦であるが西辺側にさらに円形にピット状に径30cm、深さ15cm掘られている。遺物は土師器の小形壺(148図5)が出土している。これは縄年的な位置付けが不明確な器種であるが、古墳時代後期と推測される。

**SK 0 4 (図146)** 遺構は標高14m、包含層除去後に検出した円形土坑である。規模は径0.65m、深さ0.2mである。遺物は出土していない。

**SK 0 5 (図146)** 遺構は標高14m、遺物包含層除去後に検出した稍円形の土坑である。規模は長径1.3m、短径0.45m、深さ0.1mである。遺物は出土していない。



第146図 1 A区土坑実測図(S=1:30)

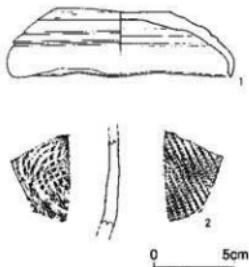
**遺構出土須恵器 (図147)** 須恵器は2点出土している。

1は出雲4期のものであり、SK01から出土している。2は壺片であり、1D区のピット9から出土している。6世紀後半頃の時期が考えられる。

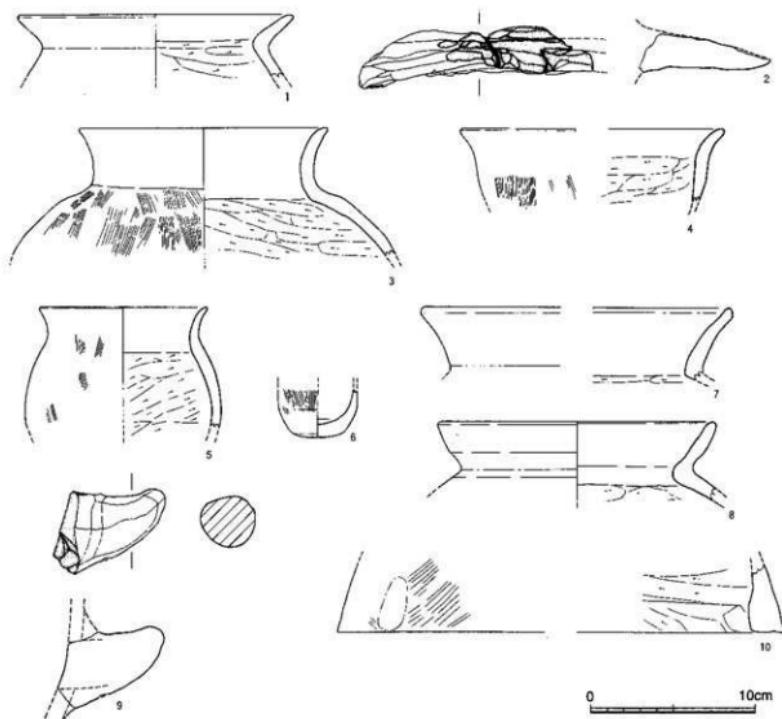
**遺構出土土師器 (図148)** 土師器は、10点出土している。

1は1A区ピット6から出土し、古墳時代後期と考えられる。2はSK02出土の壺の底である。3と4はSK02出土の壺である。5はSK03出土の小形壺である。6はSK02出土のミニチュア上器底部である。7~10はSK05の存在する浅い落ち込みから出土したものである。7と8は壺口縁、9は瓶把手、10は壺底部である。この落ち込みは当初住跡等を想定したが、その可能性は低いものと考えている。

**1C区ピット群(図149)** 1C区は調査区の南東側であるが、ここでは遺物包含層除去後に径40cm前後のピットを10基検出している。このうちP1とP2以外のP3~P9は、まとまった場所で検



第147図 1区遺構内出土須恵器  
(S=1:3)

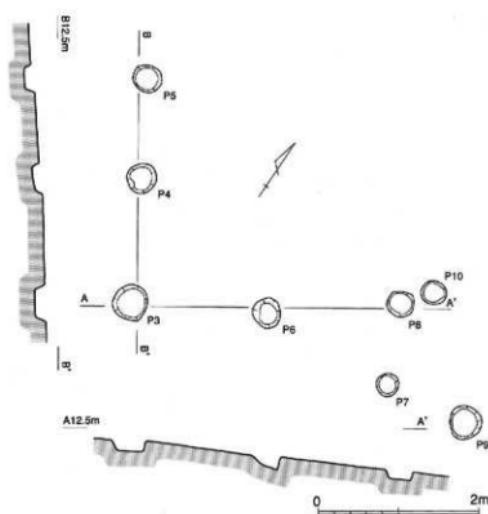


第148図 1区遺構内出土土師器実測図(S=1:3)

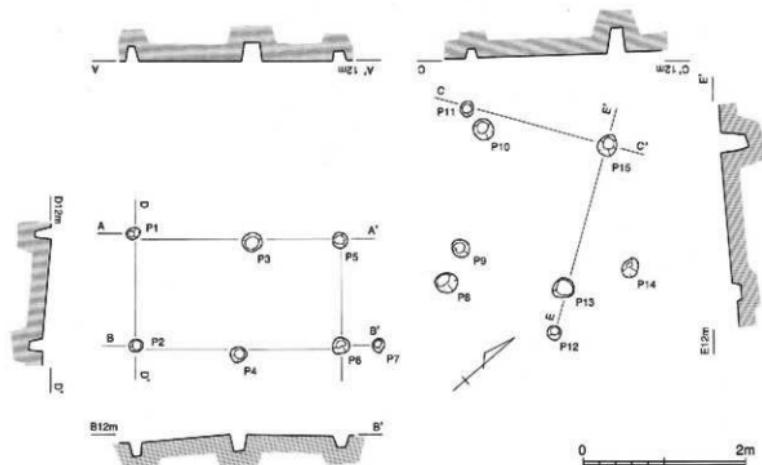
出した。これらのビット群は標高12.5m付近で検出している。ビット群の並びを検討した結果、建物跡として確実に認識できるものは存在しない。ただし、P3～P6、P8の5基で構成される2間×2間の掘立柱建物跡を想定することも可能である。建物跡とすれば、規模は2.9m×3.1m程度で長軸は北東方向である。また、ビットの深さは15cm程と浅く、柱間距離も長軸、短軸で異なる。

1D区ビット群(図150) 北東側の調査区である1D区でも、15基のまとまったビット群を検出した。ビットは径25cm前後の小さいものであった。このビッ

ト群の並びを見ると、北側と南側に掘立柱建物跡を復元することが可能であるが、北側のものについては疑問がもたれる。南側の建物跡は1間×2間で、規模は1.3m×2.05m程、長軸は北東方向と考えられる。また、柱間は桁1.25m、梁1.3mであるが、P13がやや位置が北西に偏る点が問題として残る。



第149図 1C区ピット群実測図(S=1:60)



第150図 1D区ピット群実測図(S=1:60)

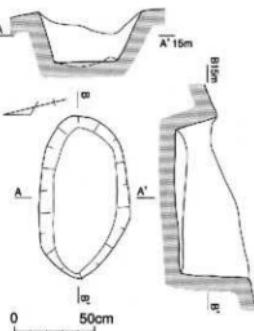
### 3. 2区の検出構

2区では、1区と同じように4つの小区に分割して調査した。遺物包含層中の遺物は、小区ごとに一括して取り上げた。遺構は、土坑1基とピット24基(2A区-1基、2B区-9基、2C区-14基)を検出した。

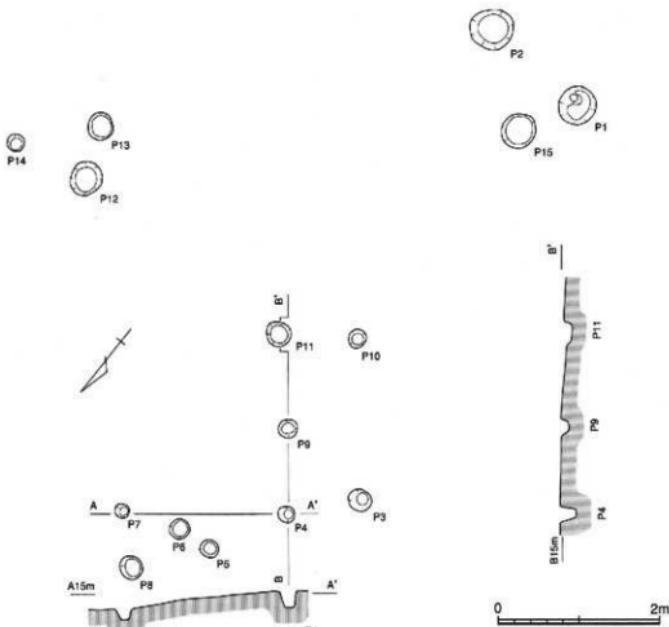
**SK01(図151)** 遺構は、2B区の標高15m、遺物包含層除去後に検出した楕円形の土坑である。規模は長径1.0m、短径0.95m、深さ0.3mである。遺物は出土していない。

**2C区ピット群(図152)** 各調査小区のピット群は様々な大きさのものが存在し、また、建物跡を想定できる規則的な配置のものは、存在していないものと考えられた。ただし、2C区ではP4、P7、P9、P11のピット4基で掘立柱建物跡として復元することが可能なものが一応存在している。

このピット群が建物跡とすれば、1間×2間で規模は2m×2.3m、長軸が北西方向と考えられる。構成するピットは径0.3cm前後であり、深さ10cm程である。



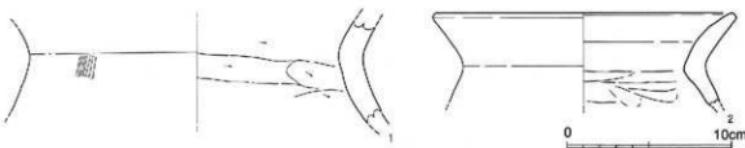
第151図 2区SK01実測図  
(1/30)



第152図 2区ピット群実測図(S=1:60)

2区ピット群出土遺物(図153) いくつかのピットからは、土師器が出土している。ほとんどのものが小片であり、図化できるものは掲載した2点だけであった。

1は甕の頭部であり、2は外反する臺の口縁である。これらの明確な時期は特定できないが、両者とも古墳時代後期頃と思われる。



第153図 2区遺構内出土土師器実測図( $S = 1 : 3$ )

#### 4. 3区の検出遺構

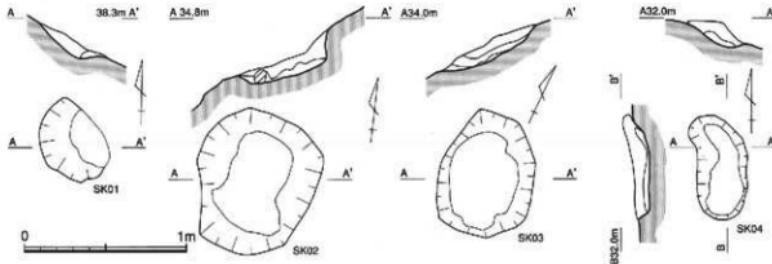
3区では、谷奥部の斜面で土坑を4基検出している。土坑はいずれも地山で検出し、壁面の焼けた焼土土坑である。また、遺物が出土する土坑は存在しなかった。

**SK01(図154)** 遺構は標高38.5mで検出し、土坑群の中では最も西側に存在している。形状は不整形な楕円であり、規模は長径0.55m、短径0.4m、深さ0.2mである。また、床面は傾斜しているものである。壁面はあまり焼けていないもので、覆土は炭化物を多く含む層であった。

**SK02(図154)** 遺構は標高34.5mで検出した不整形な土坑である。規模は長径0.9m、短径0.75m、深さ0.2mである。床面は若干傾斜しているもので、壁面は良く焼けている方である。覆土は炭化物の層が詰まっていた。

**SK03(図154)** 遺構はSK02の南東に位置し、標高34mで検出した。規模は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.15mである。床面は若干傾斜しているもので、壁面は比較的良く焼けているものである。覆土は下層に炭化物層があり、その上層に淡黄褐色の砂質土の層が堆積していた。

**SK04(図154)** 遺構は標高32mと他のものより斜面下方で検出した。規模は長径0.65m、短径0.3m、深さ0.15mである。床面は水平なものであり、壁面は若干焼けているものである。覆土は炭化物の層が堆積していた。



第154図 3区土坑実測図( $S = 1 : 30$ )

## 5. 4区横穴墓群

4区では、丘陵先端側の標高18.5m付近の岩盤（凝灰岩）の南斜面において横穴墓を2基検出している。両横穴墓ともにすでに開口しており、玄室まで確認できる状態であった。横穴墓は、谷奥側を1号横穴墓、先端側を2号横穴墓と呼称している。以下各横穴墓について記述したいが、横穴墓の各部位の名称については島田池横穴墓の報告書の呼称を使用することとする。

### 「1号横穴墓」

横穴墓は開口方向をS-23°-E方向にとり、玄門の前庭側が崩落している横穴墓である。

**前庭部（墓道）（図155）** 形態は長方形で幅があまり変わらないものである。床面規模は幅1.5m、奥行き2.2mであり、深さは1.4mである。また、外側に向かって若干低く傾斜している。

### 玄門（図155）

規模は奥行き0.6m、幅0.7mで高さは1mで、墓道床面より一段高くなる。立面形はやや天井部が弧を描く形状と考えられるが、崩落等で不明確である。また、閉塞用の削り込み等の造作についても明確にし難い。ただ、墓道との境で若干溝状に窪む部分が存在する。

### 閉塞（図155）

玄門の閉塞は、高さ25cm程積まれた状況で残存していた石材片から穿たれている岩盤と同一の石材を使用しているものと推測される。積まれていた石材は拳大～人頭大程の大きさのもので、大型の石材は存在しなかった。

### 玄室（図155）

天井部が一部崩落しており、完全な形では遺存していなかった。平面形は奥壁に向かって幅が狭まる不整形な形態である。奥壁と各側壁は完全に仕上げられた状態ではなく、前壁のみが仕上げられている状態であった。規模は奥行き1.8m、幅は前壁で2.2m、奥壁付近で1.4m、高さは1.2mと低い。天井部の形態は未整形の横穴墓であるが、丸天井系と考えて良いだろう。

### 堆積状況（図155）

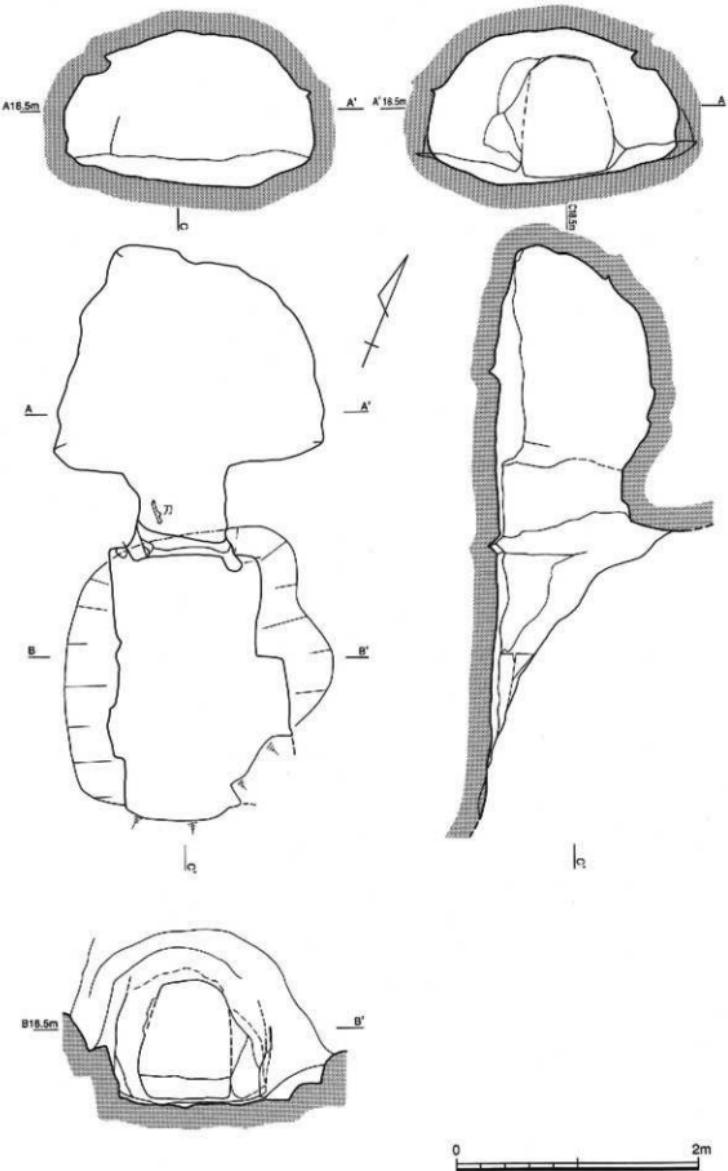
土砂の堆積は玄門付近で認められた。基本的に開口後に流入した土砂と天井部の崩落による岩石と考えられる。

### 遺物出土状況（図156）

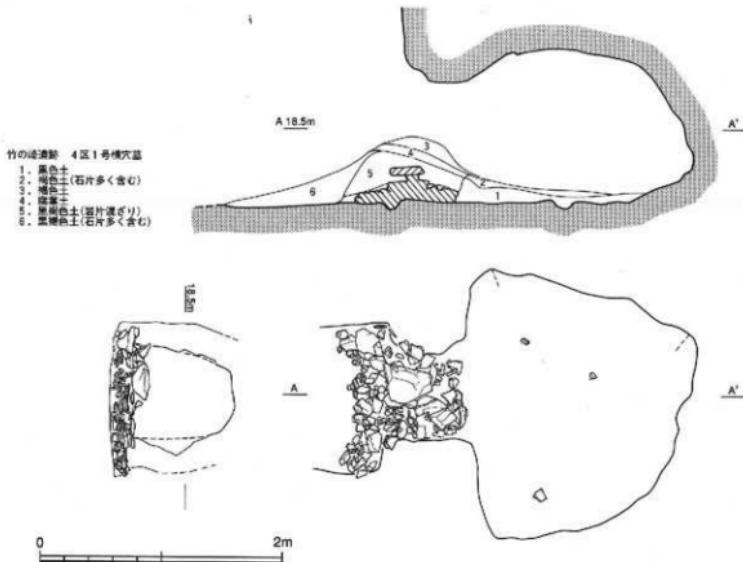
遺物は、鉄器直刀片（図157）と須恵器壺底部（161図1）、壺片が出土している。大刀は玄門の流入土除去後に玄門左側床面直上で出土し、茎を墓道側に向けた状態であった。須恵器は玄室床面から散らばった状態で出土している。これらの出土遺物は、本来置かれていた位置とは異なる場所で出土したものと推測される。また、遺物は横穴墓の埋葬に伴った副葬品であるかどうかについては明確にし難いが、大刀については伴うものとして考えている。

### 直刀（図157）

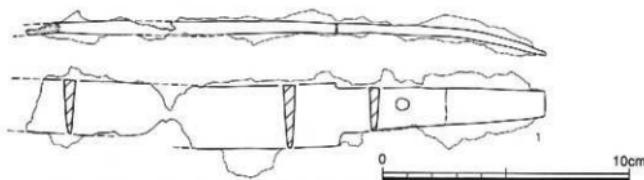
直刀は切先の部分が失われ、茎部が若干曲がっている。計測値は残存長21.3cmで、刀身部幅2.1cm、刀身部残存長12.9cmで茎部長8.4cmである。茎部の形態は両側であり目釘穴が1孔設けられている。



第155図 4区1号横穴墓実測図( $S=1:40$ )



第156図 4区1号横穴墓遺物出土状況実測図(S=1:40)



第157図 4区1号横穴墓出土直刀実測図(S=1:2)

## 「2号横穴墓」

横穴墓は開口方向をS-27°-Eにとり、玄門部から玄室にかけて天井部が大きく崩落している横穴墓である。

**前庭部(墓道)(図158)** 形態は長方形で、1号横穴墓同様な構造である。規模は幅0.95m程で、奥行き2mであり、深さは0.7mである。また、前端部に向かって若干低く傾斜している。

**玄門(図158)** 前庭部より一段5cm高くなっている、閉塞用の切り込み等は設けていない。規模は幅0.7m、奥行き0.55mであるが、左壁は、0.4mと若干短い構造である。高さは天井部崩落のため不明であるが、現状の残存高は1m程度である。また、床面には主軸に沿って幅20cm程の玄室につながる溝が存在している。

**閉塞** 閉塞の状況は、すでに存在していなかったために不明である。

**玄室(図158)** 天井部はほとんど遺存していなかったが、各側壁の残存状況から天井形態につい

ては、推測が可能であった。平面形はほぼ正方形であり、1号横穴墓とは異なり仕上げられた形態である。規模は奥行き1.75m、幅は前壁で1.75m、奥壁で1.6mであり、やや奥壁側が狭くなっている。

床面は、崩壊のため残存している部分は前壁側のコーナー付近だけであった。ただし、主軸沿いに幅18cm程度加工工具痕が認められる。工具痕は玄室内で奥行き1m程度までにあり、奥側付近で左右に各15cmほど分岐している。この工具痕の存在から玄室内床面に玄門につながる溝が穿たれていた可能性が考えられる。また、この溝によって玄室内床面は、「コ」字形に仕切られていた可能性も指摘されるが、確定することは現状では難しい。

玄室の天井形態は、奥壁に残存する軒線によって家形であったものと考えられる。この軒線は、床面から高さ0.9m程度の位置に段状に加工し表現されている。また、軒線は左壁の奥側コーナー付近にも残存しているが、前壁と右壁については剥落のため確認できない。

**堆積状況（図158）** 土砂の堆積は、玄門周辺で認められた。

**遺物出土状況（図158）** 遺物は、玄門周辺の堆積層中から須恵器壙（161図2）が出土しているが、この横穴墓の埋葬に伴う遺物とは考えられない。基本的にこの横穴墓の埋葬に関わる副葬品等はすでに失われていたものと考えられる。

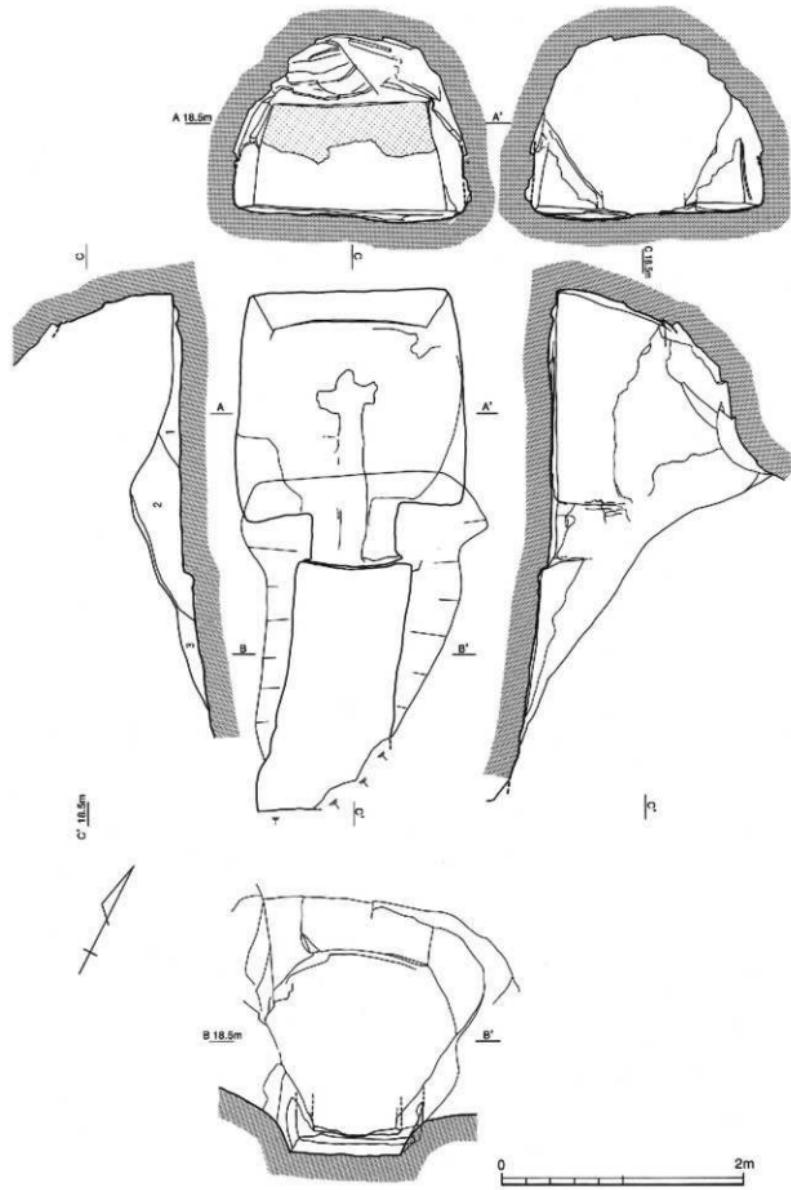
**線刻壁画（図159・160）** 玄室奥壁の剥落をのがれた遺存部分には、線刻による壁画が確認されている。この壁画は、各壁の残存部の様相から側壁や前壁には無く、奥壁のみに描かれていたものと推測される。なお、壁画の描かれた時期については、この横穴墓がすでに開口しており、埋葬時の遺物が存在していない状況から、造墓時よりも新しい時期に描かれた可能性も存在している。結局、時期を明確にするのは不可能であり、良好な類例との比較によって今後慎重に検討する必要があると思われる。

奥壁に描かれた壁画は、軒の線から下に描かれており、縦20cm以上、横1m程度の範囲で確認される。また、壁画を描いたその工具はその特定は難しいが、線刻の幅が2mm前後で、深さも2mm程度と浅く刻み込まれたものであることから、先端の尖る釘状の工具が想定される。また、下半部分は崩落によって失われている部分が存在する。

線刻壁画は大きく5つものものが描かれている。それは左壁側から見て、草花-仏像？-一人面-一人面-一人面の順で描かれている。ここでは、記述に当たり左側壁から「A」～「E」として説明したい。

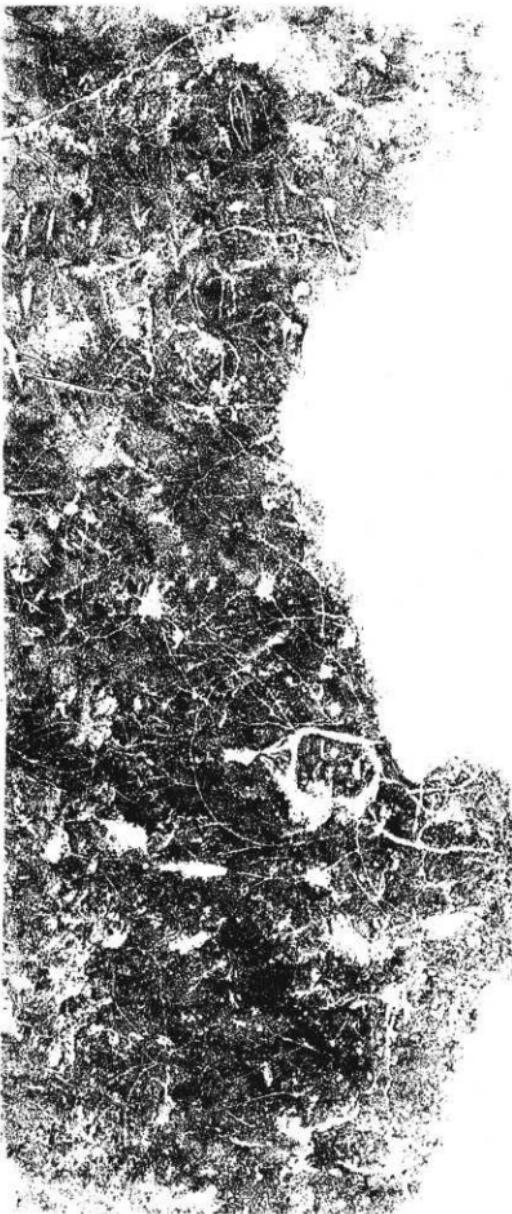
「A」 上方に曲線によって三葉、または四葉と思われるものが描かれている。その下方には直線を組み合わせて描かれた壁画が存在しているが、不明瞭であり良く分からぬものである。

「B」 下方に人面が描かれており、その人面の輪郭は他の線刻壁画とは異なり、幅広に刻まれ、深いものである。おそらく刻む工具も異なっているものと推測される。また、このことから他の線刻壁画とは描かれた時期も異なる可能性も考えられる。人面は、目、鼻、口が描かれており、頭部は三角を描くように刻まれたものが認められる。これが何を表現しているのかは不明である。この人面を囲むように円形の線刻が存在し、さらにその外側には光背状の線刻が認められる。また、この2重に圓線状の巡らされた線刻と切り合うようにいくつかの線刻が見られるが良く分からぬものである。上方には二重の蕾状の線刻が存在するが、光背状の線刻とセットになるものかは、判らないものである。



第158図 4区2号横穴墓実測図( $S=1:40$ )

第159圖 4區2號橫穴墓壁線刻畫拓影( $S=1:4$ )



0 20cm

第160図 4区2号横穴墓奥壁縦割面実測図 ( $S=1:4$ )



「C」 主軸上方に人面と推測されるものが描かれている。これは後述する右側に描かれた人面とはやや異なるものであり、横長の輪郭を持つものである。人面は、両目と口又は鼻と考えられるものが描かれている。さらに、その上方にも線刻で刻まれたものがあるが、明確ではない。また、下方にも線刻で描かれているが、これも明確に判らないものである。

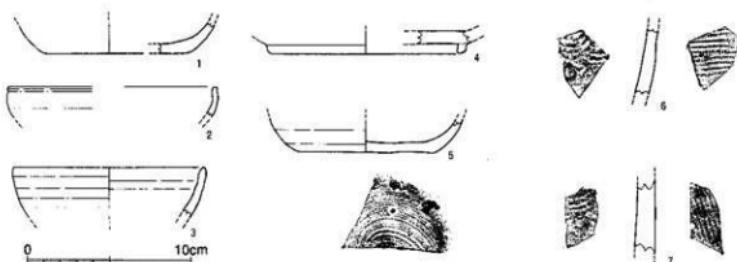
「D」 人面が描かれているが、壁面の剥離によって下半部が失われている。人面は、眉、目、鼻が表現されており、額から上には直線を交差させて描かれたものが見られる。これは、冠や帽子を表現している可能性が存在するが確認はない。また、人面の周囲には外側に向かって長い線刻がいくつか認められ、これは髪の毛を表現している可能性が考えられる。

「E」 人面が描かれており、「D」の人面と良く似ているものである。この人面は、目、鼻、口が表現されている。また、目の表現が「D」の人面と異なり線刻の数が多いが、これは眉を表現したものが、目を表現したものと接近しているだけなのかもしれない。額から上はやはり「D」と同じように、直線によって交差させて描いたものが認められる。これは線が多数で解読が難しいものであるが、三角形の中を「×」と垂直二等分線で区切ったものが左右2か所に描かれているものと考えられる。これらは頭髪ではなく、冠や帽子等を表現している可能性が高いものと思われる。

以上述べてきた線刻壁画は、描かれた時期が不明なものであるが、モチーフや表現から比較的古い年代のものである可能性も考えられる。また、他地域の横穴墓の線刻壁画には、中世に進入して描かれたものも存在しており、そのようなことを踏まえながら今後の検討が必要と考える。

4区出土須恵器(図161) 4区では横穴墓の存在する南側斜面を全面調査したのだが、出土した遺物は非常に少ないものであった。出土遺物は須恵器のみであり、基本的に8世紀以降の時期が考えられるものである。

1は1号横穴墓玄室内出土の壺底部である。底部はおそらく糸切りと考えられるが、この破片からはよく判らない。2は2号横穴墓の流入土中から出土した須恵器壺である。これは口縁が屈曲するものであり、高広IV A期に相当する時期と推測される。<sup>(参)</sup> 3~7は斜面精査中に出土した遺物である。3は口縁が内湾気味に立ち上がる壺である。時期は高広IV A期頃に相当するものと考えられる。4は高台の付く壺または皿と推測される。5は底部を回転糸切りによって切り離した壺である。時期は8世紀以降と思われる。6と7は甕の腹部片である。



第161図 4区出土須恵器実測図(S=1:3)

## 第3節 遺物包含層中の出土遺物

### 1. 概 要

1～3区の谷底部分では、遺物を含む包含層が存在し、大量の土器を中心に鉄器・石器が出土している。土器は縄文土器、弥生時代中期の土器が少量含まれているが、量的に多いのは弥生時代後期～8世紀代のものである。これらの出土遺物から遺跡の立地する谷底部分には、本来は建物跡等が存在し集落が営まれていたものと推測される。

### 2. 出土土器の整理作業

遺物は、出土地区ごとに接合作業を行った。接合作業では小片が多かったことから、あまり全体の判る復元ができるものはなかった。接合後に各地区ごとに分類し、器種・型式ごとに点数を数えた。点数は、特に端部（口縁、脚部）等の部位が判るものと基本にカウントした。

なお、最も破片が多い土師器臺の胴部について、破片の大小、調整の確認が可能なものと不可能なものとに分けたが、破片数は数えなかった。

以上の作業によって土器を分類カウントした結果は、表1、2である。分類はできるだけ現時点での土器編年等の研究成果を基本的に行うよう努力はしたが、全体の形が分からぬ状況と担当者の能力のため生かせなかった部分が多く問題が残る結果であった。

また、分類で困難を伴った器種は土師器の臺である。特に複合口縁が退化した器種と単純口縁の器種については、今後の再検討が必要と考えられる。

単純口縁については、口縁が内湾するものと外反するものとに大きく分け、その後細分した。この細分の段階でもう少し検討が必要であったと考えられる。また、胴部の張り（最大径の位置）をある程度重要な属性と考えなければならなかつたが、分類の段階では小片が多いことから検討していない。ただし、報告書作成時にある程度反映するような形で掲載している。

掲載時に当初の分類を変更した点については、表3・4で対応が判るように努力しているが、一部、当初の分類と大きく変更した器種については矛盾が生じている点があり、問題が残っている。

また、図化については調査区ごとに分類した器種を最低1点以上実測した。最終的に土師器・須恵器は各500点程図化し、ほぼ全て掲載している。

なお、今回、分類で参照にした文献は以下のとおりであり、各器種の編年位置付けについても参考にしている。また、岩橋孝典・松山智弘氏（埋蔵文化財センター）に教示を得た。

#### （弥生土器・土師器）

『南嶺武草田遺跡』鹿島町教育委員会1992年

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』1992年 木耳社

松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌 第8集』1991年

広江耕史「山陰の煮炊具—山雲・石見—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮炊具—』1996年

#### （須恵器）

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994年

『高広連跡発掘調査報告書』鳥取県教育委員会1984年

『出雲国府発掘調査概報』松江市教育委員会1970年

柳浦後一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」「松江考古第3号」1980年

美川哲朗「近畿地方西部・山陰・山陽」「古代の土器研究—律令的土器様式の西・東5 7 石の土器—」1997年









### 3. 縄文土器 (図162)

縄文土器は、1点のみ出土している。1は深鉢と考えられる破片である。弥生土器や土師器で見られる胎土とは異なり、雲母が多く含まれている点から縄文土器と判断した。縄文時代に属すると考えられる遺物はこれと石器が数点見られるだけである。

### 4. 弥生土器 (前期～中期) (図162)

弥生土器は比較的多く出土しているが、基本的に後期に属するものである。2は中期に属する鉢であり、時期はⅢ様式になるものと考えられる。口縁上端部にヘラ描きの鋸歯文が施されている。なお、前期～中期に属する土器はこれ以外に壺・壺の底部が数点出土しているのみである。

### 5. 弥生土器 (後期) (図163～168)

弥生時代後期に属する土器から比較的多く割合を占め始める。出土する器種は壺、壺、瓶形土器、注口土器、鼓形器台などが存在する。

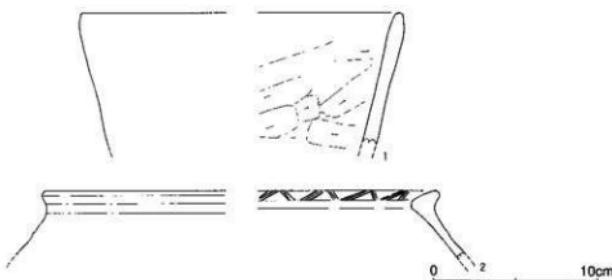
**壺・壺 (図163～165)** 壺・壺類は、複合口縁のものがほとんどを占めている。分類は壺・壺を一括して口縁の拡張度と平行沈線文の様相から分類した。

163図1～7は、口縁部が内傾指向のもので、凹線が3条程度のものである。基本的に胴部内面はヘラ削りが施されているが、1は頸部にヘラミガキであることから、一つ古い段階に考えた方が良いのかもしれない。また、1と7の頸部には円孔が穿たれている。これまでの編年と比較すれば草田1期とされているものに対応するものと思われる。

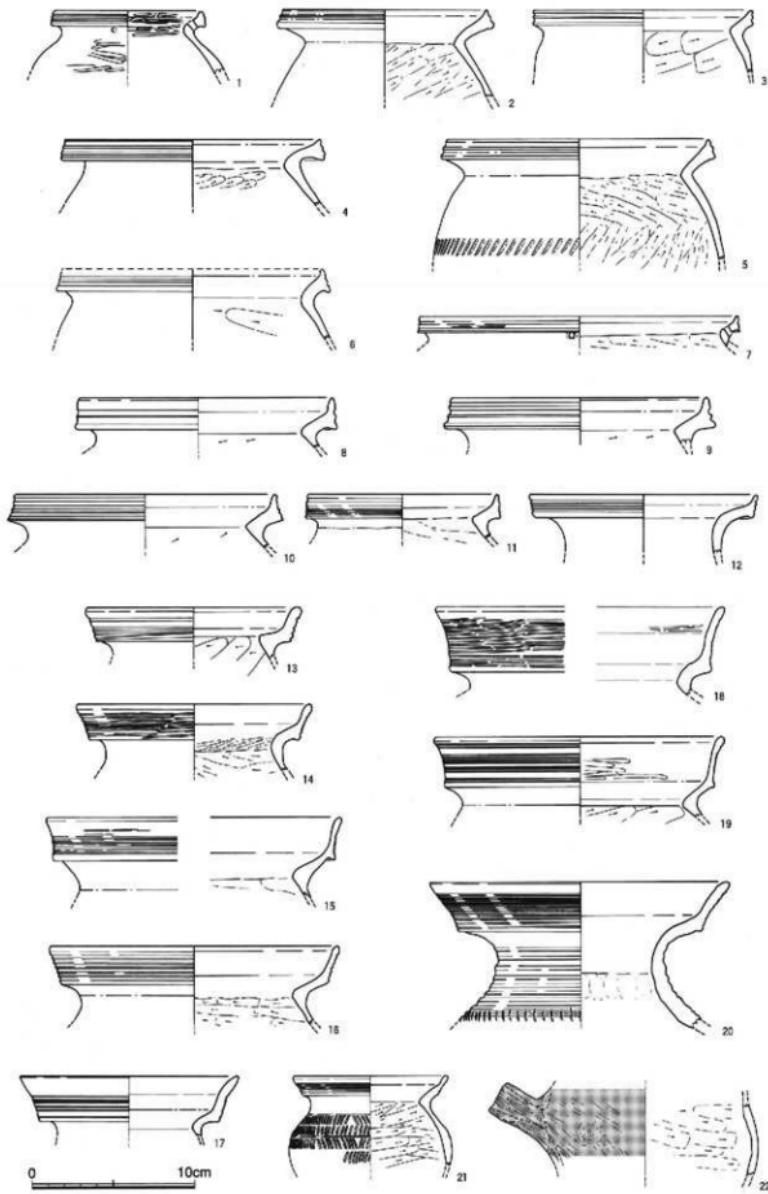
163図8～12は、口縁部がより拡張して直立気味となり、凹線が4本以上と多めになったものである。12は壺、それ以外は壺であり、内面頸部以下はヘラ削りである。これも草田1期に対応するものと思われる。

163図13～21、図1641は、口縁部がさらに拡張外傾し、凹線文が施された13以外は基本的に擬凹線文が施されたものである。また、擬凹線文の個体は10条位のもの(14～16)と以上のもの(18・19)に細分することも可能である。これらは、草田2～3期に対応するものと考えてよいものと思われる。また、やや異質な個体について以下補足説明をしたい。

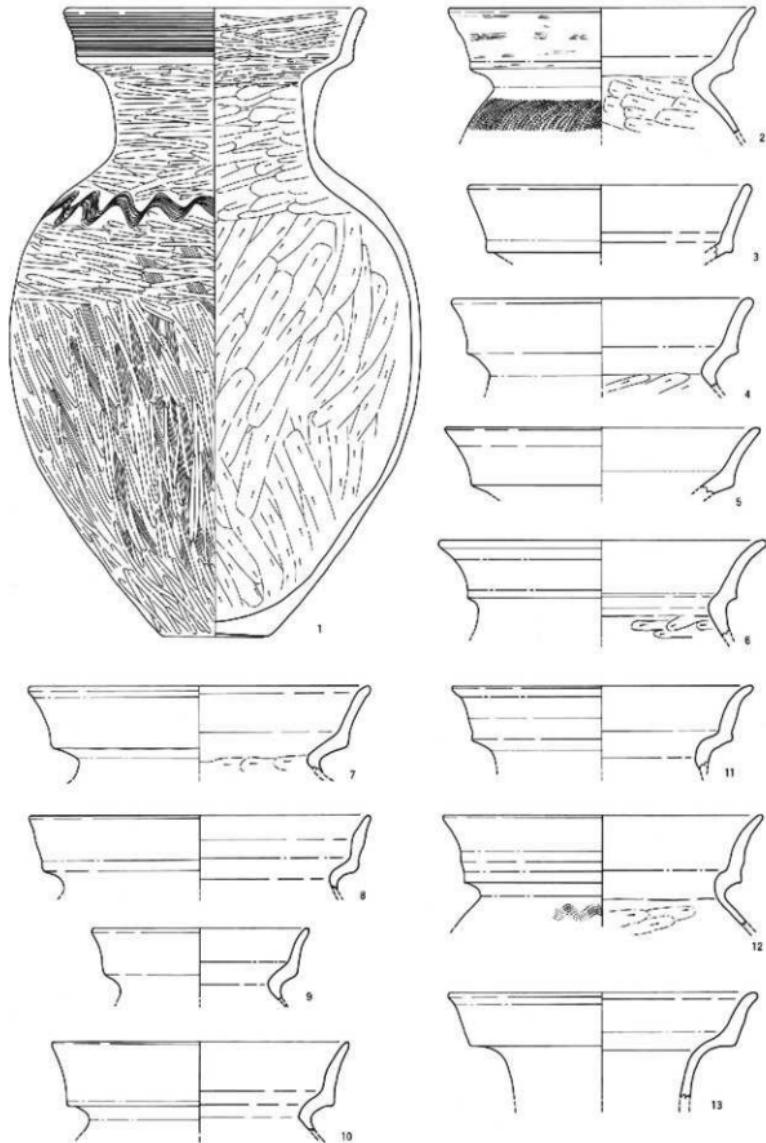
17の壺は、口縁下部のみに擬凹線文が施され、上半は外折する個体でやや他と異なるものである。



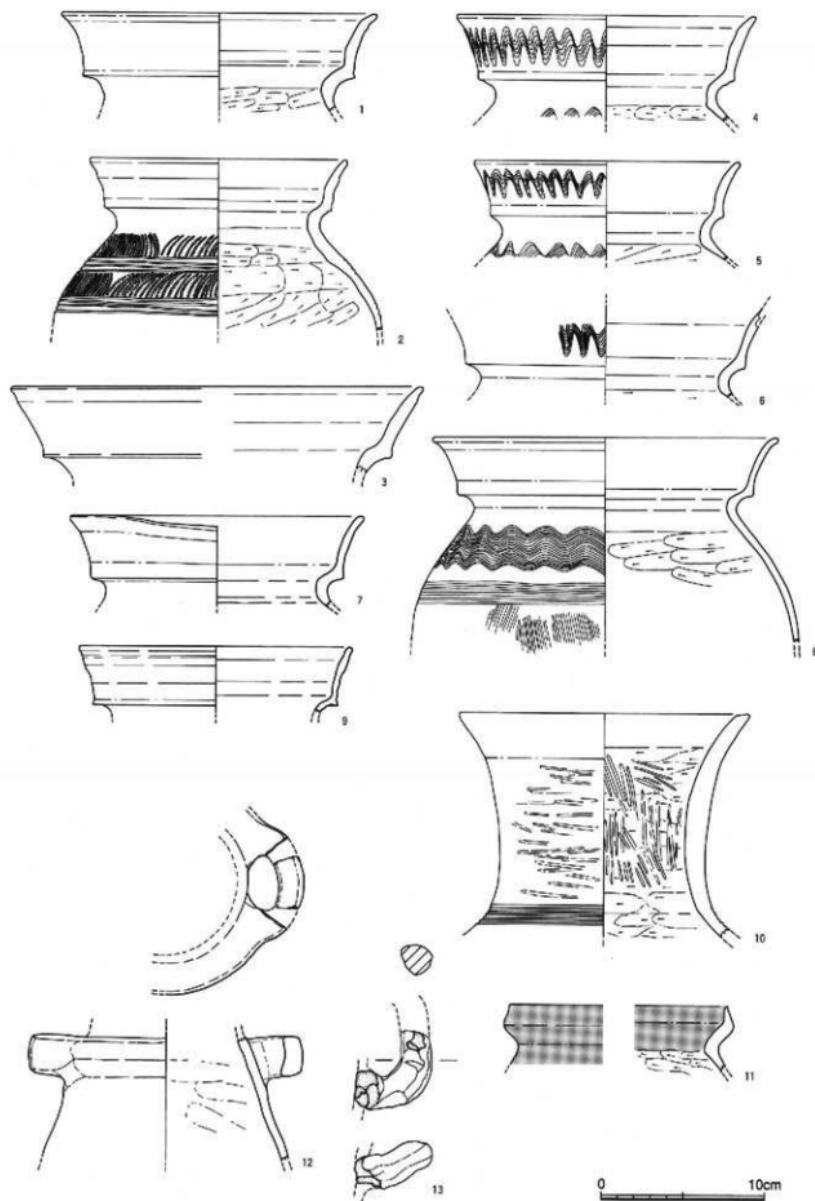
第162図 出土縄文土器・弥生土器実測図(S=1:3)



第163図 出土弥生土器実測図①(窓・壺) (S=1:3)



第164図 出土弥生土器実測図②(甌・壺) ( $S = 1 : 3$ )



第165図 出土弥生土器実測図③(甌・壺・瓶形土器) (S = 1 : 3)

163図20の壺は、口縁や胎土は在地的な様相であるが、頭部の凹線文や刺突文はあまり見られない構成である。これに似た頭部の文様構成をとるものは、吉備地方のV-3様式<sup>(註7)</sup>で見られ、その地域との関連が考えられる。

21は小形の壺であり、だいたいこのグループの時期のものと推測される。複合口縁で小形のものはこれ1点のみである。

22は複合口縁の注口土器になるものと考えられる。外面には赤色顔料が塗布されている。

164図1の壺は、あまり出土例の無い形態である。肩部に櫛描波状文<sup>(註8)</sup>が施されており、平底である。これと良く似たものは、松江市の平所遺跡から出土している。

164図2~13は口縁部に擬凹線文が施されないもので、やや厚みがある個体である。2は擬凹線文がナデ消されているものであるが、完全に消えていないもので、過渡的なものとして考えられる。これらは厚さからやや厚めの個体（2~6）と若干シャープなもの（7~12）に細分も可能である。また、13は筒状の頭部の壺である。このグループは草田4期に相当するものと思われる。

165図1~8も口縁部に擬凹線文が施されないもので、より口縁がシャープになったものである。これらのグループには、口縁や肩部に文様が施されるものが多い。また、口縁の厚さでシャープなもの（1~6）とかなりシャープなもの（7~9）に2分することもできる。なお、草田5期に相当する個体と考えられる。

**直口壺（165図10）** 1点のみ出土している。口縁上端部に面をもち頭部に凹線文が施されている。時期は、草田3期頃と思われる。

**その他の壺（165図11）** 平行沈線文のない壺である。外面と内面頭部上半に赤色顔料が塗布されている個体である。草田1期頃の時期が推測される。

**瓶形土器（165図12）** 1点出土しており、径が小さい方の端部付近の破片である。一般的なものは上方に突帯がその下に把手が付くものであるが、これは突帯と把手が一緒になっている珍しい形態を持つものである。

**把手（165図13）** 注口上器などに付く把手と推定されるものである。

**壺・壺文様（166図）** 基本的に壺・壺類の肩部等に施された文様である。

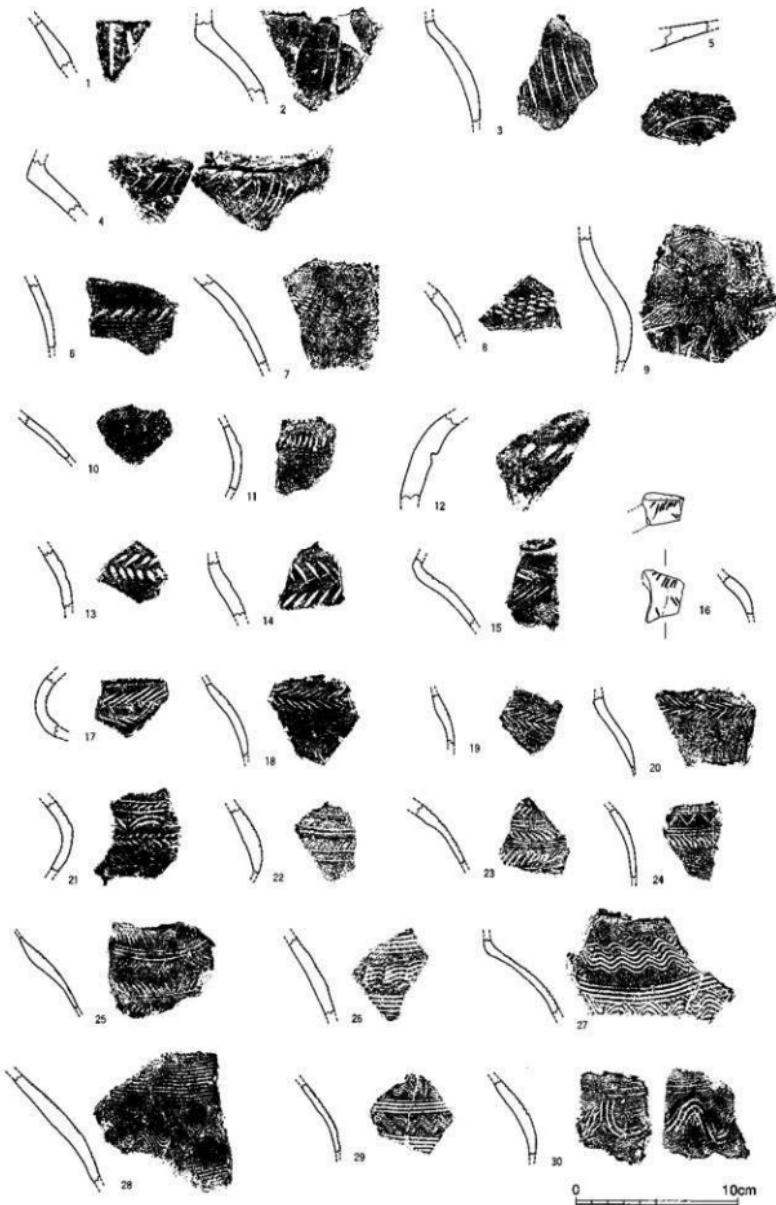
1~5はヘラ状工具によって描かれた文様である。5以外は頭部付近に施されている。5はよく判らないものである。

6~12はクシ状工具などによる刺突文である。12のみは棒状工具によって描かれた文様である。

13~20はクシ状工具、貝殻腹縁等による綾沈文のみの破片である。また、16は注口土器の注口付近の破片であり、注口部が抜け落ちた状態のものである。

21~25は基本的に刺突文と平行沈線文で構成された文様を持つ破片である。各個体とも多種多様な組合せである。そして、21の連弧文や24の三角文といったようにその他の文様を組み合わせて構成するものも存在する。また、22のようにヘラ描きで刺突文状に描かれている個体も存在している。

26~30は櫛描の波状文である。どの個体も平行沈線文とセットで施されている。なお、30はかなり崩れた波状文である。



第166図 出土弥生土器実測図④(文様) (S = 1 : 3)

**壺・甕底部 (図167)** 壺・甕の平底の底部である。1は弥生時代前期の壺・甕底部であり、全部で2点出土している。他の底部と異なりやや大きめの砂粒を含む。2は中期の壺・甕底部と考えられる。3~11は後期の底部と考えられる。基本的に底部の径が小さい個体ほど新しいものと考えている。

**鼓形器台 (図168)** 鼓形器台は、擬凹線文の有無で大きく2つに分類している。

1と2は受部に擬凹線文が施された個体である。草田3期に相当する時期のものと考えられる。3~7は受部及び脚部外面に擬凹線文が施されない個体である。時期的には草田4期以降のものと考えられる。3~5は端部等が残っていないため不明なものであるが、草田6期以前(弥生時代)のものと思われる。6、7は端部に面があるので、草田6期以降と推測され、古墳時代前期に入る可能性が考えられる。

8は端部が外折し、面を持つことから古墳時代に入るものを推測され、土師器である。時期的には、松山I期新段階~2期古段階頃に相当するものと考えられ、古墳時代前期後半になるであろう。

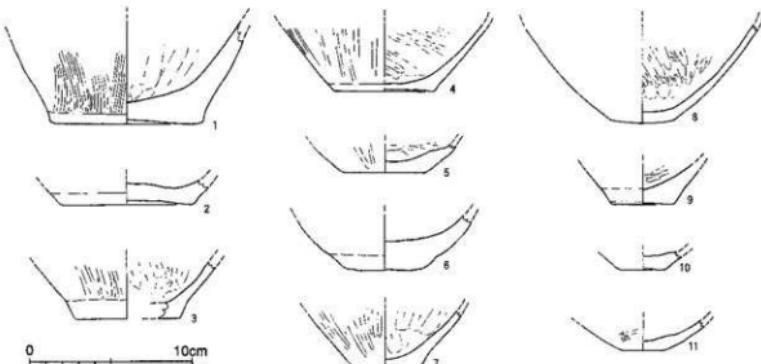
### 6. 土師器 (図169~177)

古墳時代以降に属する土器は多く存在する。なかでも古墳時代前期後半~奈良時代頃までが多く、古墳時代前期前半のいわゆる松山I期最古段階~I期古段階は、ほとんど見られない。出土する器種は壺、甕、高坏、瓶、土製支脚、竈、坏、鉢などが存在する。

**複合口縁壺・甕 (図169)** 古墳時代以降の壺・甕は、弥生時代からの複合口縁と布留式甕の影響をうけた単純口縁が共存しており、また影響しながら変化しており、非常に分類が困難なものであったが、大きく複合口縁のものと単純口縁のものに2分した。そして、単純口縁のものを内溝するもの、外反するものとに細分し、また両者の折衷したような複合口縁が退化しきったものとに分けている。それでは複合口縁のものから記述する。

169図1は口縁がまだシャープで、端部に面を持つものである。1点だけ出土している。時期的には松山I期古段階前後のものと思われる。

169図2~7は口縁が厚いもので、内外面とも複合口縁の形をまだ保っているものである。また、端部に面を持つものである。なお、2~5は甕、6、7は壺である。時期的には、松山II期新段階



第167図 出土弥生土器実測図⑤(底部) (S = 1:3)

前後に相当するものと思われ、古墳時代前期末から中期にかけてのものと考えられる。

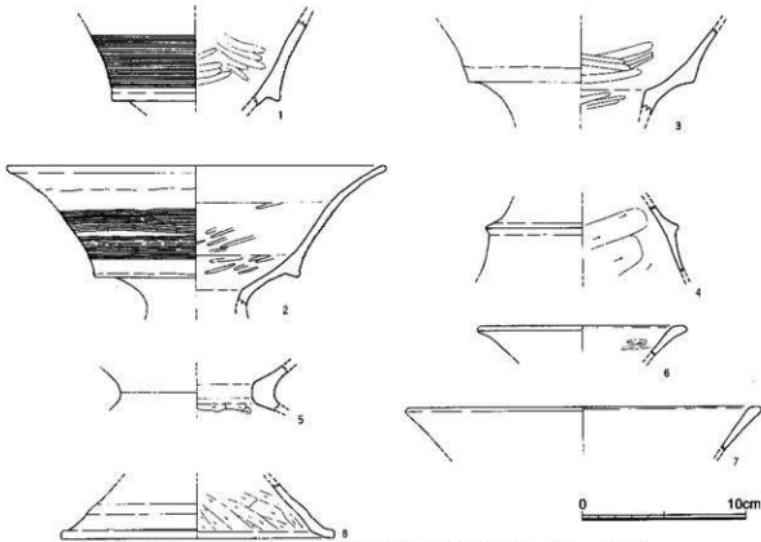
169図8～14は、口縁が厚く、外面は複合口縁の稜が突出せず、内面にまだ段が存在している個体である。また、ほとんどの個体の口縁端部には面を持つ。なお、13以外は頭部が下方に長いことから壺と思われるが、良く判らない。胴部が残っている個体から見ると外面には粗いタテハケが施されているようである。時期は明確にできないが、松山Ⅱ期新段階～Ⅲ期に相当するものと考えられる。古墳時代前期末～中期にかけてのものと見て良いのかもしれない。

疑似複合口縁壺・壺(図169、170) 今回、とりあえず、疑似複合口縁としたものは、複合口縁が退化しきったものから単純口縁と区別が付かないものまでを一括している。その退化の程度によって大きく3つに分けた。時期的には、基本的に古墳時代中期に属するものと思われる。

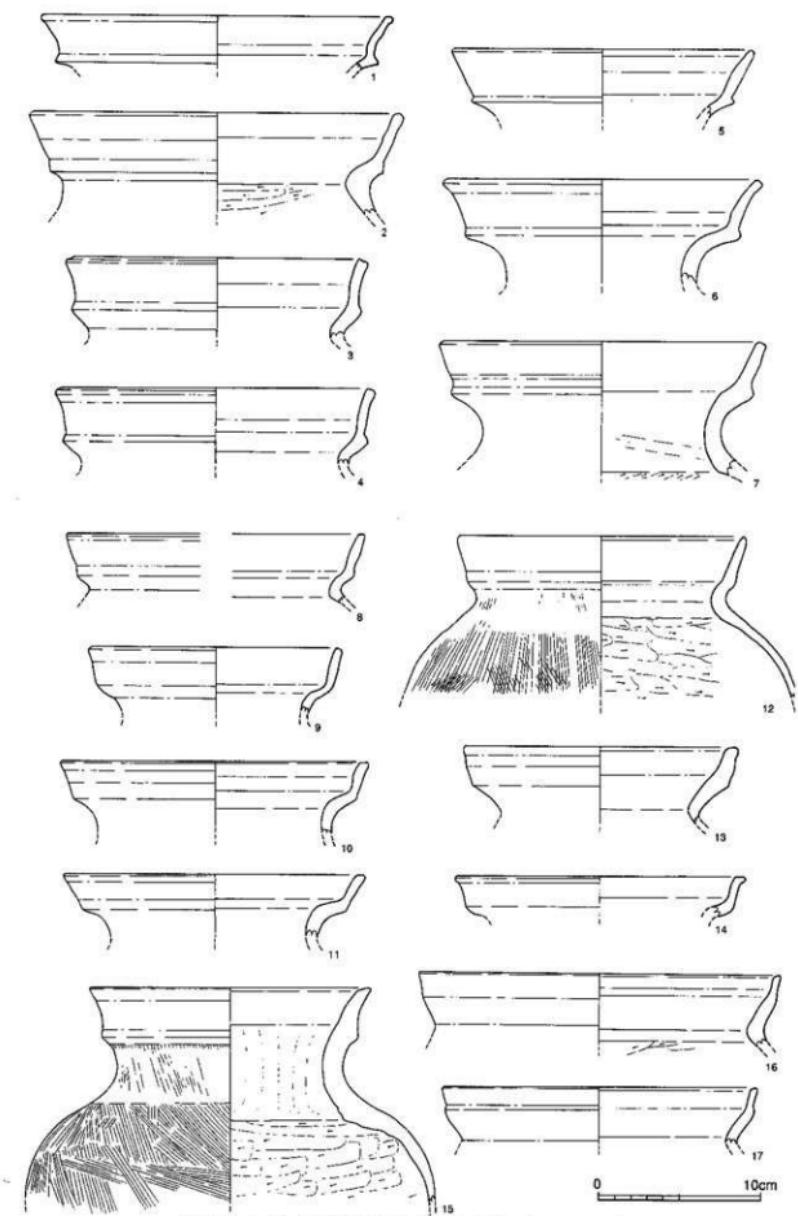
169図16と17は口縁外面に棱を持ち、内面に一応段が残っているものである。器種は、壺のみと考えられる。これらは編年的な位置付けが困難であるが、松山Ⅲ期～Ⅳ期頃のものであろうか。

170図1～6は端部の厚みがやや細くなり、外側に折れるタイプである。また口縁内面には、段が複合口縁程明瞭ではない。器種は壺のみであり、内面の削りは頭部の屈曲部より少し下まで終わっている。また、外面は粗いハケメが施されている。これらも時期的な位置付けが難しいが、松山Ⅲ期～Ⅳ期頃のものであろうか。

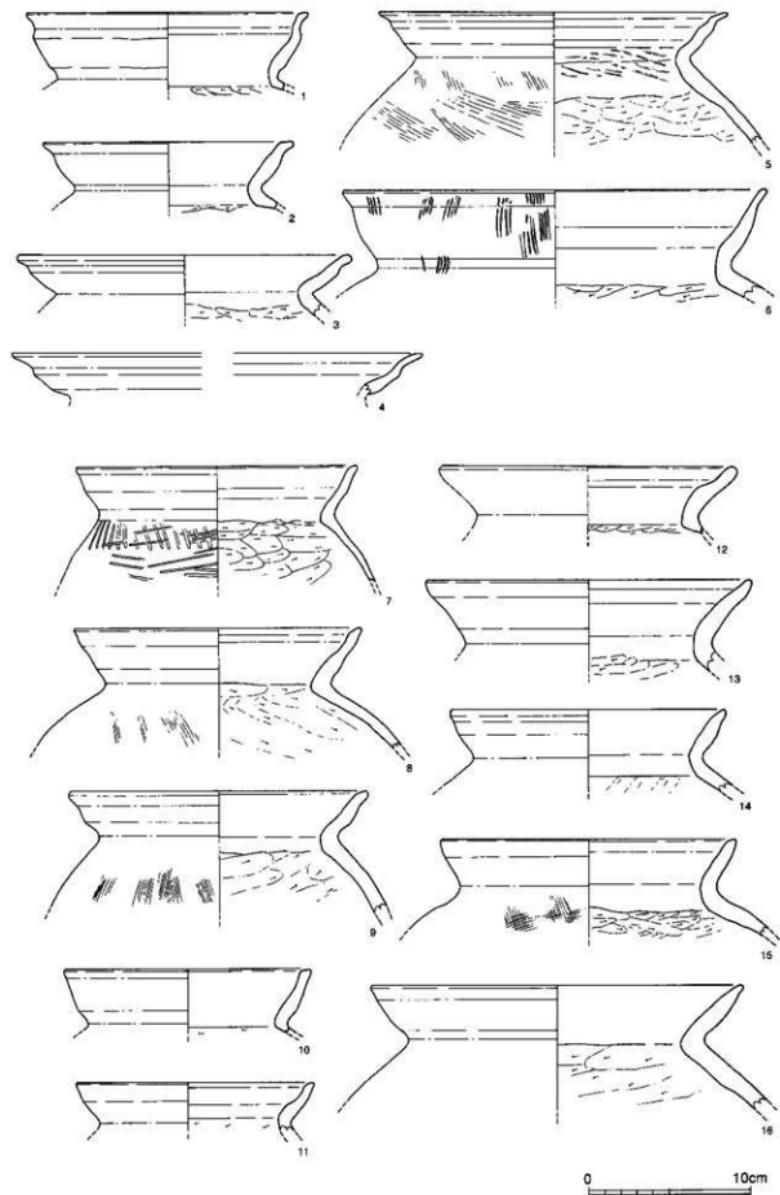
170図7～16は口縁外面に複合口縁の稜が退化した状況や、内面に段の名残と思われるものが認められる個体をすべて一括している。これらは全て壺であるが、バラエティに富んでおり、時期的にもいろいろな時期のものを含んでいるものと考えられる。この中で7は、口縁の厚さが薄く複合口縁の退化したものと捉えるよりは、内湾する単純口縁と考えた方が良い器種かもしれない。また、口縁外面の稜も頭部を強く横ナデしただけであるかもしれない。この個体の時期的な位置付けは松



第168図 出土弥生土器・土師器実測図(鼓形器台) (S=1:3)



第169図 出土土師器実測図①(壺・壺) ( $S = 1:3$ )



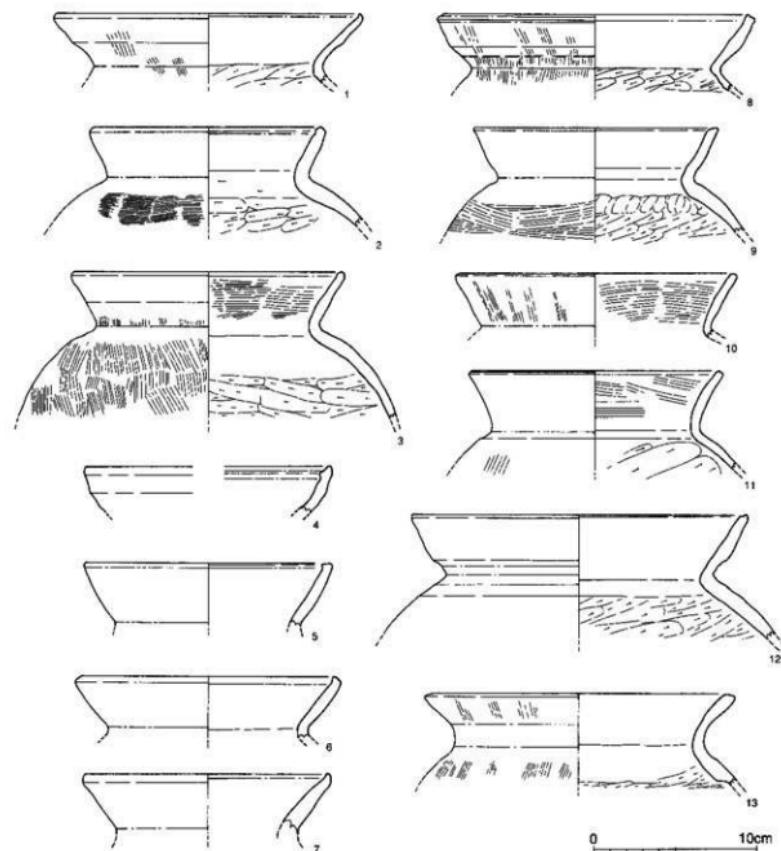
第170図 出土土器実測図②(甌・臺) (S = 1 : 3)

山Ⅱ期新段階前後であろうか。

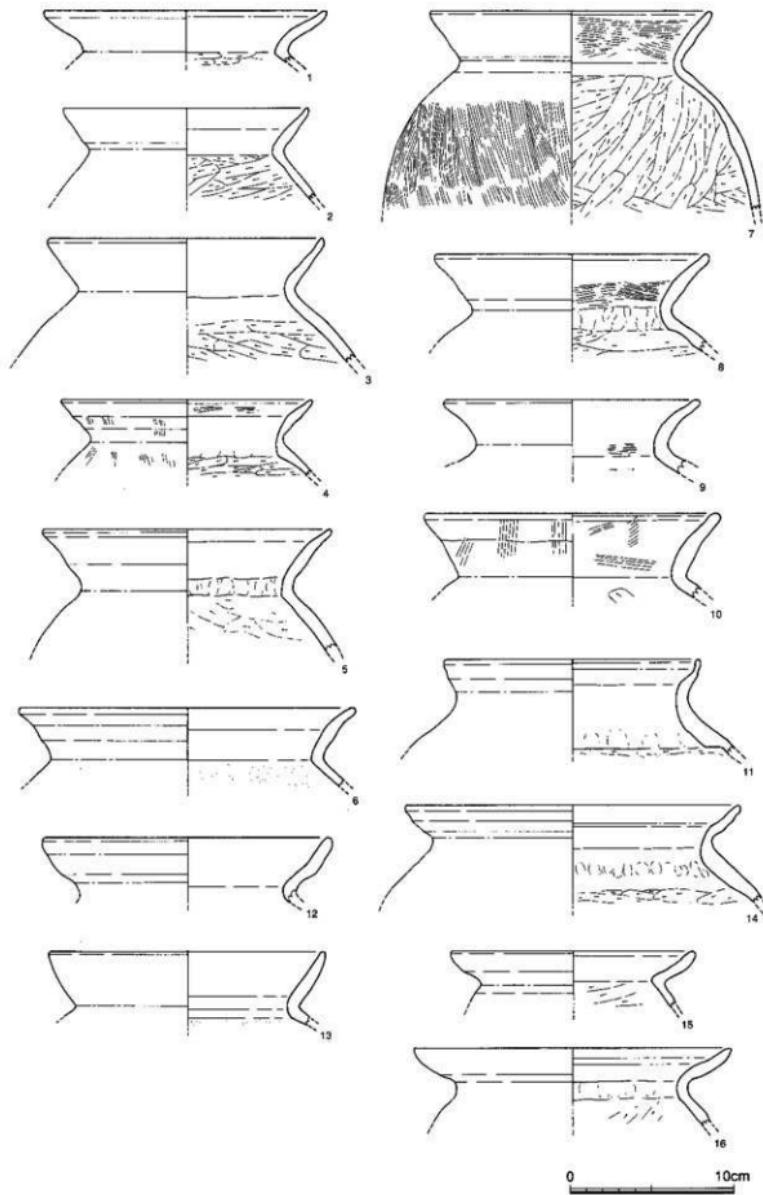
8~16は複合口縁の特徴をまだかろうじて認めることができるもの(8~12)と、内湾する単純口縁と変わらないもの(13~16)とに細分可能もある。これらは時期的には幅があるが、だいたい松山Ⅲ期以降のものと思われる。

**単純口縁甕(内湾)(図171、172)** 単純口縁で「く」の字をなすもので口縁が内湾するグループであり、いわゆる布留式甕も含む。なお、一部で口縁が外反するものや疑似複合口縁と判別が難しいものも見られたが、大きく4つに分類し掲載時には3つに分類している。

171図1~7は端部内面を折り返している個体であり、時期的には幅があるものを一括している。これらは色調や口径から細分も可能であり、黄褐色で口径が大きめのもの(1~3)、橙褐色で口径がやや小振りなもの(4~7)に2つに分かれる。時期的には1が松山Ⅰ期新段階~Ⅱ期古段階、



第171図 出土土師器実測図③(甕・壺) (S=1:3)



第172図 出土土器実測図(4)(甕) (S = 1:3)

2が松山Ⅱ期新段階前後、3が松山Ⅳ期頃と思われ、4～7については良く判らない。

171図8～13は端部に面を持つ個体であり、中には端部が沈線状に窪むものも存在する。これらも時期的には幅があるものと考えられる。また、10、11のように外反するものに近いものや、12のように複合口縁状に見られるものが存在する。時期的にはしっかりと内湾する8、9は、松山Ⅱ期古段階頃のものと考えられる。そして、端部内面が若干内湾気味に見られる10、11は、松山Ⅳ期頃と思われる。また、色調が橙褐色の12、13は位置付けが難しいが、松山Ⅲ期～Ⅳ期頃のものであろうか。

171図1～16は、端部に折り返しや面を持たない個体を一括したものである。これらはバラエティに富んだものであり、時期も幅があり細分可能なものである。1～6は外反に近いが、口縁端部が内湾気味でシャープになるものである。時期的には1が松山Ⅱ期新段階前後と思われ、2、3がそれに近い時期、4が松山Ⅳ期頃、5、6が松山Ⅳ期以降であろう。

7～10も外反に近く口縁端部が内湾気味のものであり、端部が丸くおさまるものである。これらは、だいたい松山Ⅳ期頃と思われる。

11～16は口縁がしっかりと内湾し、やや厚く色調が橙褐色のものである。11は複合口縁状のものである。12と13はやや直立気味の口縁で松山Ⅳ期前後と思われ、14～16は、口縁が外に傾くタイプで時期は良く分からぬ。

**単純口縁型（外反）（図173～177）** 口縁が外反するグループである。細分は当初大きく5分類して、掲載時に口縁部の長さ、厚さと肩の張り具合（胴部の最大径の位置）を再検討し、若干変更した。また、やや小形のものを別に掲載した。

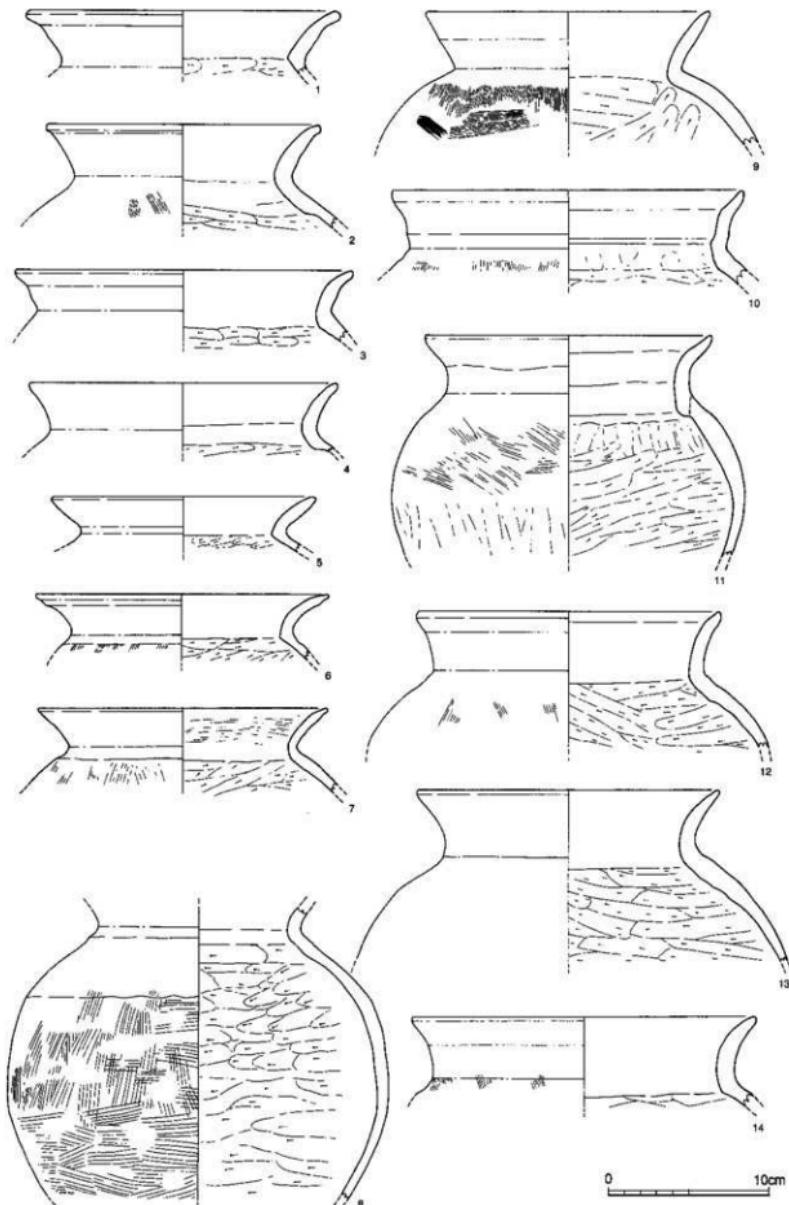
図173～図175は比較的肩が張るものであり、肩の張りと口縁部の長さと厚さで3つに細分したものである。また、図176は基本的に肩部があまり張らないものである。そして、図177は口径が他のものより大きく、均質な砂粒を多く含む個体である。

図173の単純口縁の壺は、胴部が球形に近い形態をとる可能性があるものである。おそらく8のような胴部形態になると思われるが、口縁部付近の個体が多く実際には不明なものである。時期的には、おそらく松山Ⅳ期頃を中心とするものと思われる。

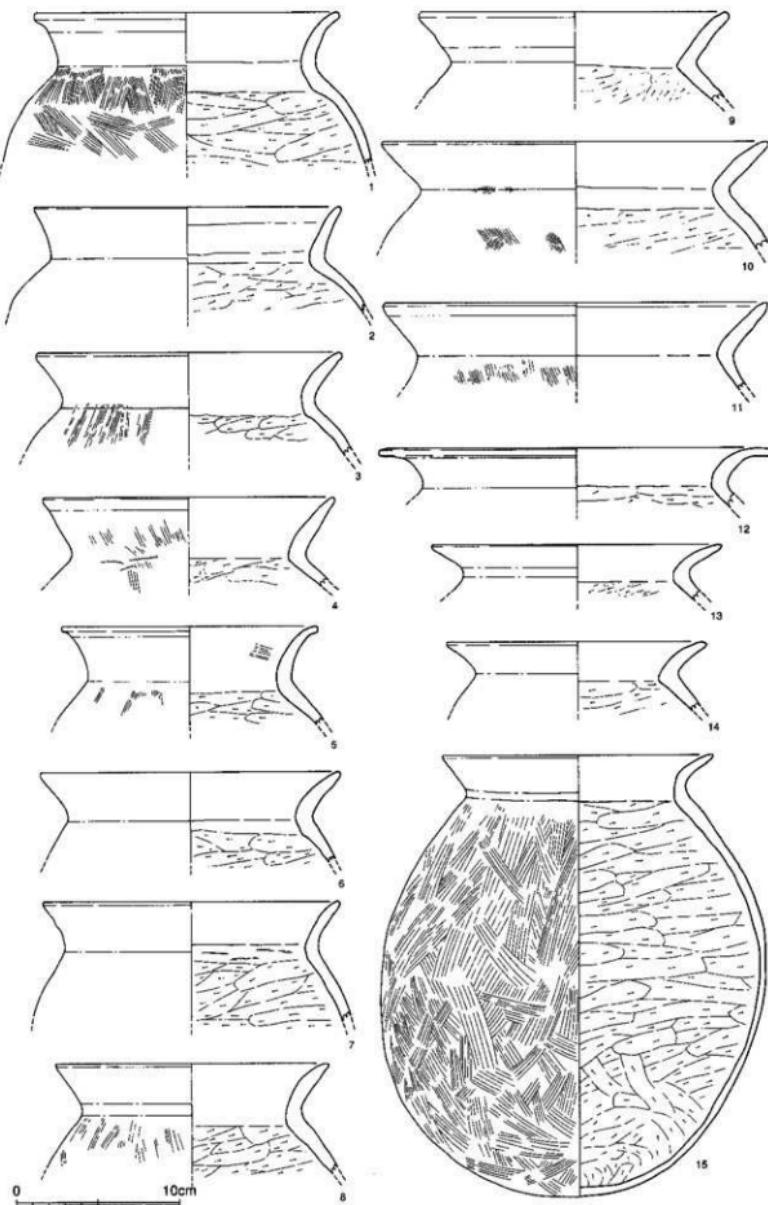
これらの口縁部を見ると口縁が外折するもの（1～7）と直立気味のもの（9～14）に大きく2つに細分できる。また、6、7は口縁端部が尖るものであり、10～14は、口縁端部が内湾気味になるものである。

図174の単純口縁の壺は胴部が球形と言うよりは縦長になったものであり、15の胴部に近い形態をとると思われるものである。また、1～3、9～10の壺胴部は173図8と175図15の中間の胴部形態になるものと思われる。なお、この174図の壺は時期的には良く判らないが、6世紀前半頃と思われる。

これらの壺の口縁部を見ると口縁部が直立するもの（1～5）とやや外折するもの（6～8）、外折するもの（9～15）の3つに細分可能である。また、12は口縁が外に折れ曲がる度合いが大きいもので、やや異質なものである。



第173図 出土土器実測図(5)(壺) (S = 1:3)

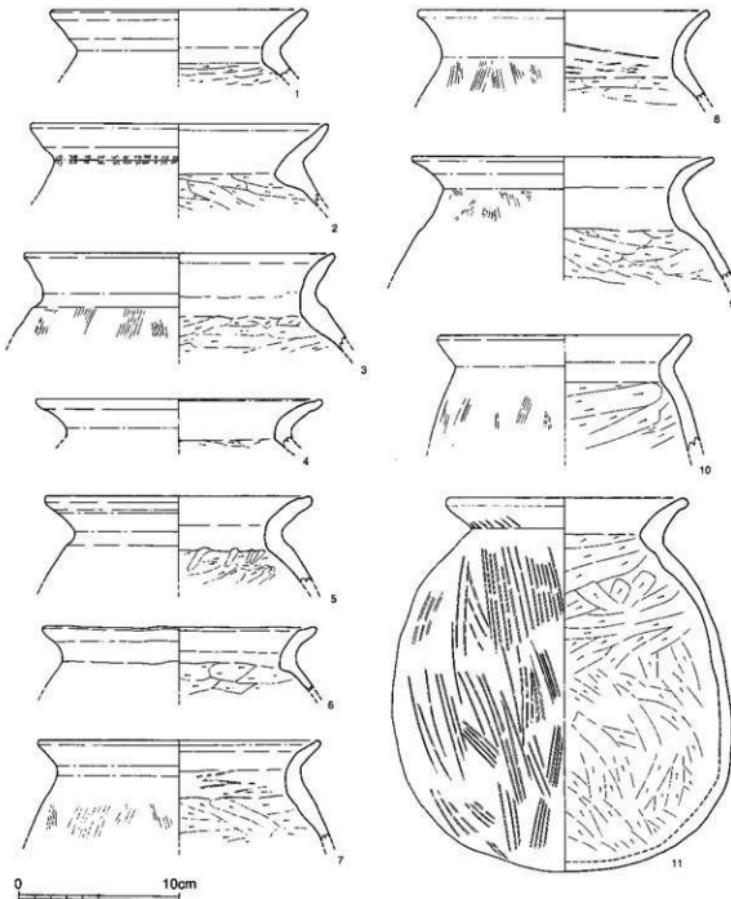


第174図 出土土師器実測図⑥(甕) (S = 1:3)

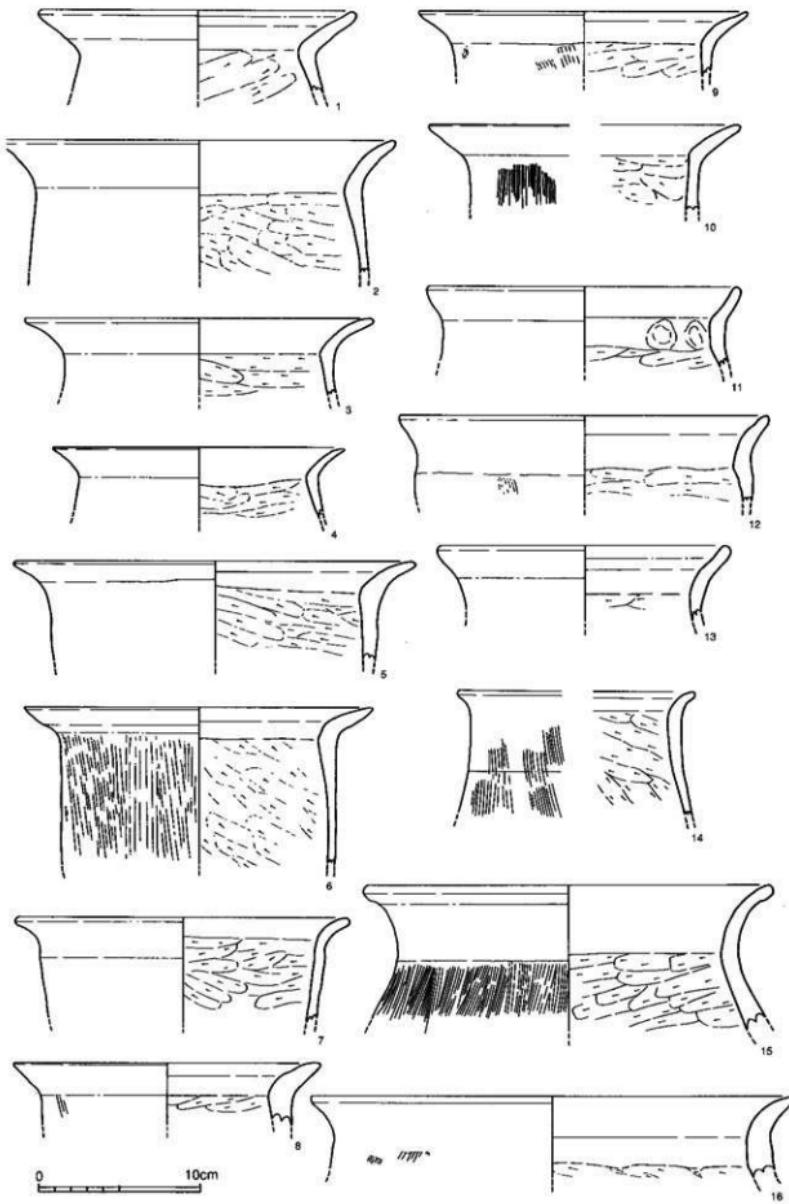
図175の単純口縁の甕は、胴部の肩が張らず最大径が174図15より下方にあるもので、11の胴部形態に近い個体のグループである。そして、口縁部が短く、厚みがあり、胴部も厚いという特徴を持っている。また、これらの甕の時期は明確にはできないがおよそ6世紀後半～7世紀初頭を中心とする時期と思われる。しかし、2の甕については頸部が厚く口縁が内湾気味のもので、やや異質な個体であるから時期が異なる可能性が存在する。

これらの中で、8～10以外の1～7は口縁端部内面が若干内湾気味になるという特徴がみてとられる。

図176の単純口縁の甕は、口縁部の屈曲から胴部が下方にそのままいき、最も胴部が張らないものである。基本的に胴部径より口径が大きいものである。ただし、11～16はやや様相が異なる個体



第175図 出土土器実測図⑦(甕) (S = 1 : 3)



第176図 出土土師器実測図⑧(窯) (S = 1:3)

である。この176図の壺の時期的位置付けは、だいたい、7世紀～8世紀代のものと思われる。これらの壺は胴部がやや外側に開くもの（1～4）、胴部が直線的で開かないもの（5～10）、口縁端部が若干内湾気味になるもの（11～13）、口縁が屈曲しないで胴部が外側に開くもの（14、15）に細分される。また、1はこの中では最も古相を呈するものと考えられる。

図177の単純口縁の壺は、口径が大きく、口縁も長いもので、均質な砂粒を多く含むという特徴をもつ一群である。また、基本的に胴部はあまり膨らまないで、色調が黄褐色の個体である。さらに、口縁内面が内湾気味であったり、外面に稜があるもの等アクセントがあるものが多い、なお、これらの中で4はややこの一群からはずれる可能性も考えられたが、口径が大きいのでとりあえず含めた。

これら的一群の壺は、胴部がやや膨らむもの（1～7）と胴部が膨らまず口縁が長いもの（8、9）に2つに細分できる。時期的には、後者のグループがより新しい可能性が考えられるが確証はない。全体的にこれら的一群は、8世紀代～9世紀頃のものと思われる。

**単純口縁壺（小形）（図178）** この図の壺は、ややこれまで述べてきた壺よりは小形のものを括したものである。当初の分類では、小形の壺としていた個体と壺の中では、小形壺としたものよりは大きい個体を集めている。また、これらは口縁が内湾する個体（1～3）と外反する個体（4～26）に大きく分けられるものである。なお、多種多様なものを集めていることから時期的にも幅があると考えられるが、基本的に古墳時代中期～後期のものと推測される。

1は口縁の上半部が欠けているが、若干複合口縁状になるものである。時期的には松山Ⅱ期新段階～Ⅲ期頃と思われる。2と3は口縁が内湾するものであるが、2は複合口縁の退化した形態にも見える。時期的には松山Ⅱ期新段階～Ⅳ段階頃であろうか。4～10は、当初の分類では、小形壺として分類していたものであり、口縁が短く外に折れるタイプのものであり、胴部もやや膨らむタイプである。時期的には明確には分からぬが古墳時代後期頃であろうか。11と12は口縁が若干立ち上がった後に外反し、端部内面が内湾気味になるものである。時期的には、確実なことは言えないが、松山Ⅳ期頃であろうか。13～18は直口気味のものであるが、17と18はやや異形のものである。時期的には幅があるものと考えられるが、松山Ⅳ期以降と思われる。19～22は、口縁が比較的長くて外反するものである。時期的には松山Ⅲ期～Ⅳ期頃であろうか。23～26は、これまでのグループに入りきらないやや異質な個体である。時期的には23と24が古墳時代後期以降、25と26が松山Ⅳ期前後であろうか。

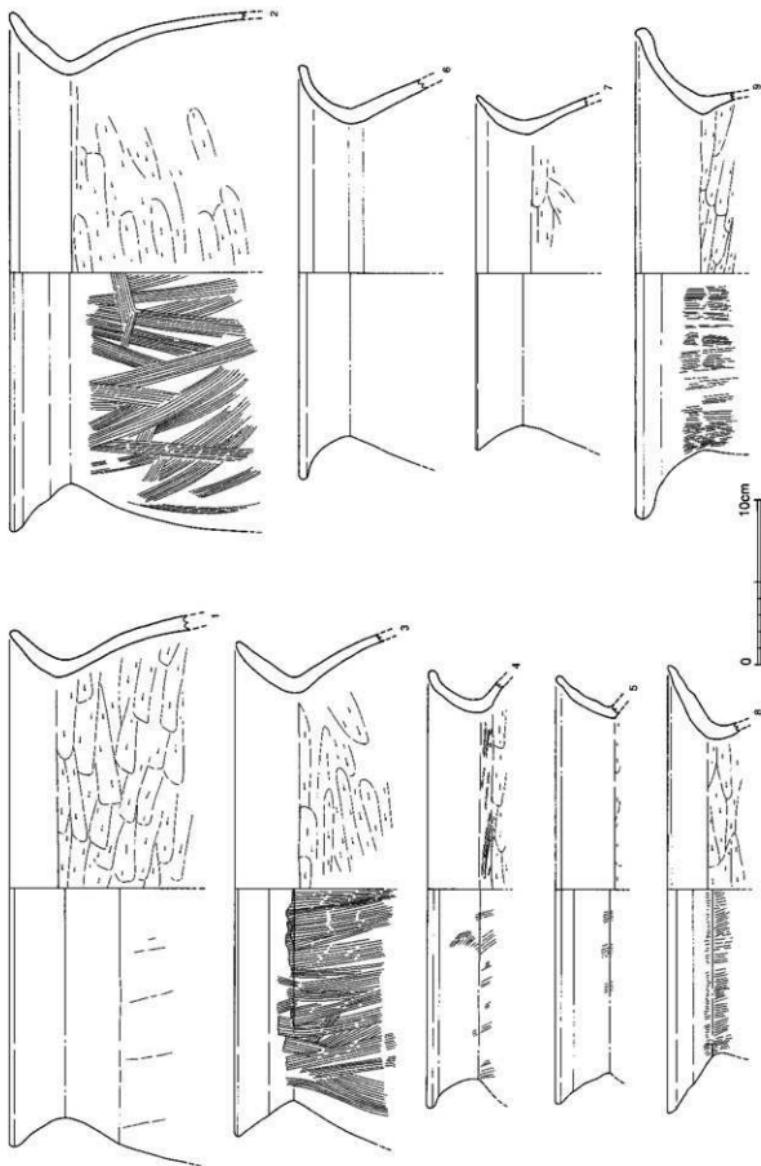
**特殊な壺・壺（図179）** ここで記述する壺・壺は、これまでの複合口縁と単純口縁（内湾・外反）の壺・壺で分類した一群に入らないもので、少数例の特殊な個体である。

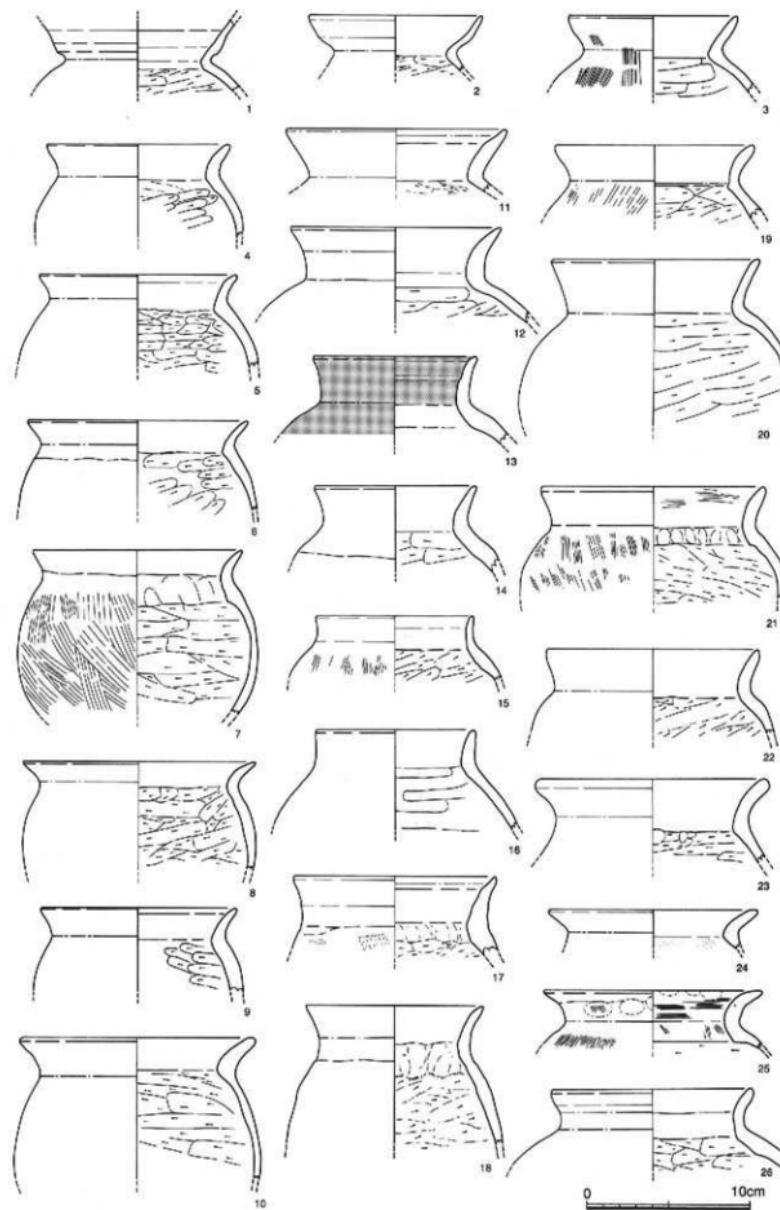
1と2は、直口壺または、広口壺と呼べる壺の口縁部である。これらは、口縁が頸部からラッパ状に広がるもので、口縁端部付近は外に折れ端部に面を広げた壺である。1は口縁内面に黒色の顔料が塗られているものである。2は1より口縁端部にしっかりと面を作り出していないもので、色調は橙褐色である。この2点を比較した場合1の方が古い可能性もあるが、確証はない。

このような壺の出雲地方での類例は、安来市白コクリ遺跡<sup>(12)</sup>、松江市北小原古墳群<sup>(13)</sup>、宍道町上野遺跡<sup>(14)</sup>、斐川町杉沢遺跡<sup>(15)</sup>で確認されている。

また、出土例を見ると上器棺として使用されているものが多いことから、遺跡内に本來土器棺墓が存在していたのか、上方尾根の上野古墳群に関連するものと考えられる。この器種の時期につい

第177図 出土器実測図⑨(縦) (S=1:3)





第178図 出土土師器実測図⑩(小形の甕) (S=1:3)

ては、類例等から考えて松山Ⅱ期前後と思われる。

179図3と4は頸部に突帯を巡らす壺であるが、口縁を欠いている。このような土器は、1、2の壺と同じように土器棺に使用される器種である。このように突帯が付く壺の口縁は、直口になるものや複合口縁になるものが存在するが、今回出土したものがどのような口縁かは不明である。また、時期的には松山Ⅱ期前後と思われる。

179図5は「く」字状に折れる単純口縁であるが、口縁が短く、厚いもので類例の無いものである。時期的にも明確にできない個体である。

**小形壺（甕）（180図1～20）** ここで小形壺（甕）としたものは、口径10cm程・器高10cm程以下の小形の個体になる。

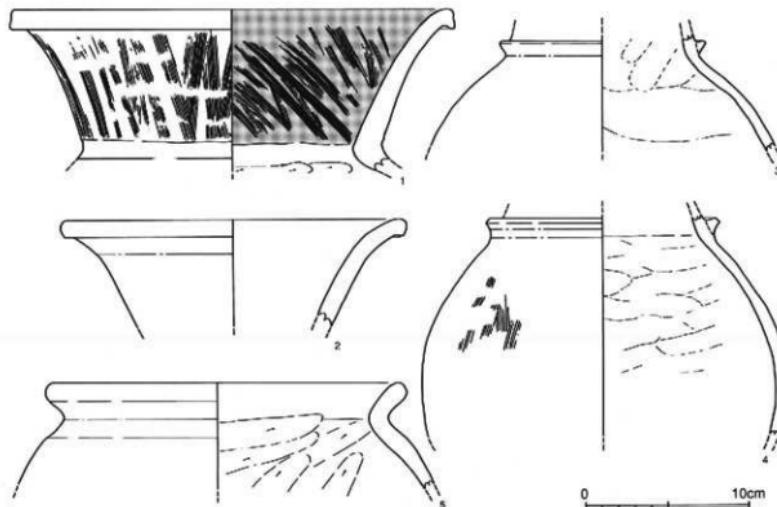
1～6は口縁が長くシャープで外に広がる壺である。完形の個体はないが、胴部に比して口縁部が若干小さい程度のものと思われる。また、これらの一群は、胎土が精製されており、いわゆる「小形丸底壺」の系譜上にあるものと考えられる。これらの個体の時期は、おそらく松山Ⅰ期新段階～Ⅱ期頃になるものと思われる。

7～9は口縁が比較的長いもので、胴部はやや肩が張る壺である。また、7は胎土が精製されたものに近い個体である。時期的には松山Ⅱ期頃のものであろうか。

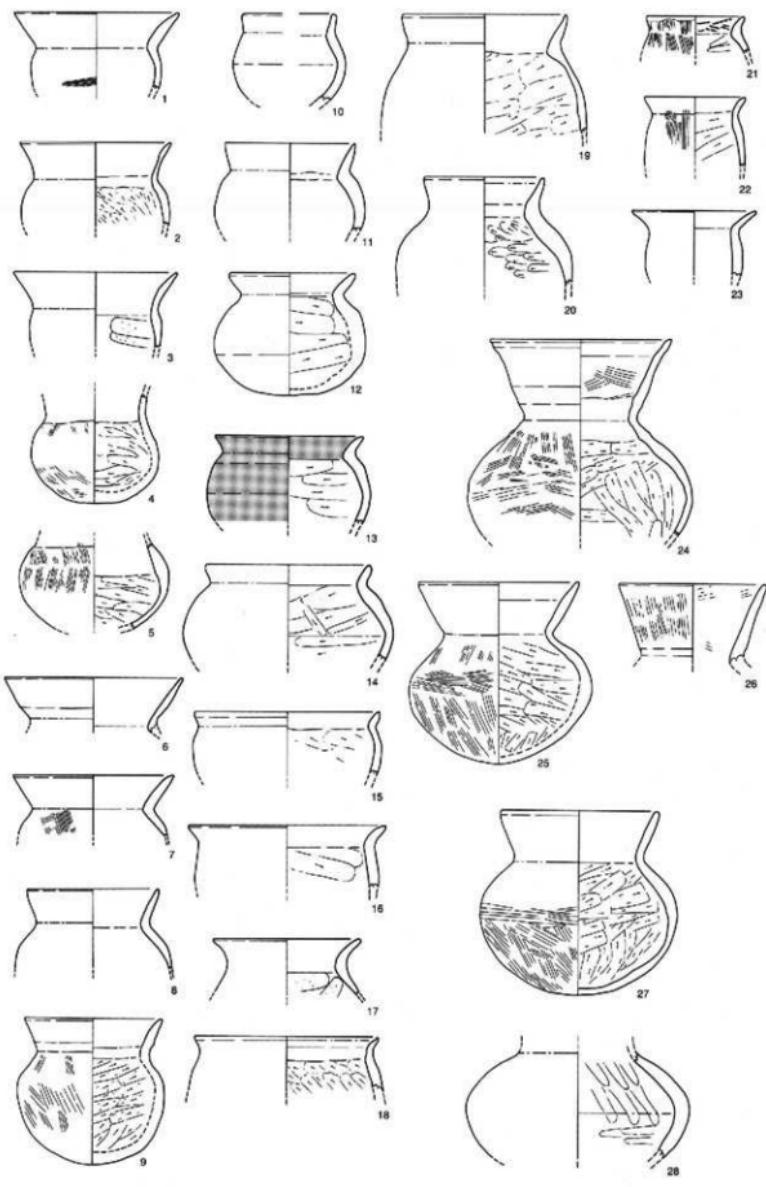
10、11は口縁がやや短くなった壺である。また、10は胎土が精製に近い。時期的には松山Ⅱ期頃であろうか。

12～18は器壁が厚くて外に折れる口縁が短いもので、壺と言うよりは甕又は鉢と呼べる一群である。なお、17と18は口縁や胴部の様相がこの一群の中では異なるものである。

また、180図12～16は細分することができ、肩が張るもの（12～14）と張らないもの（15～16）に細分することも可能である。これらの一群の時期は明確には判らないが、古墳時代後期頃であろ



第179図 出土土器実測図①(壺・甕) (S = 1:3)



第180図 出土土器実測図②(小形壺・甌) ( $S = 1:3$ )

うか。

19、20は直口気味の口縁で端部内面が内湾する壺である。時期については不明である。

**ミニチュア土器 (180図21~23)** 21~23はミニチュア土器であり、胸部があまり膨らまない形態である。時期は不明である。

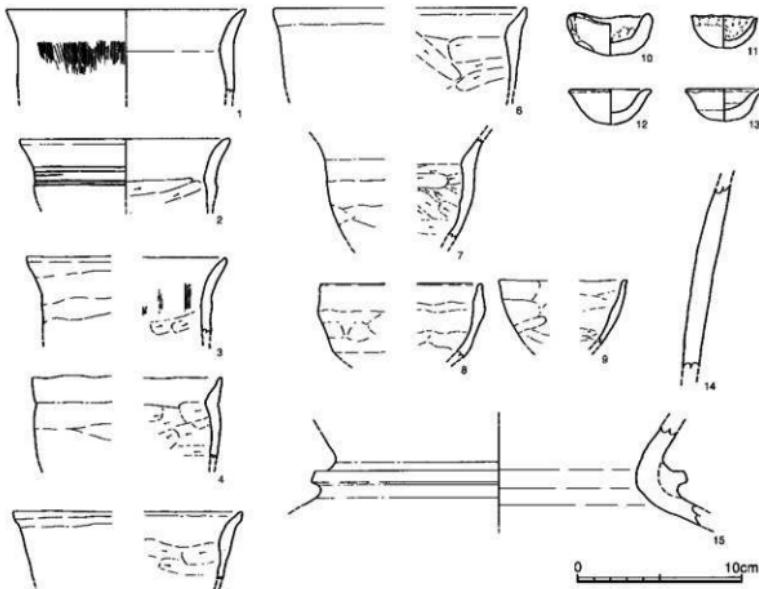
**直口系の壺 (180図24~28)** 24~28は口縁が長めの直口系の壺である。この中で直口壺と呼べる個体は24と28であり、他は器種を壺と見た方がよいのかもしれない。時期については、24が松山Ⅱ期~Ⅳ期、25~27が松山Ⅱ期~Ⅲ期頃と思われるが、確証はない。

**その他の壺・鉢 (181図1~9)** 1は口縁が屈曲しない小形の壺と思われるが、詳細は不明である。また、壺の可能性も存在している。時期は古墳時代後期以降と思われる。2~8は口縁が屈曲しないもので胸部が膨らまない小形の壺又は鉢である。また、3~7は外面が滑らかに整形されていないものである。時期的な位置付けは困難であり、不明である。

**手づくね土器 (181図10~13)** 口径5cm、器高が2cm程の器種である。時期は不明である。

**埴輪 (181図14、15)** 淡褐色の土師質の埴輪片が2点出土している。14は円筒埴輪等の筒部の破片であり、15は朝顔形埴輪の顎部付近の破片である。これらは上方尾根の上野古墳群で使用されていたものが、転落したものと推測される。

**高坏 (図182~184)** 高坏は、完形品として復元できたものは、1点(6)のみであり、全体の形態から検討ができなかった。そこで、分類作業は坏部、坏部と脚部の接続部周辺、脚部の各部位ごとに分類後細分した。それでは、分類や接続技法については、<sup>(註14)</sup>松山智弘の文献を参考にして記述す

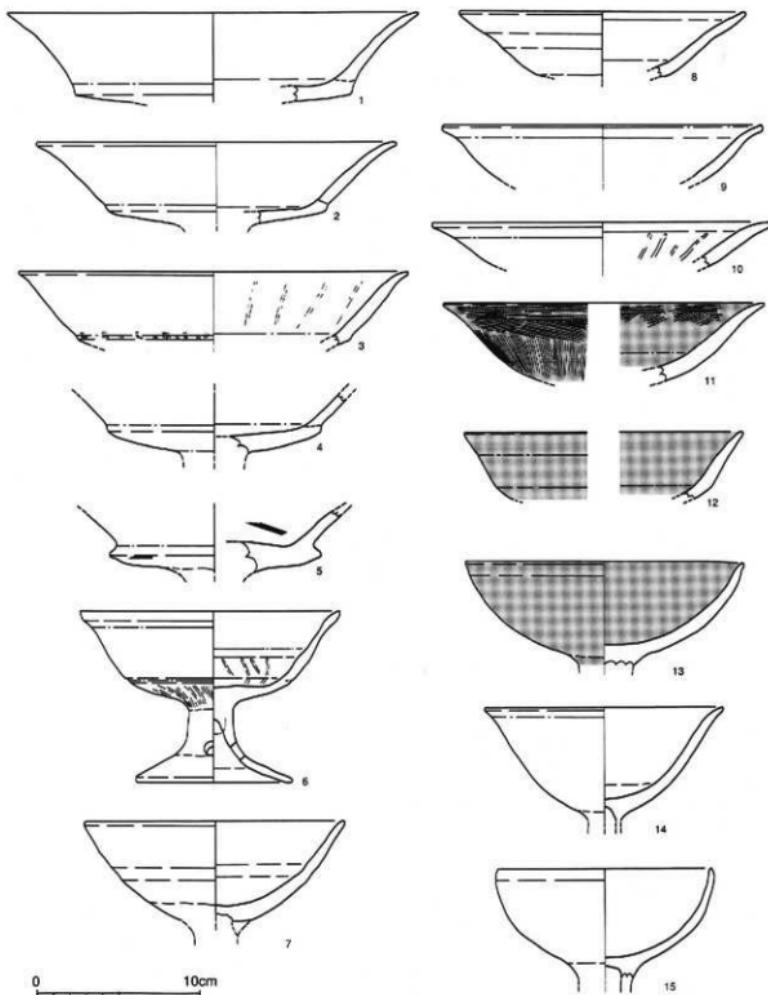


第181図 出土土器実測図⑬(鉢・壺・手捏ね・埴輪) (S=1:3)

る。

高坏（坏部）（図182） 坏部は、坏口縁部と底部の境の段の有無で2つに分けられる。

1～7は口縁部と底部の境に段を持つもので、松山の高坏Bに相当する個体である。坏部の製作は平坦な円盤状の底部に口縁部を接続するものである。出土しているものは、この部分で口縁が剥がれた痕をもつ円盤状の底部が比較的多く見られた。これら的一群は、段がしっかりと認められ坏



第182図 出土土器実測図14(高坏) (S=1:3)

部が浅く大きく外に広がるもの(1~4)と器壁の厚いや異形なもの(5)、段が曖昧なもの(6、7)に細分できる。細分した各グループの周期的な関係は、段がしっかりととするもの(5は除く)が相対的に古いものと推測される。また、段が曖昧なグループで、6はやや坏部が深くなっている、接続技法は $\beta$ であるのに対し、7は坏部の段が痕跡として残るのみで、接続技法は( $\gamma$ )である点などから、7の方が新しいものと考えられる。この一群の時期は、1~4が松山Ⅱ期新段頃~Ⅲ期、5は不明、6は松山Ⅲ~Ⅳ期、7は松山Ⅳ期以降と考えられる。

8~15は口縁部と底部の段がない坏部である。この一群は3つに細分でき、浅くて坏端部が外に折れるもの(8~11)、口縁があまり広がらない立ち上がるもの(12)、深くて楕円形に近いもの(13~15)が存在する。8~11は松山の分類にない形態であるが、高坏Bの退化したものである可能性が考えられる一群である。接続技法が判らないが、8~10の時期は松山Ⅲ期~Ⅳ期、9はⅣ期以降と思われる。12も松山の分類にないが、高坏Bの退化形態と思われる。時期は松山Ⅲ期~Ⅳ期であろうか。13~15は松山の高坏Cに相当するものと考えられるが、厳密に言えば13のみが範疇に入り、14と15は異なるものである。これらの接続技法は、14が( $\gamma$ )と推測され、13と15は確認できない。これらの時期は、松山Ⅲ期~Ⅳ期と推測される。

**高坏(接続部周辺)(図183)** 接続部周辺としたものは坏口縁部が欠けているもので、脚との接続方法が分かる個体である。分類は、接続方法で接続法 $\alpha$ 、 $\beta$ 、( $\gamma$ )の3つに分類した。

1~6は松山の接続法 $\alpha$ で接続されている個体で、坏底部に円盤状の粘土を充填し、刺突痕が認められるものである。これらの中で3は坏部の形態が松山の高坏Bと考えられるが、坏底部の径が小さいものである。なお、他のものについては、良く判らない。また、3~6の個体の接続部外面にはタテハケが施されており、施されていないものよりやや新しい様相が認められる。時期的には、1~2が松山Ⅰ期新段頃~Ⅱ期頃、3~6がⅢ期~Ⅳ期と考えられる。<sup>(図183)</sup>

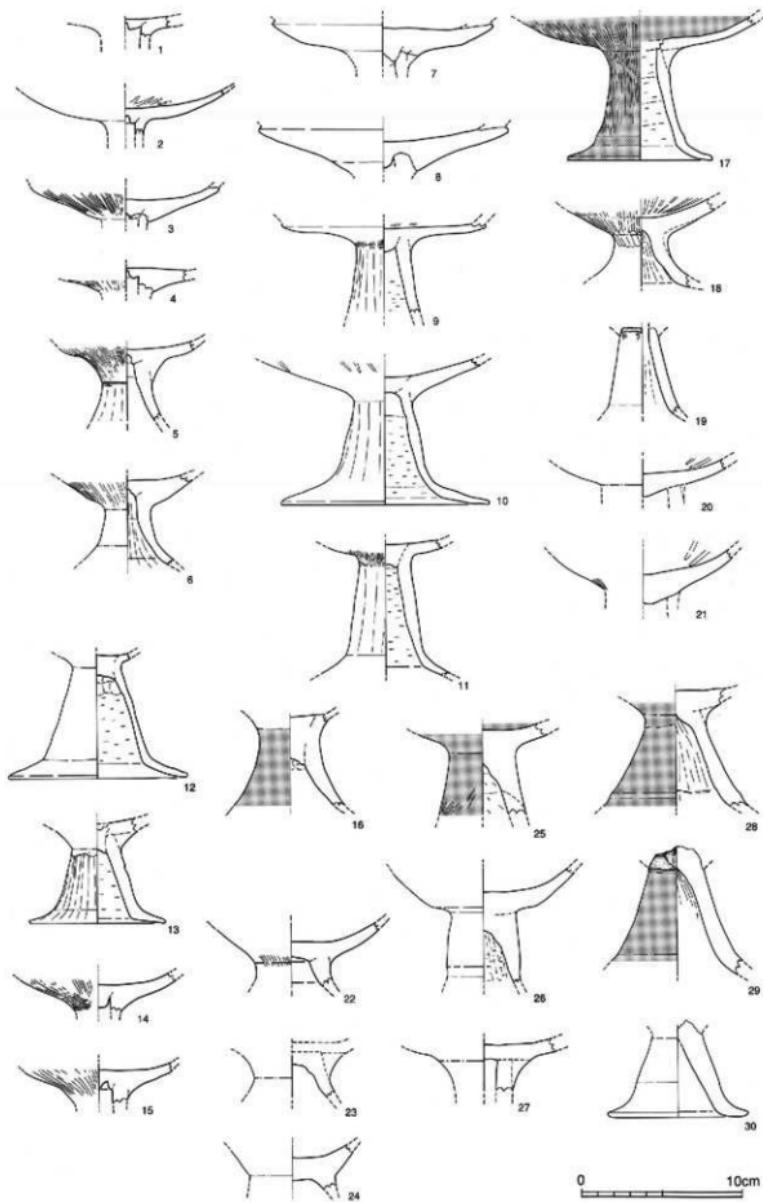
7~16は松山の接続法 $\beta$ で作られている個体で、坏底部に円盤状の粘土充填し、脚内で充填粘土が肥厚しているものである。これらの中で7~9は松山の高坏Bと考えられ、坏底部の径が近似している。また、その他の個体は坏部に段を持たない個体と思われるが、脚部の長いもの(10~12)、短いもの(13)、接続部周辺にハケメが施されるもの(14、15)、脚部の充填粘土が大きいもの(16)といったようにバラエティに富むものである。時期的には不明確な点もあるが、7~9が松山Ⅱ期~Ⅲ期、10~12が松山Ⅲ期頃、13が松山Ⅲ期~Ⅳ期、14と15が松山Ⅳ期、16が松山Ⅳ期以降と思われる。

17~30は、松山の接続法( $\gamma$ )で接続されている個体で、いわゆる「挿入付加」と呼ばれる技法で作られている。なお、松山の刺突痕 $b$ の認められる接続法 $\gamma$ の個体は出土しておらず、どうやら松山のⅢ期~Ⅳ期の特徴である接続法 $\gamma$ で楕円形の高坏Cは、竹ノ崎遺跡では出土していないようである。

なお、この接続技法で作られている個体の脚部を見た場合、非常に多種多様であることから、とりえず4つに細分して検討している。

183図17~19は、接続法( $\gamma$ )の典型的な高坏の脚部の様相を示しているものと思われる個体であり、分類時に $\gamma_1$ としていたものである。ただし、18は脚が非常に短く高坏として考えて良いのか問題が存在する。これらの時期は松山Ⅲ期からⅣ期と思われる。

20と21は脚部が剥がれた個体で、坏底部がやや下方に肥厚する特徴を持つ一群であり、 $\gamma_4$ とし



第183図 出土土師器実測図⑮(高环) (S = 1 : 3)